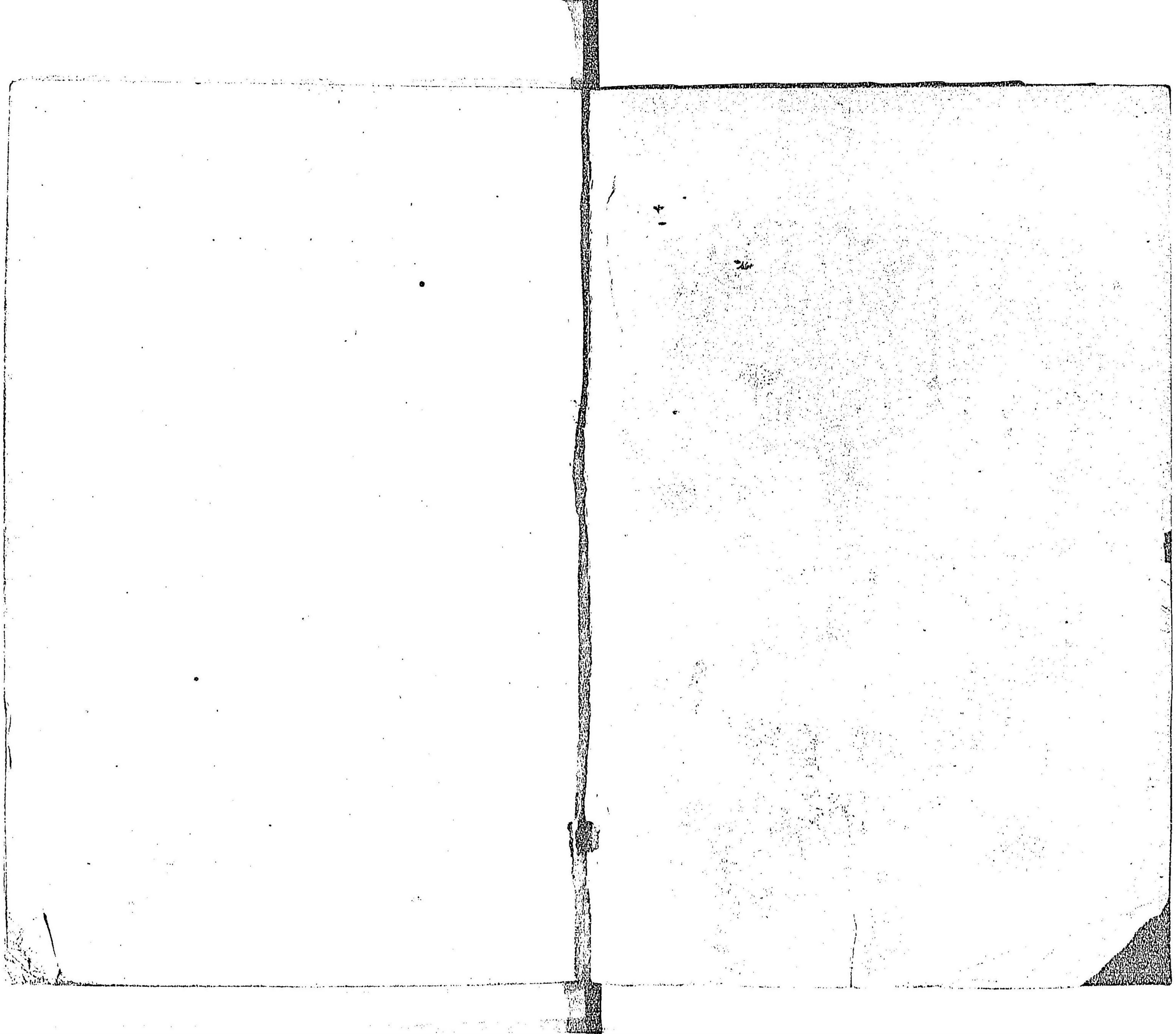




325
7

耶穌
再臨
火



INTRODUCTORY.

IN these latter days so pregnant with signs of His coming, there is great need that there should be a widespread diffusion of God's word upon this subject. Indeed Daniel foretells that "the words are closed up and sealed till the time of the end," and that the wise of that period "shall understand." We believe the gospel age to be the "time of the end," and that we are now nearing the end of "the time of the end," and that the coming of the Lord draweth nigh, hence the importance of a careful study, under the tutorship of the Holy Ghost, of those Scriptures which set forth the second coming of Jesus Christ as King of kings and Lord of lords to rule and reign over this earth for a thousand years.

We commend this excellent translation by our co-labourer, Rev. Jūji Nakada, of Rev. W. E. Blackstone's well-known book to all Missionaries and Japanese Christians as one of the best and most scriptural expositions of that subject that we have ever seen.

Let those who "love His appearing" pray that it may have a wide-spread sale and influence in this land where God is now so wonderfully working to prepare the bride.

Yours in the fellowship of the Gospel, watching and waiting,

COWMAN & KILBOURNE

Oriental Missionary Society
Holiness Bible School,
Kashiwagi, Yodobashi-machi
Tokyo-fuka, Japan.

耶蘇の再臨

目次

耶蘇の再臨	一
耶蘇の再臨とは人の死を云ふに非ず	一七
基督三回の顯現	二五
千年期後再臨説	二九
千年期前説の論證	三一
擧げと顯現	七四
教會と千年王國	八〇
眞正の教會	九〇
患難の時限	九三
復生	九五

目次



審判……………九六

偽キリスト……………一〇〇

駁論の答……………一一〇

イスラエルは回復せらるゝものなり……………一五八

第二の回復……………一六〇

預言の講究……………一七六

實行的教理……………一七九

主の來臨及び教會の將來に關する諸事蹟のこと……………一八三

（擄擧）……………一八五 顯現……………一九二

耶穌の肉体となりて來る事……………二二一

時期……………二二七

目次終

耶穌の再臨

ダブリユー、イ、ブラックストン著
中 田 重 治譯

讀者よ諸君は耶穌の再び世に來臨するを知るや、耶穌基督嘗て宣へらく「我また來るべし」(約十四)と、而して主自身自ら眞理なるを(約十四)以て、其道窮なく存なり(彼前一〇)、天使も「此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦きたらん」(徒一〇)と云へり、天使は主の初め此世に降り給ふべきことを告げたる時の如きは毫も違はざりき(路一〇二六―一三、一八、二〇八―一八)

聖靈も亦使徒の口を藉りて主の再臨すべきことを屢々明言し給へり(撒前四〇、十六、來九)斯の如く權威を以て述べられたる上は此事件は我等に取りて最も重要な事にあらずや

耶穌の初臨せし時は世人の擯斥輕蔑を受けたる一ナザレ人たりしも再臨の時は「福ある所の獨一の權威ある者、諸の王の王、諸の主の主」(提前六〇十)として現出せん。

抑彼の再來する所以は其榮光の位に坐し(太二五)諸の信者に由て讃を受け

(撒後二)公平と正義とを以て地上の萬民を支配せんが爲なり(詩二〇九、賽九〇六、七)鳴

呼麗しき狀なる王を拜するは實に無上の光榮にあらずや(賽三十三)諸君の中に基督信

者にあらざる人ありて「余は如斯事柄には毫も意を留めず」と云ふあらん

か、然らば我等は彼の磔殺せられし救主を救の唯一の希望として諸君に指示せざるを得ざるなり。

余は只管諸君に勸む、諸君正路より迷ひて滅ざらん爲に救主に吻禮せられんことを

彼に信任する者は福なり(詩二〇)諸君若し全世界を得るも生命を失は、何の益あらん

や(太十六廿)耶穌將に來らんとす、而して其來臨の時日得て知るべからず(太二十五)若

し彼今來らば果して如何ぞや。

諸君は平和に之に見ゆるを得る(撒後三)乎、教會は基督と共に天空に在るに(路廿二廿六)

諸君のみは後に殘されて地上に起るべき恐しき患難に遭ひ(路二十一)また諸君は基督

の現出を(撒後一〇)見て、徒らに悲哀し(太二十四)山谷岩石に向つて願くは我儕の上に

墜ち、我儕を掩ふて寶位に坐する者の面を見るなきを得せしめよと祈願せんとする乎

(撒六〇)。

爾の神に會ふ準備をせよ(撒四〇)とはイスラエル人に對する嚴誠なり、

我等は猶太人異邦人たるを論せず皆惠の坐或は審判の坐に於て彼に見えざるを得ず、

因て我等は基督の使者となりて今此の慈惠の時、救の日に於て(哥後六)神に和かんこと

を(哥後五〇二十、路十)諸君に希ふ。余は諸君が罪の赦されん爲め(徒十〇四十二、四十三)且

今より生ける眞神に事へ其子の天より降臨せんことを待ち(撒前二〇)而して我主耶

蘇基督の來らん時、非難せらるゝ所なからん爲め罪を悔ひ心を改めん事を諸君に冀ふ

なり(撒前三)。

左れど讀者諸君基督信徒ならんには余は諸君に基督の再臨を以て、

聖き生活をなすべき眞誠の奨励

として指示せん(約三〇)、耶穌將に來らんとす。諸君よ諸君の地の上にある肢體を

(奸淫、汚穢、邪情、惡念、及貪婪等)殺すべし。そは諸君彼と共に榮光の中に顯はれ

んが爲なり(四三〇)。

諸君は神に背かつ神の眞狀を見るを得んが爲に、心の清潔なる事を勉め且祈るべし

(太五〇八、約三三〇二、三)、諸君よ諸君が潔められん爲め(弗五〇)、且諸君の全靈全生全身共我主耶穌

基督の來らん時迄咎なからんが爲めに(撒前五〇)、道基を求めよ。斯く陳述し來らば諸

君又必ず賤んで曰はん、

「嗚呼、是亦夫の所謂第二のアドヴェンテムにあらずや」

(記者註す第二アドヴェン説は一個の妄説にして基督は何年何月再來するとか)。愛する諸君よ諸君は

と(妄りに時日を定むるものなり此書中第二の來臨又再臨の語を區別し看るべし)。

リヤ(亞十四〇)等許多の預言者と使徒等は(徒十五〇十)基督第二アドヴェンテムを信せしものなりと思ふや。

此説の如く或は再臨の時日を定め、或は種々の臆説を以て此教理に惡名を負はしめたるもの少からずと雖も、我等焉ぞ之を以ての故に此教理を放棄し得べけんや。

然れども諸君或は言はん(余輩も亦多くの熱心なる基督信徒すら此言あるを聞き心竊に憂慮せしことありき)「夫れ或は然らん然りと雖も余思ふに基督再來の事たるや、

余に於て重大なる關係あるものにあらず、余は常に是只死に就ての事なるべしと考るが故に死ぬる準備をさへなさば以て足れり

となす。又此事たる議論甚だ多くして余の厭ふ處なり。又余は是教理は實際的のものと信せざるなり、且此事に關し思慮を費すが如きは謬見の甚しきものと思惟す」。

夫れ然り是獨り諸君のみならず、基督信徒にして尙ほ之に類する言をなす者尠からず、乃ち自ら基督の體と宣言し(哥前十二〇十)、且己に其身を以て一人の夫督に聘定し以て基督

督に厭せん(哥後十)と欲する者にして、尙且、耶穌は其新婦を迎へんが爲に再臨すとの貴き眞理を放棄して顧みざるものあり(約十四三、弗)。

オ一愛する諸君よ、斯の如き言を吐きて諸君を慰安する所の眞理を失ふ勿れ、請ふ諸君自ら筆を執り聖書中此事に關する章句を標記し視よ、書中此事に就て言語を費す其多き思ひ半ばに過ぐるものあらん、聖靈已に斯く迄此事を重するに於ては吾人豈に之に注意せざるべけんや、道は我等を誡めて(撒前四)此に注意あらんことを促し(七、黙一三)又此事に注意せざるものは罰せらるゝの恐ありと固く誡めたり(六、路十二四十五、四十二一七、撒前五)。

我等は望む諸君本書に於て實際的教理と題せる諸章句を吟味せられ、耶穌並に其使徒が我等をして豫備、儆醒、悔改、忍耐、兄弟の愛に導き傳道に忠實ならしめん爲めに數々此教理を用しを見、而して後之に勝りたる實際的教理なきを斷定せんことを。聖書中に此教理の如く我等をして希望、喜悅及び誇の冕(撒前二〇三)を得んが爲に己

れが肉を釘け心神を擧げて神に歸し、靈魂の爲に働かんと欲する意志を起さしむるものは決して他にあらざるなり。何となれば此教理の教ふる所は「我儕の國は天にあり我儕は救主即ちイエス、キリストの其處より來るを待つ、彼は我儕の卑き體を化て其榮光の體に象らしむ」(腓三〇二十)と云ふにあればなり。又此教理は我儕子とならん事即ち身體の救はれん爲の歎に我等を導く所のものなり。(羅八〇廿三、路二二二)此教理は我等に示すに此世は難破したる船舶の如くなることを以てし(太七〇十三、十四、二〇三九、三)以て我等を奨励し世人を救はんが爲に全力を盡して働かしむ(哥前九〇)、當今傳道者の多數は皆此教理に勵まされ而して其業務は實際的のものなり。使徒ペテロ曰く「預言者の確言吾儕にあり是言は暗處に輝る燈の如きものなり夜の明るまで明星の爾曹の心の中に出るまで之を顧みば善」(彼後一)〇十九と、且これらの言を記憶せよと勸めたり(彼後三〇)、左れば我等の預言を學ぶや祈禱の精神を以てすべく空論に陥るべからず。然るに諸君は又問て曰く、

此等の預言は皆無形上(精神上)より解釋を下すべきものにあらずや、即ち此降臨は我儕の改心に際し基督を受る事と聖靈の證を得たる事を指すにあらずや、或は此降臨は基督が教會を統治するを言ふにあらずや」。

否々是れ決して然らず、請ふ少く熟思せられよ、諸君は基督が預言の文字通り降臨せし時、猶太人の彼を拒絶せしを咎めながら其再臨に關し文字通りに預言の應せん事を拒むが如きは豈自家撞着の説にあらずや、我等若し路加一章の三十一節を以て其文字通りに應せりと信せば亦三十二節及三十三節をも同一に信すべきなり、

(卅一)爾孕て男子を生ん其名をイエスキリスと名くべし。

(卅二)彼大なるものと爲りて至上者の子と稱られん、又主たる神其先祖ダビデ王の位を彼に與ふべし。

(卅三)ヤコブの家を限りなく支配すべく且其國終る事有らざるべし。

第三十一節を文字上より解し第三十二、三十三兩節をば精神上の事と解するの矛盾たる事は、或る基督傳道師と猶太人との左の間答に於て明なり。

「新約全書路加傳第一章第三十二節を開き猶太人某問て曰く「此に記す所の事は文字通りに應ずべしと信するや、即ち主たる神其先祖ダビデ王の位を彼に與べきや、又彼はヤコブの家を窮なく支配すべきや」と、傳道師答て曰く「余は之を信せず、然れども是譬喩の語を籍て基督の教會に於ける精神的支配を記せるものと解せば可なり」是に於て猶太人對へて曰く「余は前節に是ダビデの子たる者は處子より生るべしであるとも文字通りに解せざるなり、余思ふに此句は是れ譬喩の語を籍て預言の目的となる人の非常に清淨なる事を形容せしのみと解せば可ならん」と、更らに言を續て曰く「足下已に此荒唐なる三十一節を信す、而るを何故三十二節及び三十三節を文字通りに信せざるか」と、傳道師答て曰く「そは三十一節は事實なるが故に余之を信するなり」と、是に於て猶太人得意の色をなし高聲して曰く「嗚呼足下は事實なるが故に

聖書を信じ余は神の道なるが故に之を信するなり」と。
 借て讀者よ、猶太人の此議論は公平にして且力ある言にあらすや、聖書中には儀例あり形容あり譬喩あり、然れども本文若くは其前後に斯く儀例若くは比喩たるの解説なくんば我等は當に其文字上の意義に従はざるを得ず。
 約翰傳第七章三十八節にある基督の言は、直に次節に於て彼を信するもの、受けんとする聖靈を指して言へるなり。

加拉太書四章の二十四節より三十一節に掲げたる譬喩は聖書の文字上の意義を損せず、却て之を明了ならしむるものなり。

我等はハガル、サラの二人は文字通り實在せしものにしてシナイ山及エルサレムも文字通りなる事を知るなり、我等は文字通り新約の中保たる基督あるを知り(○廿四)天より神の所より降る新エルサレム(黙三〇二二、三)も亦文字通りにして觸知し得べき實現體なりと信す。夫れ然り、我等如何なる理由ありて路加一章の三十二、三十三兩節の

如き、イスラエル恢復の如き、基督再臨の如き、其榮光の王國の如き、其他許多の章句の文字上の意義を夫の千年期後再臨論者の如く拒絶し、精神的に解釋するを得べきや。決して其理由なし、我等故なきに實在を變じて譬喩とするあらんか是神の權力を轉覆するに異ならず。夫の千年期後再臨論者は種々の懷疑論者と自由神學者に向ひ、門戸を開くは主として妄りに文字通り解釋せざるが爲なり(記者註す。千年期後再臨説後に基督再臨する。○今イスラエル人中自ら稱して改革派或は自由派と唱ふるものあり、此人も亦舊約の預言を精神的に解釋し遂に文字通り救主降臨の望を絶つに至れり。近頃其一人記者に謂て曰く「十九世紀は即ち救主なり」と。今や此不合理なる教理は此輩の重なる集會に於て一般に説く所となれり、猶太人すら聖文字上の意義を拒絶して異教徒と異なるなきに至れるは、當今に於ける最も驚くべき徴と云ふべし。○人の子來らん時信を世に見んや(路十八)と、嗟呼聖書中尤も明白なる是等の章句を單に精神的に解釋するは即ち凡の基督教々理の基礎を覆へし、次て人をして全き不信の深淵に

沈淪せしむるにあらざれば「スウヰデンボルジアニズム」の幻想に漂流せしむるものと謂ふべし。

言語にして一定の觀念を顯さずんば何の益あらんや、聖靈は正當に其思想を顯すべき言語を撰びたるや明かなり。亦耶蘇の語りし所の言若し其意を顯はさざりしとせば何故耶蘇は自ら其思ふ事を言語に發せざりしや、我等思ふに耶蘇は正に其言はんと欲せし所を云ひ、且つ其言決して廢らすとは(太二十四)我等の信じて疑はざる所なり。耶蘇曰く「われ律法と預言者を廢る爲に來れり」と意ふ勿れわれ來りて之を廢るにあらず成就せん爲なり。又曰く「天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂げ盡さずして廢ることなし」と(太五〇八)

基督既に降臨して苦難を受るメツシヤ(詩二十二〇)に關する預言をして文字通りに應せしめられたれば、何ぞ將來再び臨て全勝と權威とを以て、支配する榮光のメツシヤに關する預言をして(詩二〇、七十二〇、但七〇十三)應せしめざる事あらんや。諸君請ふ苦難を受

くるメツシヤの事を記せる許多の預言を考一考せば、此等の預言は皆既に文字通りに應せしを知るべし。我等は之を見て此等の預言は皆道の眞理なると神託に出づるの證として信するなり。今左に其預言を掲げん。

處女より生まるゝ事(賽七〇)

ベツレヘムに生まるゝ事(米五〇)

幼童の虐殺(耶卅一)

埃及より呼出さるゝ事(何十二)

聖靈を以て膏沃がるゝ事(賽十二)

エルサレムに入る事(亞九〇)

友の爲に賣さるゝ事(詩四十一〇九、五十)

弟子の彼を棄つる事(亞十三)

銀貨三十枚に賣さるゝ事(亞十二)

製陶師の田園買上げらるゝ事(亞十一)

唾され嘲笑さるゝ事(賽五十)

酬と膽の事(詩六十九)

手足共に釘刺さるゝ事(詩二十二)

衣服を分つ事及鬮引する事(詩二十)

骨の一だに破壊されざる事(詩三十四、四十、出十二、四十六)

貧困と苦痛と忍耐と死去の事(賽五〇)

此他之に關する章句甚だ多し。

是等の預言は皆既に基督の降臨に依て其文字通り應じたるものなり、然らば基督の再臨と地上に於ける其榮光の支配を記載せる許多の預言を以て文字通り應ずべからずと爲す勿れ、即ち、

基督は自ら來臨し給はん事(撒前四〇)

彼は號令し給はん事(撒前四〇)

死者は彼の聲を聞かん事(約五〇)

復活しまたは變貌したる信徒は主に遇わん爲め空中に携へられん事(撒前四)

彼は信徒を受納れ給はん事(約十四)

彼は目を醒し居る僕に給事し給はん事(路十二)

彼は地上に再臨し給はん事即ち(徒一〇)其之より昇天し給ひし橄欖山へ(亞十四)焔火中に

(撒後一)權威と大榮光を以て天雲の中に(太二十四、卅、被前)又地上に立たん事(伯十九)

彼の聖徒(教會)は耶蘇と共に降來すべき事(申卅三、二、撒前)

衆の目耶蘇を見る事(七、一〇)

彼は偽基督を滅ぼすべき事(撒後二)

彼は其位に坐すべき事(太二十五、卅)

各國民皆彼の前に招集せられ而して彼之を審判せん事(太三十二)

彼はダビデの位を襲ぎ給うべき事(路二〇廿二、結廿一〇廿)

是正に地上に於てあらん事(耶二十三)

彼は一王國を得て(三、十四)其衆聖徒と共に之を支配すべき事(世七〇十八、二十二)

列王列國 盡く彼に服事すべき事(詩七十二〇十一、賽四十九)

此世の王國皆彼の有となるべき事(十一〇〇十五)

人民悉く彼に來集すべき事(創四十)

各人膝を彼に屈すべき事(賽四十五)

人民來りて王耶蘇を拜すべき事(亞十四〇十六)

彼はシオンの府を建つべき事(詩百二)

彼の王位はエルサレムにあるべき事(耶三〇十七、賽卅)

十二使徒は各自位に坐しイスラエルの十二支族を審判すべき事(太十九〇廿八、路廿)

耶蘇は萬國民を支配すべき事(詩二〇八、九)

彼は審判と公義を以て支配すべき事(賽九)

エルサレムの神殿は再建せられ主の榮光此に來らん事(結四十〇、四十八〇、四十三)

主の榮光の顯はるゝ事(賽四十)

荒野變じて良田となるべき事(賽三十二)

砂漠は薔薇の如く花咲くべき事(賽三十五)

而して彼の止まる所に榮光あるべき事(賽十二)

是他列擧すべき事甚だ多し。

右等の明瞭なる預言は決して譬喩の語を籍りて精神的に解釋すべきものにあらず、我等は當に耶蘇は始めて降臨して之に關する預言を應せしめし如く、再臨して右等の預言をも文字通り應せしむべしと望むべきなり。

基督の再臨とは人の死を云ふにあらず

基督の第一の降臨は猶太人をして死に至らしめん爲にあらず、彼等も亦斯の如く解せ

ざりき、基督の再臨も亦基督信徒をして死に至らしめんが爲にあらず信徒も亦此の如く解すべからず。耶蘇は約翰傳第二十一章に於て、人の死と其再臨とを頗る明に區別せり、耶蘇は彼得が如何にして死すべきやを彼に告げ、且之に對して約翰に就ては彼が存へて我來るを欲せば爾に何の與あらんやと言へり。是則ち約翰は死せずして耶蘇の再臨迄生存せんとの意なり。諸弟子は皆悉く耶蘇の言を以て約翰の不死と解し約翰は死せざるべしと公言せり。

死は敵なり(哥前十五)而して基督再臨の日至らば我等は死より復生し死と墓とに勝ち凱聲を擧ぐることを得べし「オ、死よ爾の刺は安くにあるや陰府よ爾の勝は安に在るや」(哥前十五の廿三、五十四、五十五)。

譬へば、我等忠信ならんが爲に我生命を失とも我等若し死に至る迄忠信ならんには、基督は我等に約するに生命の冕を以てせり(黙二〇)。然れども、人の死に付ては樂園(Paradise)に於て偕に在るべしとの外、別に約せられしものなきを以て(路十六〇

三〇四十三、撒後二〇)其再臨迄は我等素より之を受くるを得ざるなり(提後四〇八)是即ち基督再臨し我等復生の日には凡の物を給はるとの約束ある所以なり(路十四〇四、廿四、廿五)故に吾人は保羅が基督の復生を欣喜せしを見る(腓三〇)保羅は其死に依て衣を脱ぐを欲せず(哥後五)然れども復生に依て衣を着んことを欲せり(哥後五〇四、哥前十五)試に基督再臨に就て言ふ所の章句に於て基督の名字に挿し換ふるに死なる語を以てし、而して其果して好く當るや否を見よ、例へば馬太傳十六〇廿七に「夫れ死は父の榮光を以て來らん」云々。

「死榮光の位に坐する時云々」(太十九〇)「此後死大權の右に坐し天の雲に乗て來るを爾曹見るべし」(太二十六〇六十四)

「視よ死は雲に乗て來る衆の目彼を見ん」(黙一)

「我儕の國は天にあり我儕は死の其處より來るを待つ」と(腓三〇)

讀者若し以上の拔萃を以て例外の章句とせば我等は諸君に望む、基督再臨に係る他の

章句に就て更に基督に代ふるに死の字を以てするの適不適を檢せられん事を。但こ、
 に基督の再臨と死の來ると其趣を同ふする一事あり、即ち我等は何れの時に死すべ
 きかを知らざる事之なり、然れども吾儕盡く眠るにはあらず(哥前十五)とあるを以て見
 れば我等皆全く死せざるを得るは誠に神に謝すべきことなり。然らば我儕の主の再臨
 とは果して死を指せるに非ざる事を目撃するの世あるべきなり。今若し「死は自ら號
 命を以て天より降るべし」と言へるを不當の言となさば(撒前四)「是故に怠らずして守
 れ蓋は死何れの時來るかを爾曹知らざればなり」との言も亦肯するを得ざるべし(太二
 十)何となれば此の如く聖書を漫に解釋するは、主の降臨の著しき眞理を馳け之に代
 ふるに醜惡なる死を以てすればなり。

死は信者の身に取りて實に基督の再臨なりと云ふは餘りに專斷の言なりと謂ふべし、
 我等其然るを知らず聖書も亦爾云はず。これに反して聖書の示す如く、基督の來る時
 起るべき事件は一信徒死したればとて起らず、又主の來る時の如く信徒一人の死を以

て他の死者は復生せず、生ける信徒も化せず。又我等は陰府或は死者の中間の狀態に
 就ては知る處甚だ少し、且默示録六章の九節より十一節に依れば死者の靈魂は主の
 來る時起る所の大審判を渴望することあり(哥前四〇五、提後四〇一、默十一)是を以て見れ
 ば信徒は心靈的に常に基督と偕に在ると雖も(太廿八〇廿三)形体を以て之と偕に住む事
 を得るは(約十二〇廿六)主の降臨に際し復生の後に在るなり(約十四〇三、撒前四)是故に死と主
 の降臨とは同一義なりと信徒に教ゆるは全く聖書の意に背けるなり、ダビデ、ブラオ
 ン師は有名なる千年期後再臨論者たるにも拘はらず、此謬説を排して曰く「たとひ巧
 に論ずるも、利益ある思考の之より湧出するも、各個人の死時を以て基督の來臨とな
 し、而して聖書が信者に教ゆる基督の再臨の教理に代ゆるが如きは最も不適當となさ
 ざるを得ず」と、夫より師は左の如く説明せり、曰く
 耶蘇其弟子の憂愁せる時之に謂て曰く「爾曹心に憂ること勿れ我父の家には第宅多し
 我爾曹の爲に所を備に往くもし往て我なんぢらの爲に所を備ば」其次如何「爾曹直に

我に隨從すべきや死に於て我儕互に相見ゆべきや」とありや、否「又來りて爾曹を我に納くべし蓋は我居る所に爾曹をも居しめんとてなり」(約十四〇)。

「耶蘇の昇れる時彼等天を仰ぎ視たりしに、白衣を着たる二人の人ありて傍に立ち、曰けるは、ガリラヤ人よ何故に天を仰ぎて立てるや爾曹を離れて天に擧げられし此イエスは」何とあるや、「爾曹死せば直に爾曹を其家に伴ふべし」とあるや、否「爾曹彼の天に昇るを見たる其如く亦來らん」と(徒二〇十)。

彼又曰く「此再臨の出來事を教會の期望する經典上の地位より黜けば我等は焉んぞ知らん、是より其實行教義たるの資格と權威とを甚しく毀たんことを。又神の法則は假令我等之を知悉し能はざるも最善のものなることを信せざるや、萬物に於ても天啓に於ても人爲を以て神の配置を少しにても變更することあれば、其始めや多少便益ある如く見ゆるも、其結果は全く吾人の企圖せし所希望せし所に反し、實に豫想外に出づべきことを吾人は信せざるや、是余が此再臨の事に關しても或は斯の如き弊あらんことを恐る、所以なり」。

余は紙數に限りある爲に氏の所論を茲に充分に披萃する能はざるを憾みて止まず、何となれば氏の如き千年期後再臨説を維持せんと力むるに熱心なる人にして、尙死は主の再臨と同事にあらずと質直なる議論あること余の賞讃する所なればなり。況んや主の再臨を以て死と同事となす如きは、眞に之れ復生の大教理を聖經中卓越の地位より貶して殆ど無用の贅物と爲すに異ならざればなり。我等は夫の基督と復生との説教を信じ(徒四〇二、十)且其復生の日は即ち耶蘇が死を滅し(哥前十五〇五)吾儕に勝利を得せしむるの時なりと信じて、死より甦らんと言ふ喜ばしき希望を前途に懐くものなり。即ち基督信徒が「耶蘇基督の顯れ給ふ時(死する時にあらず)我儕に來らんとする恩恵(彼前一)を實驗せんことを希望するものなり。救主の教訓多しと雖も未だ曾て我等は死の爲に目を醒し、かつ準備をなすべしと命を受けざれども基督再臨の時の爲に、目を醒しかつ準備すべしと命せられあるなり」。

是故に我等は我等の大敵なる死は耶蘇の貴き再臨なりとの説に欺かるべからず。
 讀者よ余は此の光輝ある教は讀者に大關係あるものと断定するなり。
 斯く言はば讀者或は言はん「余輩深く是等の事を知らず、且つ之を了解する能はず」
 と、然れども讀者よ、諸君は之を了解せんと欲するか、もし諸君之を欲せば聖書は諸
 君の前にあり、之を繙かば聖靈爾に教ふべし(約十四) 彼は爾に將に來らんとすること
 を示すべし(約十六) 本篇は此眞理を考究するに際し讀者を助けんとすの熱情よりして書
 せるものなり。

讀者よ之を考究せんと欲するか、夫のペシア人の如く自己の爲に之を究めんと欲する
 か(徒十七) 又唯に此一小冊子を讀過するのみならず、聖書を披き聖靈諸君をして眞理
 を會得せしむる迄本書に引證せる章句を講究し、且祈らんと欲するか若し果して然
 せば我等は讀者の必ず光を見ることを得以て靈魂の慰を得べきを信するなり。
 茲に千年期前再臨説に久く反對したる一信者の言ることあり、曰く「余は我生涯中最

も幸福なる一夜を明したり、何となれば、余は昨夜再臨に關する眞理を認識するを得
 たればなり」と、是に於て彼は其心中喜悅に充滿し、今は他の靈魂を基督に誘導する
 ことに盡力するの一人となれり。願くは神今讀者に幸福を賜ひ他の靈魂の爲に盡力す
 るの人となし給はんことを。

基督三回の現出

史上に掲ぐる事實中最も壯大なる事は何ぞ、榮光の主なる耶穌基督の嘗て此世に存在
 し給ひし事なり。

又現時の事實中最も重大なるは何ぞ、基督は今天在りて我儕のために懇成の勞を執
 らるゝ事是なり(來七〇廿五、羅八〇) 又將來に係る事實の預言中最も重大なるは基督の
 將に再び來り給はんとする事是なり。

此等三回の現出の次第は希伯來書九章に於て麗しく之を敘述しあるなり。
 第一は「己を犠牲となして罪を除かんが爲に」此世に顯現たる事なり(來九〇)。

第二は「吾儕の爲に神の前に顯はれんとて眞の天に入れる事」なり(來九〇)。
 第三は「彼は復罪を負ふ事なく己れを望む者に再び顯現て救を施すべき事なり(來九〇)」。基督尙此世に在る時嘗て告げて曰く「我が往は爾曹の益なり」(約十六)と、斯くて此世を去り給へり(徒一〇)又告げて曰く「我爾曹の爲めに所を備に往く」と、主約して言へらく「若し往て我れ爾曹の爲に所を備へば又來りて爾曹を我に納くべし我居る所に爾曹をも居らしめんとてなり」と(約十四)此約ありしは基督の不在中我儕の希望を墮さず快愉を得んが爲なり。
 又曰く「爾曹世に在ては患難を受けん」(約十六)爾曹は嘆き哀しみまた憂るならん然れど我また爾曹を見ん其時爾等の心喜ぶべし」(約十六)。
 主の此世を去るに臨み彼再び來りて我儕を彼に受納れ、且つ我等彼と共に在りて彼が榮光を見んと我儕に約し給しが基督の花嫁なる教會(弗五〇廿)を慰むる事此約束に若くものあらざるなり(約十七)

基督我等に賜ふに

主の晩餐

を以てせるは、包餅を飲み酒杯を擧げて主を忘れざらしめ(路廿二)且主の死を表して其來る時まで及ばしめん爲なり(哥前十一)我等尙地上に在りて旅人なる間は(來十二)此簡單にして愛すべき紀念を抱きて、以て常に之を主の約束の徴證となし、而して其れに由りて以て主の再臨後天父の王國に於て(太二十六)羔の婚筵を開き我等と共に新しきものを飲み給ふの日來らん事を仰望するなり(太廿二)故に我儕は約束の者を受ん此の晩餐式は實に是れ主の約束をして、常に心裡に想起せし信仰の目を其再臨に向けしむるものなり「蓋約束せし者は誠信なれば也」(二廿五)故に我儕は約束の者を受んとせば信仰と忍耐を用ひざるべからず「今片時ありて來る者きたらん必ず遅らじ」(來十)博士ダビデブラオン曰く、基督の再臨は恰も眞に

教會の北斗星

の如しと、又使徒保羅は之を稱して「望む所の福」と云へり(多二〇)。
 耶蘇も使徒も又預言者も皆力を極めて此貴重なる事項を聖書中に論述せり、紀元の初
 年より二百年間は彼の師父及教會は孰も主として其希望並に安慰の源泉を皆此の再臨
 に取れり、而して其頃耶蘇は千年の間其聖徒と共に此世を管治せんが爲め、榮光を以
 て降臨すべしとの信仰を抱がざる者殆んど之れなき程なりし。

然れども第三世紀に至り一教派起る、アリジシ其長たり、此派の人々は聖書を靈的に
 解し千年期の如きは全く之れを排棄するに至れり。この解釋法は後世に至りマーチン、
 ルーサー、アダム、クラーク及其他の註解者によりて甚しく攻撃せられ餘地なきに至
 れり。

コンスタンチン帝聖教に改宗して羅馬帝國も一時は名義上基督敎國と爲るや、世人多
 くは之を以て千年期既に來り王國(基督の)既に地上に現出すと思惟せり、是に於て乎敎
 會は俗世と共に暗世の中に沈淪して遂に第十六世紀に至り、宗教大改革者輩出し再び

基督再臨の恵約あるを説き以て長夜の迷夢を破れり、此時よりして久しく世人の願み
 ざりし再來の事も、漸く人の好んで攻究し、且つ演説する所となれり。二百年前より
 今日に至る迄は此説(十字架に釘られし救主を單に信仰するに由りて救済を得べしと
 の説と共に)殊に人の貴重する所となり、初代教會の信仰の如くなるに至れり。吾人
 は焉ぞ神を讚美せずして可ならんや、誰か云ふ是れ前と後との雨を得るが如くならず
 と(雅五〇)。

然るに第十七世紀の頃に及び、更に一新謬説の教會中に侵入せる者あり、何ぞや

千年期後再臨説

是れなり、此説たる英國の神學者ダニール、ホイトペーの構成せる所にして、氏は之
 を以て一の新假定説なりと自白せり。其説に曰く、教會は繁榮擴張して全世界の人
 民悉く基督信徒と爲るまでに至るべし、斯く教會が勝利を得るは、則ち所謂千年期
 を組成するなり、而して耶蘇は此千年期の後に非ざれば再臨し給ふことあるべからず

と。氏自ら此説を以て一の新假定説なりと稱ふるは決して怪しむに足らず。何となれば氏は其著書口碑論中に論證して曰く、千年期説即ち聖徒は一千年間此世を支配すべしとの説は、凡そ二百五十年間基督教徒の重立たる人々の中に流傳せし者にして、第二世紀及第三世紀の頃に於ては使徒師父中之を以て、是れ我主並に其使徒等より發したる傳説なりと唱道する者尠からざればなりと云へばなり。

此小冊子中充分に記述するの餘地なきを以て讀者は宜くテイ、テイ、テイ、テイ、テイの著「教會の聲」と云ふ書に就き古來教會史上に著名なる證人の證論を見るべし。所謂證人とはヘルマス、シアスチン、マーター、ルーサー、メランクソン、ミード、ミルトン、バーチット、アイザック、ニウートン、ウアット、チャアレス、ウニスリー、トブレデイ、及其他の數氏にして、此等の人々は過る一千八百一年間に於て基督千年期前再來の眞理を非常の勢力を以て證明せり。

其證據此の如く明瞭なるに教會は使徒師父等の言論並に其信仰を棄て、之を顧みざるは實に怪しむべきなり。然るに千年期後説は新出の説なるに係はらず、早や教會中に竄入したるのみならず、牧師信徒の多くは皆此謬説を信するに至り、殊に當國にその徒の最も多きは痛嘆の至りなり。

然らば則ち此際問題の要點は如何んと視るに、則ち左の如し、曰く基督の再臨し給ふは千年期前論者の信するが如く果して千年期以前に在りて其何時に來るやを知る可からざるや、又は千年期後論者の信するが如く其千年期以後に在るを以て、今より尠くも一千年以後にあるべきや如何の點是なり。

讀者請ふ左に掲ぐる聖書の論證に注意し、基督の來臨は果して千年期前にあるべきを知るべし。

千年期前説の論證

第一帖撒羅尼迦後書二章八節に載する所に據るに、彼の千年期に先ちて世に顯るべしと皆人の信する處の夫の偽基督なるものは其(基督)臨るとき一層文字的に言へばエビ

フアニヤ、即ち其現はる、時發す所の榮光を以て廢滅せらるべしとあり、是れ即ち基督の來るは千年期前に在るの確證なり（希臘語エヒフアニヤは提前六〇十四提後）

監督マクヱーン此論證に就て言へらく、此論證確として動かすべからずと。

千年期後説の主唱者ブララン氏の如きすら之を以て基督の千年期前に再臨し給ふの明證と思惟したれば、之を塗抹せんが爲には故らに聖書の意義を變じて、心靈的のものとなすの止むを得ざるに至れり、然れども之れが爲にブララン氏はジョン、バイ、スミス、マルテン、ルーサー、アイザック、ニウトン監督ノーカー、博士アダム、クラーク

及其他諸氏の大ひに非難する所となれり。左れば此論證のみに據るも、余輩が千年期前説の基址確然動す可からずと雖も、尙ほ他に之を證明すべき者許多あるを以て左に之れを掲ぐべし。

第二。馬太傳二十四章二十九節乃至三十一節に據るに、人の子の來るは患難時代の後直ちにあるべしと云ふ、而して此患難の時は千年期の以前即ち泰平の治世の以前に

在り（太二十四〇二十一、路二十一〇二十四、等賽二十四〇十六乃至二十三及九十八頁の圖解を參觀すべし）故に基督の再來は千年期以前に在りとす。

第三。眞の教會は世人のために迫害せられ、十字架を負ふて須臾も之を棄てざる人々より成る者にして（約十五〇十九―二十）患難は我儕に定まれるものなれば（撒前三）故に基督耶蘇に在りて神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者は窘を受くべし（提後三）而して斯く窘を受くることは基督の再臨し給ふ迄は綿々繼續して息まざるべし（撒後一〇）

第四。新約全書中何所を見るも基督の再臨し給ふ以前に千年期あるを云はず、而して却て此世の終りに至るまでは稗子麥と相並て成長し、悪人と偽者とは相膠着して益々悪を逞すべし。其ノア及ロットの時に於て然るが如く、人の子の來る日に於ても亦然るべしとは新約中に明記する所なり（太十三〇、彼後三〇三、四、提前四〇一―二、提後三〇十三、）而して此稗子や其性邪僻其數夥多なるを以て收穫の秋未だ來らざる以前に於て、天國の子供をして危害に陥らしむる事あるべしと云へり（太廿九）是れ千年期間正義のみが今

の時代を支配する事あるべし、との觀念を全く排除するに足る所の證明なり。

初め第一アダム（創九〇）の此王國を惡魔に賣りしより以來、世々の人々自己の力を以て之を再建せんと勤めたれども、常に失敗して未だ能く其効を奏したる者なし。ノア（創九〇）ソ

ール（昔前九〇十六）チブカトチザー（出二〇廿七、四）及び其他數人に此王國を與へたりと雖

も、夫の既に惡魔を制服したる第二のアダム即ち基督の歸り來りて此世を潔め、以て復生の基礎上に其王國を建設するに至る迄は、此罪惡に誼はれたる地上に王國の成業を見る事能はざるべし。故に基督の來る迄は千年期決してあるべからず。

抑、聖書に千年期を望むべきことを説明せずと雖も、我主基督の再臨は之を望むを得べし、とは是れ聖書に於て再三嚴格に教示せらるゝ所なり。故に我等は亦基督の再臨せらるゝは千年期前に在らざる可らずと斷言するなり。

第五の千年期王國とは基督の實際此世を管治し給ふの謂にして、單に精神的に教會の高めらるゝの謂にあらざるなり。其證左の如し。

他日王あり出で、エルサレム（耶三〇十七、亞十四〇十六）に君臨しダビデ王の位を（賽九〇六、七路二〇）嗣ぎ公義を以て此世を支配すべし（賽廿二〇一、耶廿三〇一六）而して使徒等も十二の位に坐し（太十九〇）聖徒等此世を支配すべし（黙五）

イスラエルの王國即ち王位に就き主なる神の言へることあり、曰く「我れ顛覆ことをなし顛覆ことをなし顛覆ことを爲さん權威を持つべき者の來る時迄是れは有ることなし彼に我之を興ふ」と（結廿一）

此事に關聯する所の章句たる其數夥多あれども、今一々茲に引證する能はず。博士ジエー、バイ、スミス氏曰く、斯る章句の多きこと基督の侮辱及艱難を受くることを記せる章句よりも遙に多しと。

且つ夫れ斯る章句の字面並に意義たる甚だ明なるのみならず、又細密なること、恰も第一降世に係る預言に於けるが如きを以て、千年期後論者は止むを得ず精神的解釋法を以て、此議論に對抗し以て大に正當の解釋法に恃るに至れり。

我等「神に屬する聖人聖靈に感じて」述べたる預言を有するを信す。我等はマルテ
ン、ルーサー曾て「文字通りの意義こそ實に是れ吾人信仰の實體にして基督敎神學の
基礎なれ」と云へるが如く、聖書を解するに當り、先づ此字面上の意義を了解するを
專一の務めと爲さざる可からざることを信す。

耶穌は天に在りて神の右に坐し(○彼前三)眞の聖所に於て(來九)父と偕に其位に坐し(○詩百
一、○黙三)以て彼(基督)に頼りて神に就る者の爲め(來七)に禱告給ふ(○羅八)なり。然れど
も天は只萬物の復興ん時まで彼(基督)を受け給へ(○徒三)るを以て其時至らば彼再び來
りて其先祖ダビデ王の位に坐すべし(○徒三〇、三二、三三)是れ亦基督の千年期前に來るを證
明するなり。

第六、茲に又復生の敎理に基ける明確なる議論あり、今之を略言せば左の如し、

夫れ死せし者は皆復生るべし。然れど基督嘗て復生り給ひしも自餘の死者の當時甦ら
ざりしが如く、基督の來らん時、彼に屬する者は死より復生るべきも自餘の死者に至
りては最後の復生期迄は甦ることなかるべし。而して所謂千年期は其前後二回の復
生期の間に在るべし、是亦以て基督の來るは千年期前にあるを示すに足るなり。吾
人は信す苟も心裡に僻説を抱く者にあらざるよりは、單に左の數説を讀まば以て此事
の當然の理たるを認識すべきことを。

アダムに屬ける衆の人の死ぬる如く基督に屬ける衆の人は生くべし。然れど各人其
次序に循ふ、初は基督次は基督の來らんととき彼に屬する者なり。最後に滅さるゝ
敵は死なり(○哥前十五)。

兄弟よ爾曹の愛戚は望なき他人の如くならざるんことを願ふが故に我儕既に寐れる
者に就ては爾曹の知らざるを好まず。我儕若し耶穌の死て甦りし事を信するならば
耶穌に由る所の既に寐れる者を神かれと偕に携へ來らんことを信す可きなり。それ
主の號令も使長の聲も神の籟を以て自ら天より降らん其時基督に在りて死し者先に
甦るべし(○撒前四〇、
三一、三七)。

我多の座位を見しに其上に座する者あり又耶蘇の證及神の道の爲に首斬れたる者の靈魂を見たり此は獸を拜せざりし者なり皆生きて基督と共に千年の間王と爲り。然れど其他の死人は千年終る迄甦らざん也是第一の復生也。此第一の復生に與る者は福也是れ聖者也此輩の上に第二の死は權を執ること能はず彼等は神と基督の祭司と作り基督と共に千年の間王たるべし、而して千年終てサタン其囚より釋放さるべし彼出て四方の列邦を惑はすべし。……我白き大なる寶座と之に座する者とを見る而して地と天と其前を通れたり。我又死し者の大と小との別なく皆神の前に立つを見たり。……海その中の死人を出し死と陰府と其中の死人を出せり(黙二十四)右の三章句は其意義甚だ明瞭なるを以て、何人と雖も之を讀んで誤解に陥る者なかるべし。

第一句に於ては復生の順序を説けるものにして譬喩を軍隊にとれり。即ち第一には基督「死の中より首に生れし者」(西一〇)第二には基督に在りて死し者及其來らんとし彼れに屬する者、第三には基督に屬せざる自餘の死せる者復生し是に於て死は滅さるべし。

第二句に於ては基督に在て死せる者先づ復生するは、主の旗を以て自ら天より降る時に在ることを反覆主張せるものにして、不信者の復生の事は之を記載せず、是彼輩は此幸なる第一の復生には毫も關はる所なければなり。第三句に於ては患難時代の聖徒(Tribulation Saints)復生りて以て第一の復生完全を告ぐることを記し、且その聖徒等の基督と共に一千年間この世を支配することは、自餘の死者の復活する以前に在ること、自餘の死者は一千年後に至り冥府より復生りて神の前に立つことを記する者なり。

右の一千年とは所謂彼のミレニウムを謂ふものなり。是則ち基督の再來せらるゝは一千年前にあるべしとの證據にして、何者か能く是より明瞭なるものあらんや彼の基督を信じて死せる者は基督の再臨し給ふ時に復生すべし、而して其復生するや實に千

年期前ねんきぜんにあるべし、故ゆゑに基督きりすとの再來さいらいは必かならず千年期前ねんきぜんならざるべからず。

然しかるに我等われらが斯かく聖書せいしょの各所かくしょより右みぎの如ごとき三句さんくを抄録せうろくして之これを結合けつごうするは、是これの當あたを得えたるものにあらずと反對はんたいする者ものあり。

我等われらは之これに答こたへて云いはん、何故なにゆゑに其當そのとうを得えざるものとする乎か、試こころみに思おもへ、右みぎの三句さんくは何れも皆神みなかみの默示もくしにあらずや（提后三）皆同一みなどういの意いより出いでしものにあらずや（約十四）六〇十三、徒一〇八、二〇四）を熟讀じよくくくせよ、之等これらの三句さんくは皆聖靈みなせいれいの默示もくしに係かることを明知めいちする哥前かぜん二〇十、彼后かご二〇廿一）を熟讀じよくくくせよ、之等これらの三句さんくは皆聖靈みなせいれいの默示もくしに係かることを明知めいちするを得えべし。而しかして其皆同一みなどういの問題もんたい即すなはち復生まがへりに關係くわんけいすること明あきらなり。

現げんに使徒しせいポロポロは其羅馬書そのろましょ第三章しやうに於おて此世このよの人々ひとびとの皆罪みなつみあることを證あかしし、又同書またどうしょ十章しやうに於おて信しんする者ものの義ぎとせらるゝことを證しやうし、又希伯來書またへぶらいしょ十一章しやうに於おて信仰しんかうの果實みの事ことを證あかしするに當あたりて、右みぎの三節さんせつを抄録せうろくせし如ごとくになせり。されば我等われらポロポロの例れいに倣ならふの至當しとうなるを承認しやうにんするものなり。

實じつに斯かの如ごとく諸書しよしょより抄録せうろくを蒐集しよくくする方法ほうほうたる、獨ひとり此こゝに之これを用もちゆるのみならず、或あるひは基督きりすとの神かみなることを證あかしし或あるひは福音きんぐふん的てきの教義けうぎを証しやうせん爲ためめこれを用もちふること尠すくなからず。

然しかるに論者ろんしやまた難なんじて曰いはく、默示録もくしよく二十章しやうを見るに單ただに諸の靈魂しよのれいこんの事ことのみ記載きざいせり、故ゆゑに所謂復生いはゆるまがへりとは文字もんじ通りとほの復生まがへりにあらずして、單ただに基督きりすと信徒しんせいすなはち靈的復生れいてきまがへり及びその現生涯げんせうがいの謂いひなりと。

されど、此論このろんの謬妄めうまうなるは容易やういに見みるを得えん、その故何ゆゑなんとなれば、右默示録みぎもくしよくに記しるすが如ごとき聖せいき死者ししやは耶蘇イエスの證あかしの爲ために首斬くびきられし以前いぜんに於おて既すでに靈的れいてきに復生まがへりたればなり。而しかして彼等かれら耶蘇イエスの證あかしとなり獸若けものしくは其像そのさうを拜はいせず、其記印そのしるしを受けずして竟つひに斬きられしは他たにあらず、之即これすなはち基督きりすとに於おける靈的れいてき生活せいかつを送おくりしこと、神かみの語ことばとを信しんじたが故ゆゑたること明あきらなり（黙十三）この靈魂たましひなる語ことばは人ひとなる意義いぎを有あせり。使徒行傳しせいぎやうでん二章しやう四十一節せつに「弟子でしに加くはれる者凡ものおほそ三千人せんにん」とあり。又徒七〇十四、二十七〇十、三十七、哥前かぜん十五〇四十五、彼前かぜん三〇二十、默十二〇十一、十六〇三に於おても、亦人またひとなる意義いぎを

有すること決して疑ふべからず、蓋し靈は決して之を斬ること能はず、身体と靈魂を具備する人にして始めて之を斬ることを得べし。然らば之によりて明白に了解するを得べし。而して此等の聖徒は實に肉體の死を受けたるなり、即ち其靈魂と身体との相離れ死人の大群中に入りたるなり。彼の黙示録廿章五節は即ち此義を充分に確定するものとす、即ち其他の死人は千年終るまで復生らずと雖も、此等の聖徒は死者の中より復生りし者にして之の第一の復生なり。

千年後再臨論者は右の反對説に於て最も顯著なる自家撞着の痕跡を露せり、彼等は黙廿〇十二、十三に於て一の生字若しくは甦の字を用ふることなくとも、文字通り復生の事を記載するものなりと主張しながら、第四節より第六節に至る三節中に生字并に甦字を各二回までも之を使用しあるに、反つて是れ文字通りの第一復生にあらずと強辯せり。若し前者にして譬喩的の意義なくば後者も亦然らざるべからず、故に此兩者を解し共に文字通りの復生の方なりとする方遙に勝れりとす。

又第一の復生を以て信徒は基督と樂園（聖なる死者の溜り場所）に在て、靈魂的生活をなすこと、解するはまた等しく謬妄たるを免れず。何となれば所謂靈的生活なるものは、人の死後に起るものにあらずして新に生る、時より始まるものなり、即ち基督を信仰すると共に始まるものなり。子を信する者は窮なき生命を得（約三〇）實に此の如き人は今現に之を有す、既に偕に生され（西二〇）甦らされたり（弗二〇六）而して加拉太書二章十九節及廿節に曰く「今われ肉體に在て生るは神の子を信ずるに依りて生るなり」と。蓋し以弗所二章六節哥羅西書二章十二節十三節及第三章一節に此靈の復生を記すを見るに、其文字黙示録廿章五、六節に使用せる文字 (anastasis 即ち復活) と全く異れり、蓋しこの復活即ち (anastasis) なる文字は黙示録にあるも、又新約聖書中何れの所にあるも常に文字通り肉體復活の義なりとす。論者又難じて曰く、黙示録第廿章には獨り斬せられたる者と、獸并に其像を拜せざる者とのことのみ特に記載せるは抑も何ぞやと、これ唯四節の後部に於て然るのみ、此

等の人々は基督を信じ夫の偽基督の支配の間に基督の爲に死せし患難時代の聖徒なり
(撒後二〇、廿三)尤も此等聖徒の苦難を受くるは教會の雲に携へ擧げられ空中に於て基督
に遇ひたる後に(撒前四〇、十)あるなり。

然れども四節の節前に於ては或人はすでに復生らされたるが如くに記せり、曰く「我
多くの位を見しに其上に坐する者なり彼等審判の權を與へらる」と、宜しく此に注意
すべし。

此等の者の復生の事に就は一言も述る所なし、これ其患難の時に先んじ擧げ(apture)
の時に於て既に復生したればなり。

此等の者は皆主の約束に従つて座位を占め此世を支配せんとするものなり(路廿九、廿八、
三、歌三〇、廿一)然れども約翰は窘迫を受けたる聖徒の基督と共に、此世を支配せんが爲
め復生したる者を見たりと謂ふ、これ第一復生の順序と全く相符合せり、即ち左の如
し

基督………初の實

次は基督 教會及舊約の聖徒にして基督の空中に來り擧げの時に復生する者
再臨の時 なり。

基督に屬

する者 患難時代の聖徒にして基督の地上に來り給ふ時復生する者なり。

又反對する者あり、言を爲して曰く、基督は「凡て我を信する者は我之を末の日に復
生すべし」と言ひ給へり(約六〇、廿九、四十)斯の如く復生のごときは末の日にありとすれば
不信者の復生する前に一千年の時期なるものあるべからずと。然れども彼得言へるこ
とあり曰く「主に於ては一日は千年の如く千年は一日の如し」と(彼後三)これ即ち復生
を以てはじまり審判を以て終る處の千年の大日に於て、其間基督は萬國の民を支配し
且つ義を以て之を審判し給ふべし(七〇、廿一、歌二〇、廿七)
抑千年期とは一時代の日(“The day of an age”)なること彼得後書三章十八節

に於て聖靈の指示するが如し。又之と同じく約翰傳八章五十六節、九章四節、羅馬書十章廿一節、哥林多後書六章二節、希伯來書四章七、八兩節を見れば希臘語の「ヘーメラアイオノス」(hemera-aionos)は永き時期の義なることを知るべし。

又或は反對して曰く、正者と不正者との復生する其状態は甚だ相異なるべしと雖も、其復生する時は即ち同じからざるべからず、何となれば、兩者ともに同節に記載すればなり。(但十二〇二、約五〇廿)

然れども耶蘇はこの反對説をして全く勢力を失墜せしむべき著しき例を我儕に示されたり、路加傳四章十六節より廿一節を見るに耶蘇その書(以賽亞書)を展きて斯く録されたる所を見出せり云々と、而して耶蘇は同書の六十一章始めより其第二節中の句切(Comma)迄を讀み了り(こは全節を讀まざるをいふ)すなはち書を捲き謂て曰く「この録されたることは今日なんぢらの前に應へり」と。試に思へ耶蘇が全節を讀み盡さずして書を捲きたるは抑も何の故なるか、他なし「刑罰の日」を傳ふべき時期未

だ來らざりしが爲のみ、蓋し彼の句切は今日迄既に一千八百年間の長きに亘りたるのみならず、今より以後基督遂に(撒前四〇十)聖徒と共に現はれて神を敬はざる者に復仇すべき時までには跨るべし(撒後一〇七十一)斯く耶蘇はみづから以賽亞書第六十一章二節に併記したる二項の事にして、其間相懸隔すること一千八百年以上なることを我儕に示し給ひたれば、彼の祝福を蒙りたる聖徒の復生と其他の死者の復生との間に、一千年の隔りあるべしと明記したる神の語を我儕尊重せざるべからず。

耶蘇が約翰傳五章廿八節に使用せる時(Hora)なる語は其廿五節に用ゐたる語と同意義なり。而して廿五節の所謂時は既に一千八百年の長きに互れり、然らば即ち廿八節の所謂時も少くとも一千年の長きに涉り、以て全く黙示録廿節と契合せざるべしと謂ふを得んや、試みに約翰傳四章廿一節廿三節並びに羅馬書十三章十一節を見よ。此處に使用せる時と云ふ語は何れも長き時期を表するものなり。トレゼルス氏は但以理書十二章二節を解釋して左の如く記せり。

地の塵よりなれる睡眠者の中より衆多の者目を醒さん、此等の者は永生を得るならん、されど其他の者(當時目を醒さざる自餘の睡眠者)は羞を得るならん。

是すなはち第一復生説をして愈々確乎たるの證を保たしむるなり。殊にトレゼルス氏の説は猶太註解者諸氏の是認する所たり。

茲に又最後の反對説あり、曰く義者の復生する時と不義者の復生する時との同じからざる事は、聖書中僅かに一個所に之を記するのみ即ち黙示録廿章に載するのみ、此書たる固と譬喩的のもの多きを以て斯る大切なる事項に關し獨り此書のみに依頼すべからずと。

實に此事は只一個所に記するのみなり、然れども只一個所に記するのみの故を以て信するに足らずとなすは抑も何故ぞや。試に思へ夫の光の存在する事に就ては唯創世記一章三節の一句に記するのみにあらずや、而して之を信じて疑はざる所以のものは其言語の神より出でたればなり。

且我主基督の始めて此世に現はれ給ひしことに就き最も不思議なることは處女マリヤの妊娠のことなり。これが爲めマリヤの品行如何を疑はしむるに至れりと雖も、豈に圖らん是マリヤの子は聖靈の感化によりて生れたりとの大信仰を喚記せしむる所以ならんとは。嗚呼此事たる最も神聖純潔の徵候たりと雖も、若し之をして尋常世俗の事たらしめば單に姦淫の汚名を招くに過ぎざるべし。而して此驚くべき事件を數百年間人の信じて疑はざるは獨り預言の一句に據るにあらずや、其預言に曰く「見よ處女孕みて子をうまん」と、而してこの預言たる眞神猶太人の爲に特に重大の徵として賜ひし者なれども、彼の猶太人は其詩書に記するの故を以て之を信せず却てベツレヘムの嬰兒を擯斥せんとするなり。

然に吾人は以賽亞書七章十四節の預言を以て其字而之如く應じたりと信仰し、而して猶太人を非難しながら焉ぞ黙示録廿章に明記せる事柄の文字通りに應ずべきを排斥して可ならんや、これ神の禁する所なり。請ふ試みに思へ基督は「われ速に至らん此書の預言の言を守る者は福なり」(黙廿二〇七)と言へるを、此一言は以て反對論者の定説を

刺し割つに足るべし(來四〇)冀はくは能く此一節に留意せよ、決して之を擯斥する勿れ、これ實に神の預言に係る聖語なればなり。その確乎として動かすべからざることも恰も山嶽の如し、否管に然るのみならず縦ひ山嶽は動くことあるも神の言は永久變易すべきものにあらざるなり。

我親愛する讀者よ、請ふ、教頭アルフレッド氏がこれ第一の復生なりと云ふ一節に就きての註釋に注意せられんことを。氏曰く「余は此預言の言辭の簡明なる意義と年代の位地とは決して之を狂ぐるを欲せず、縦ひ千年期説の爲に何等の困難若くは妄謬を惹起するとも、夫が爲に余はこの預言の意義を狂ぐることを能はざるは、此註釋を讀む者の既に豫想したる所ならん。それ使徒に次ぎて世に出でたる人々はじめ、紀元後三百年間教會の人々は皆文字通にこの預言の言辭を解釋せり、然るに今日かの古を尙ぶの心、最も切なる解釋家にして、斯くも古人の同意したる見解を擯斥するとは寔に奇異の事と謂はざるべからず。抑も此一節たる之を正當に解釋するときは、之に附す

るに決して方今流行する精神的解釋の意義を以てすること能はざるべし。縦は此に二種の復生を記したる節即ち第一の復生には若干の人々生き、自餘の死者は夫より若干の歲月を経たる後に至りて始めて生たりと記するものありとせんに、若し第一の復生とは基督と共に精神的に蘇るの意義にして、而して第二の復生とは墓より實際に復生するの意義なりとせんか、然らば則ち言語の意義は凡て廢滅に歸し聖書の如きも亦抹殺せられ、之を以て何事の證據ともなす能はざるべし。或は第一の復生を以て精神的のものとし、而して第二も亦精神的のものなりとせば、即ち何人たりとも之を維持すること難からざるべしと余は思考するなり。然れども若し第二の復生にして文字通のものごせば、第一も文字通の事實なり、これ古代の全教會及び近代の著明なる解釋家の過半と共に信仰並に希望の一條として余の固守するものなり。今若し基督將に天より降りて不義者に先だち一千年前に義者を復生せしめんとあれば、即ち義者は數多の死者(の中)より復生に撰拔せらるゝ事にして、而して自餘の

死者は一千年後に至る迄残さるゝこと固より當然なるべし。これ正に聖書に於て最も注意を加へらるゝ所のものにして、又これ基督の千年期前に來ることにつき最も明瞭なる一證なりと信ず、而して希臘語の聖書中 (ek nekron) と云へる語その證となるなり、此希臘語即ち死人の中よりと云ふ時は暗に他の死人は残さるゝの意義を含有するなり。

死人の復生 (チクロン) なる語は之を義者と不義者との兩者に通じて用ふる語なり。何となれば兩者とも復生せらるゝものなればなり (太廿二〇廿一、徒十七〇廿二、同廿三〇六、同廿一、四十二、約五〇廿八、廿九) 然れども死者 (の中) より復生と云ふ語は、曾て之を不義者の復生の場合に用ゐられたることあらざるなり。

死者 (の中) よりと云ふ句は聖書中に之を用ふることをすべて四十九回なり。即ち其卅四回は吾人の知る如く死者の中より復生したる基督の復活を顯すものなり (太十七〇九、九、十、路廿四〇四十六、約二〇廿二、同廿一〇十四、徒三〇十五、同四〇十、十〇四十一、同十三〇三十、卅四、同十七〇三、卅一、同廿六〇廿三、羅一〇四、同四〇廿四、同六〇四、九同七〇四、同八〇十一)

同十〇七、九、哥前十五〇十二、廿、加一〇一、弗二〇廿一、四二〇十八、同二〇十二、撒前一〇十、提后二〇八、來十三〇廿、彼前一〇三、廿一、同) 其三回はヘロデは約翰死人中より復生せりと假想せし時その假想復生を表はさんが爲なり (可六〇十四、十)。

其三回はこれ亦死人の中より復生したるラザロの復活を顯さんが爲なり (約十二〇一、) 其三回は罪に死にし中より靈的生活に入りしを顯はさんが爲め譬喩的に用ひたり。

羅馬書六章十三節に「死人の中より甦りし者の如く」と記し、又其十一章十五節に「死たる者の中より生る」と云々と記せり。以弗所書五章十四節に「死人の中より起きよ」と記せり。

又希伯來書十一章十九節には「神はイサクを死人の中より復活し得る」とアブラハムの信仰せしことを記せり。而して自餘の四回は、死人の中より未來の復生を顯さんが爲に之を用ひたる者にして、即ち馬可傳十二章廿五節に耶穌云へらく「それ死 (人の中) より甦る時は娶らず嫁がす天にある使者等の如し」と。又路加傳廿章卅五、卅六兩節に云へらく「彼世に入り死人の中より甦るに足るものは娶り嫁ぐことなし是また

死ることを能はざるが故なり蓋は天の使と俾く復生の子にて神の子たればなり」と。
 使徒行傳四章一、二兩節には彼得、約翰の兩人が「耶穌の事を引き死人の中より復生の事を宣るにより……サドカイの人だち心を惱せり」と記せり。
 右に掲げたる數節たるや、將來死にたる者の中より復生すべきを示せる事明なり。
 即ち死人の中の若干はすべての死人の復生する以前に、復生すべしと云ふことを示せらるなり。フルシヨーセン氏言へらく「若し此句を解して死人の群中より若干の者先づ復生すべしとするにあらざして將た何と解すべきや、他に決して之を解すべきの道あることなし」と、不義者の「第一の復生」にあづかることなきは路加傳廿章卅六節に彼等「第一の復生の者」は「神の子にして」又「天の使と俾し」と記するを以て明なり。
 第一の復生は唯選ばれたる者のみ、即ち義者の復生なり。故に耶穌は之を稱して義しき人々の復生と云へり。然らば爾福なるべし蓋かれらば爾に報ること能はず義き人々の甦らん其時爾に報答あれば也」(路十四)。

ボウロは之を稱して愈れる復生と云へり(來十一)又「基督の來らん時彼に屬する者の復生」(番前五)と云ひ「基督に在りて死し者先に甦るべし」(撒前四)と言へり。
 默示錄廿章六節に「この第一の復生に與る者は福なり之聖き者なり」と記せり。又保羅はパリサイ人として既に復生の大体は之を信仰せり(徒廿三)然るに保羅は何故に凡てのものを損じて基督を獲しや。蓋「彼も其復生の能力を知り(中略)彼の苦に與り兎にも角にも死たる者の中より甦ることを得んが爲なり」(腓三〇八)。
 且又特に基督の恩顧を蒙りたる三弟子が何故に「死人の中より甦ると云ふは何の事か」(可九)と、互に論せし理由も亦之を前論によりて見るを得べし。蓋し彼の三弟子等は死たる者の甦りと云ふ事は猶太人の普く信する教理なるを以て、素より充分に其意義を了解せし(來六)なれども、死人の中よりの復生と云ふことは彼の弟子等には新なる啓示なればなり。
 而して是れ我等に取りて大切なる啓示なり。蓋し此復生は「生の甦り」なればなり。

り(約五〇廿九、)。

又審判(ギリシヤ語に従ふ)の復生なる者(廿九)あり、是則ち不義なる人の復生なり(徒廿四〇十五、但十二〇二)是に於て乎凡て死者たる者の復生のこと全く了るものとす、之に依りて之を見れば、この二種の復生は其時日も其性質も共に異なれり、第一は義しき人々の復生にして、第二は義しからざる人々の復生なり。而して時日の相異は黙示録廿章に所謂二者の間隙は實に千年期王國の一千年なりと云へるに符合せり。且基督は義しき人々則ち耶蘇に由る所の既に眠れる者(撒前四〇十)を復生せしめんが爲に、來ることなれば其來るや必らず千年期の以前ならざるべからず。

博士タウイド、プラナン氏は全くこの議論を皮想し、千年期前再臨主張家の説に於ては死たる者の復生を以て、唯不義なる人々の復生にのみ適用せりと妄想せり。然れども我々千年期前説を奉ずる者は、決して斯る説を唱ふることをなし、死たる者の復生の中には 凡ての死者を包含するものとす但し死(の中)よりの復生と稱する者は、獨り第一の復生に與れる義人のみの復生を言ふものとすなり。

且それ同氏が馬可傳九章九、十兩節、使徒行傳十章四十一節、同十三章廿四節、同廿六章廿三節、羅馬書一章四節の本文を引用するの法たる大に當を失する者あり。

第七、耶蘇我等を誡むるに主の再臨のために目を醒すべきを以てしたまへり、耶蘇は其弟子に向て守れよと云ひ給へること一にして足らず、曰く「是故に爾曹の主いづれの時來るかを知らざれば怠らずして守れ」(太廿四〇)と、又曰く「然らば怠らずして守れ爾曹その日その時を知らざればなり」(太二十五)と、又曰く「我怠らずして守れと爾曹に告るは即ち凡ての人に告るなり」(可十三〇卅)と。而して基督は特に守れと云ふ語を強く宣へり。黙示録十六章十五節を見るに「目を醒し居る者は福なり」と録されたり。

今我等心意の組織を考ふるに、今より一千年若しくは一層以後に來るべしと信ずる事件の爲に、常に警醒して守るが如きは到底能はざる事たり。然るを彼の千年期後論者は之を願すして妄りに其説を主張するなり。

マシウ、ヘンリー氏、路加傳十二章四十五節を註解して言へらく「我等が基督の再臨を以て遠き未來にありとするは、これ即ち種々の悪行を生ずるの原因にして且吾人を以て其再臨を恐るゝに至らしむるものなり」と。又氏は守る事につき謂て曰く「此の守ると云ふ事は獨り主の來るべきを信するのみならず、其來らんことを欲ひ數々其來らん事を思ひ常に其來るの確實にして遠からざるを望み、且つ其來る時の定らざるを信することの意を含むなり」と。

我等基督信者たるものは恰も信仰の戦をなさんとする兵卒の如し(提前二〇三、同四〇七)我等守る者を譬へんに軍中の哨兵を以てするに優れる實例あらざるなり。

久しく戦陣に慣れたる老兵の知るが如く、其哨兵となりて戦陣線に在るに當りては、氣力全身に滿ち毫も怠る所なきはこれ其何時に事の起るを豫知すべからざるが故なり。然るに陣屋にあるや怠慢にして毫も心を用ゐざるは、これ戦陣線の哨兵とは五六哩の距離あるを以て、彼れ哨兵の破るゝ迄は決して禍害の及ぶべき虞なければなり。

我等もし哨兵を距ること一千年ならば果して如何、その守ることに就き勤惰の差等を生ずること幾許ぞや、然るに千年期後論者は實に之を爲せり、

以上の議論には、苟くも常識ある人は皆同意するなりと余輩は信するなり。オー神よ冀はくは以上七ヶ條の議論を以て、夫の信仰の足らざる所を補はしめ給はんことを

(撒前三) 眞の警醒とは愛する主に遇ふに際し「これ我等が待望みし主なり」と大悦を以て叫び如何なる業務をも棄て速に喜び迎ふる心意の態度なり。(賽廿五) 然るに論者或は云ふならん「教會は已に一千八百年の間其來らんことを守りたれども基督未だ來らず、此の如くは今より又一千八百年の間基督の來らざるやも知るべからず」と、或は然らん、然れども我等は何を以てか基督の來らざるを知るや。何に由りて基督の來るべき時日を指定すべけんや、又何の理由ありて守りを廢すべけんや。千年期後論者は謂へらく、基督は今よめ一千年若くは其以上の長歲月を経るにあらざれば來らずと。是れ基督の來るを以て我等の生涯中にあらずとするものなるを以て其

時日を指定すると何ぞ異ならんや。讀者にして若し此説を可とせば則ち忽ち守を怠るの過に陥るべし。

聖書中主の再來の事に係る重罪は「我が主人の來るは遅からん」と云ふ者に在りとなせり(太二十四〇四十八)されば遅からんよりは寧ろ速に備ふるの(太廿五)優れること萬々なるは言を待ずして明なり。

千年期前論者は基督は何時來るや知るを得ざれば、我等は豫じめ腰に帶し火燈を燃し主人の歸るを待つ人の如く、常に怠らず之を守り之を待たざるべからずと信するなり(路十二〇) (路廿六)

已に一千八百年の過ぎ去りたるは、是れ 信仰の初めより更に我儕の救が近づきて寐より寤むべきの時に達したる(羅十三)ものなり。

基督が教會を受け納れんがため空中に來り給ふに先ちて、應ずべき預言上の事件一もこれあるなし。故に我儕は忍耐して以て此約束を受けんことを要す。神は「今片時ありて來る者來らん必ず遅からじ」(來十)と宣へり。

然るに論者又云ふならん、此片時とは眞に片時ならんやと。嗚呼我が愛する論者よ、論者の眼には世界の創造より洪水の時に至る迄、若くは洪水の時より基督の時に至るまでは長しと見ゆるか。哈基督二章六、七兩節に謂ふ所の片時は未だ終らずと余は信するなり。

約耳書十三章十六、十七兩節と希伯來書十二章二十六、二十七兩節を見るに所謂片時とは基督の初めの降世に至る迄五百年の星霜を言へるものなり。上帝の斯く我等に告げ給ふは我等を以て不死の靈魂と做し給へることを記憶すべきなり。

請ふ論者よ、諸君は永遠の歲月の少許を経過するに至るを待てよ、さらば一千八百年の星霜も極めて少許の時間の如く見ゆるに至るべし。

我等は須らく耶蘇に注目し、萬世の王(提前一)の來らんことを待ち且つこれが爲に警醒する處あるべきなり。

基督の千年期以前に來りて、其聖徒と共に一千年間此世を支配したまはんと云ふこと

は、古代の教會信徒の信じたる所のものなる事は何の邊より觀察するも皆然らざるはなし。而して其證據となるものは實に夥多しく拒絶するを得ざる程なり。

今、古來の論者が、此點に就きて陳述せし所を悉く引證せんと欲すと雖ども、奈何せん餘白に乏しきを以て僅かに其二三を左に掲げん。

モシヤイム曰く「基督は此世の最終の大審判に先ち、再び我等人類の中に降臨して一千年間之を支配すべしとの説は、古來久しく世に行はれかのヨリヂエンの時代に至るまでは毫も反對説に出會せしことなし」。

ゲーセルル曰く「此時代(初の二世紀間)の著作に係る諸書を見るに千年期前説甚だ盛にして、吾人は之を以て當時普通の説なりと看做さざるを得ず」。

ナルリングツオースは、得意の正確なる論法を用て之を論じて曰く「何の時代を論せず最も卓越せる教會師父等の信じ、且つ説きし所の説にして、當時に反對者なきものは之を以て當時一般普通の教説と看做すべし、而して千年期前説は使徒に次で世に出

でたる最も卓越なる師父等の信じ、且つ説きし所の説にして、當時に反對を蒙らざりしが故是れ即ち當時の一般普通の教説なりしなり」スタックウスは其著書完備神体論に曰く「此説(千年期前説)は其淵源を古代に發したるものにして、嘗て正統なる

基督信者の一般に奉じたる説たること疑ふべからず」監督ニユートン曰く、千年期説(千年期説主張家の保持するが如きは)は第一世紀より第三世紀に亘る純粹の時代に一般に信奉せし所のものなり」。

監督ラツセルは非千年期説の主張家なれども、其の説く所を見るに「第四世紀の初年に至るまでは此信仰普ねく世に行はれ敢て之を争ふ者なかりき」と曰り。

ギツポンは寔に公平の論者たり、曰く「普く世に行はれたる千年期の古説は、彼の使徒の直弟子と論談せる殉教者チアステイン及イレチアスの時よりコンスタンティン帝

の師傳たるラクタンテアスの時に至るまで、世々の師父等が反覆して説教せし所の説にして、思ふに此説は正統信者の普ねく懐きし所なりしが如し」。

又曰く「此謬説（同氏の所謂）教會に存立したる間は、爲めに基督信徒の信仰並に行爲上に最も好みすべき美果を醸成せり」

博士ダニエル、ホイットビーは、近代の千年期後説家の泰斗なるがその口碑論と云ふ書を閲するに「千年期説は二百五十年間使徒の口碑なりとして、基督信者の重立ちたるもの皆之を信じ、又第二第三世紀の師父等も亦多くは我主及其使徒を首とし、其他前代古人等より傳はりたる者なることを信せり」と云ひ、又「此説は基督信者中の最も正統なる者の皆奉じたる所なり」と云へり。

此く諸書より引證したるも、尙ほ其充分なる力を失はんことを恐るゝが故に、ギツボンの言の如く普く世に行はれたる千年期の古説たる、是れ基督の千年期以前に來降して一千年間自ら此世を支配すべしと云ふ信仰なりしなりと言ふは至當の言なり。而して當時は此説を稱して「チリアズム」（基督親政説）と云へり。ウエプストルの字典に就て見るべし。以上掲ぐる所は此事項に就き、宗教史家並に世俗史家の呈する所の證

言なり。此等古代師父等の中には假令使徒と同時人ならざるも殆んど之と時を同ふしたる者なきにあらざるなり。

フリギアのヒーラポリスの監督バピアスは、使徒約翰の弟子か然らざれば其直弟子に教へられし人なるが、千年期説の元祖と呼ぶ程極端なる千年期論者なりき。スミルナの監督ポリカールの弟子なるイリネテスも使徒約翰と直接の關係を有せしなり。またシアステインマーテイルも亦古代師父の一人たり。

此等の卓越せる師父等が、我が主の口傳また其使徒の口碑なりとして、世人に説教し世人も亦敢て争はざりし所の教理を重視するは、是れ我等の嚴に盡すべき義務にあらずや。かの洗禮の事、教會政治の事、禮拜儀式の事、信仰條目の事等の如き、我が聖教に關する事項に就ては師父等の抱ける説を確知せんとして、遠く古代に溯り切りに之を穿鑿し而して師父等の信じたり説きたりと思惟する者を奉ずるにも拘はらず、此重大なる問題に就ては、師父等の信じたり證したりと吾人の確知する者をも、抛棄し撥

斥するは抑も何故ぞや、之を以て矛盾せずとするか。我が親愛する讀者よ、請ふ、パウロが帖撒羅尼迦人を警戒せる言を今此に宣揚せん、其言に曰く「兄弟よ爾等堅く立かつ或は我儕の言あるひは我儕の書に因りて教を受けたる傳を堅く守るべし」(撒後二)と、而して此に傳と言ふは其書に記しあると口に傳へたるに拘はらざることは、第五節を見て知るべし。扱て此等の傳(即ち教)とは、パウロ及其他の使徒等が斯く縦横に記述したる基督再來の事と、聖徒等支配の事とに關するにあらずして將た何ぞや。夫れ使徒等は斯の如く人に向つて之を説きたるが故、己れ等も實に此等の傳を固守したるなり。且つ此等の傳は則ちホイットビー、及其他の學士等が是れ古代の教會徒の遵奉したるものなりと、明證する所の傳に外ならずと信するも不可なし。然れば讀者も亦ホイットビーが持する較近代の千年期後説を捨て、古來師父等の奉じたる信仰を執らんことは余の冀ふ所なり。或は曰く、使徒等が此事に就て喋々するは、是れ全く誤謬に出る者にして神より默示

を受けたるものにあらずと。又曰く、使徒等を初め古代の基督信者は皆自ら驅き、基督の千年期前に來る事に就き空望を抱きしなりと。然れども吾人は決して之を信すること能はず、請ふ其理由を述べん。夫使徒等は我が主の再來を以て確實の事と思惟し之を守り之を待ちたれども、其來るは果して何時なるやの一事に至りては天父の外に之を知る者なしとし、但其時の定まらずして(太廿五〇四十一)且つ急なること(路十二〇卅五)を信せしなり。而して彼れ使徒等の此世を去りて未だ見ざる樂園に入るや、吾人に遺すに記録と、反覆説明せる其傳(教)と此大望とを以てせり。是に依りて吾人は使徒等の蹤に倣ひ、常に望を墜さずして基督の來るを守り、敢て其來るや明日なるべしとも言はず、又今より千年の後なるべしとも言はず、只其來るや確實にして只今なるも知るべからずと信するのみ。

古より、神は恒に此榮光ある望みを、教會信徒の眼前に置き、之をして常に適度の希望を抱かしめ、而して其新郎の來るを待たしめ、以て今日に至れり。我等は恰もイス

ラエル人の如く、死と復生のヨルダン河の彼岸に渡り、一地一府及一王を尋ね求むる所の、一巡禮なり旅人なりと思惟せざるべからず。

死と甦りとは、教會信徒の大抵免るゝこと能はざる運命なりと雖も、其中の或る人は基督の來らん時、尙ほ其生命を保ち(撒前四)寐らすして其まゝ瞬息間に化し(番前十五〇五)已に甦れる聖徒等と偖に、エリヤの如く雲に携へ擧られ空中に於てまに遇ふべし(撒前四〇十)

耶蘇は「己の民」を世より取んとて、

榮光に充ちて、來り給ふは、

暗夜を破りて、躍り出る日光の、

朝なるやも、知るを得ず。

眞晝か、または黄昏ならん、

思はざる時、夜半の黒雲、

榮光の輝に拭ひ去らるべし、

耶蘇が「己の民」を受る時。

天軍來りて、ホザンナを歌ふ時、

榮化せる聖徒は、天使に和し、

聖顔の恵は、榮の後光の如く、

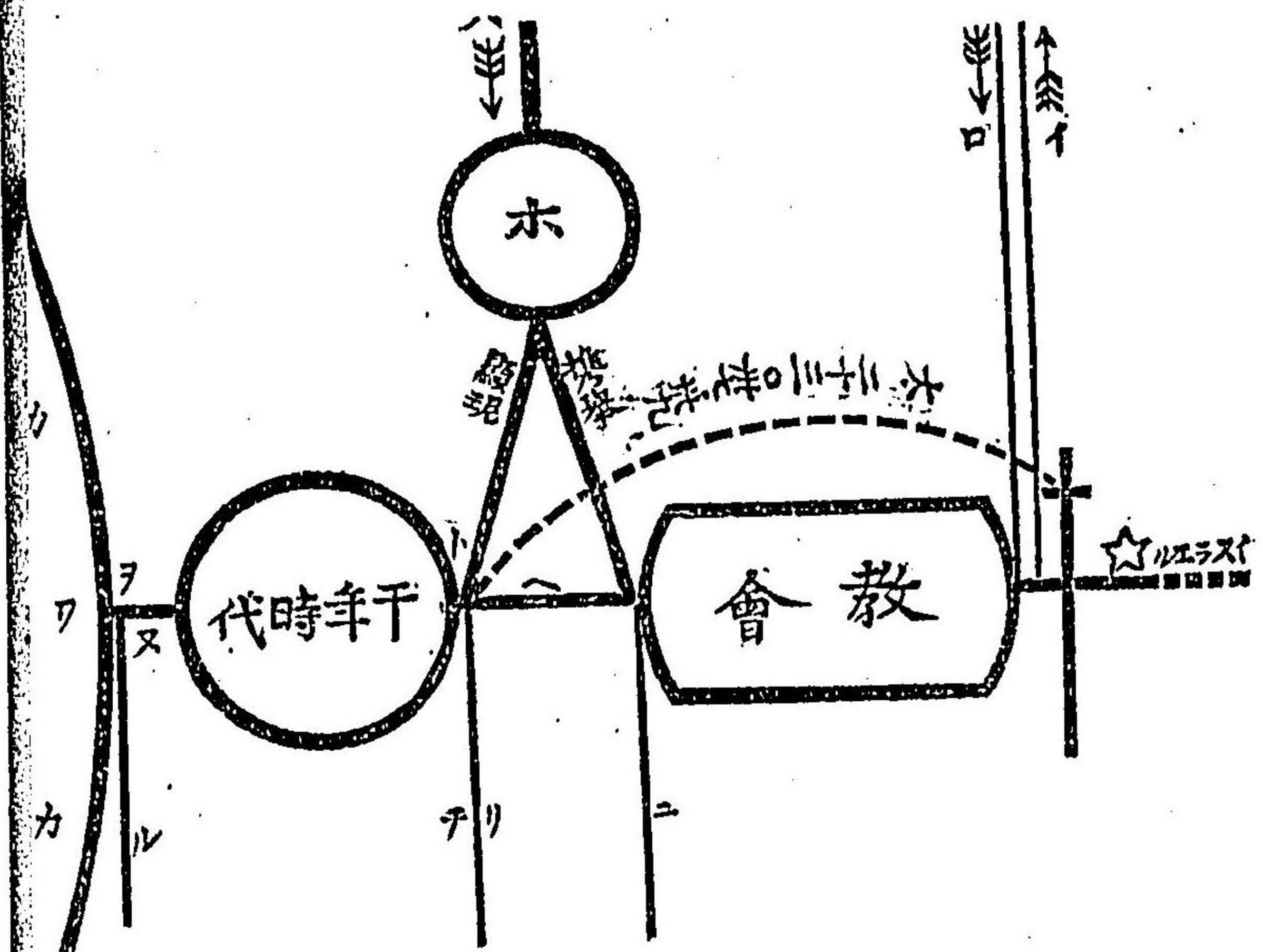
耶蘇は「己の民」を受たまふべし。

オー樂しきかな、死を嘗ずして行んとは、

最早疾病なし、悲哀なし、恐懼なし、號泣なし、

雲宵に携擧られ、主と偖に榮光の中に入る、

耶蘇が「己の民」を受る時。



今上に掲ぐる所の圖解は、我主の再臨に關する諸事の次第の概略を示し、此大切なる問題を理會せんが爲め、讀者に對し大に助力となるべきものと信すれば、宜しく其附加せる引照並に説明を併せて、細心講究あらん事を望むなり(撒前四〇十八)。

説明

☆符は猶太人の王基督の誕生を示す(太三〇)。

十符は基督の死と復活を示す。

イ符は基督の昇天を示す(碁二〇)。

ロ符は聖靈の來降を示す(徒二)。

教會符は基督の神妙なる身体を示し(弗二〇廿二、廿三、同三〇三二一六、羅十二〇四)並に新婦を示す(弗五〇廿)。

ホ符は新婦を受けんが爲め(約十四)。

主の來降を示す(撒前四〇)。

ニ符は義人の復生と(五路十四〇十四、徒廿四〇十)生存へし信者の變を示す(哥前十五〇廿三、一)。

携擧符は雲に携へ擧げられ、空中に於て基督に會せんとする聖徒(エノクの如き者)の遷移を示す(撒前四〇十七)。

ホ符は基督と其新婦の會合を示す(撒前四〇十七、弗五〇廿)。

これ我儕の基督に集る事なり(撒後二)。

耶穌の再臨

又是羔の婚姻なり(太廿二〇三十一、同廿五〇七、路十)。

而して我儕は常に主と共にあらん(約十二〇廿六同十四〇三、同)。

是れ教會の望なり(腓三〇廿、廿二、多二〇)。

又是れ(路二十一〇二十八、羅八〇二十三、弗四〇三十)に記せる蹟なり。

是故に此等の言を以て互に慰むべし(撒前四)。

此の如く神を敬ふ者は艱難を免る(後二〇九、默三〇十)。

へ符は世の始より、今に至るまで有らざる大なる艱難の時代を示す(但十二〇、太廿四〇廿)。

其時の間、教會の人は携へ擧げられ、是に於て神は再びイスラエル人に接し

(徒十五〇三十三、詩五)而して之を其故土に歸し給ふべし(賽十一〇十一同六十〇、耶

二〇廿六、四十四、摩九〇、

十五、亞八〇十、羅十一〇)。

偽基督顯はるべし(撒後二)。

神の怒の杯既に傾けらる(詩二〇一、五、默六〇十六)。

然れども人々唯神を眺るなり

(一、歌十六〇十)。

イスラエル人は基督を受入れ(同十三〇六、十四)。

火にて試みられん(一〇九)。

而して彼等は廢ざるべし(詩廿二〇三十)。

顯現符は此世に於て審判をなさんが爲め(猶十四、火焰の中にて(撒後一〇)基督の諸の聖徒

と偕に顯はる(四三〇四撒前)ことを示す。

是れ基督の此世に再臨することなり(徒一〇十一、申卅三〇二、亞十四〇四)。

ト符は萬國民即ち生ける者の審判を示す(太二十五〇三十一、四十六同十九)。

偽基督滅され(撒後二)獸と偽の預言者と共に擒にせられ(默十九)。

ゴグ及其黨與は打敗

られ(結卅八)。

サタンは縛せらる(默廿〇一三)。

ナ符は艱難を受けたる時代の聖徒の復生にして之を以て第一の復生終る(默廿〇)。

千年期符は千年期なり、基督其新婦と共に一千年間此世を支配すること(默廿〇)を示す

(撒後二〇十二、默五〇十、賽二〇二、同四〇十一、一十二同廿五〇六、九同六十五〇十)。

八、廿五、米四〇一、四、番三〇十四、廿、亞八〇三、一、八同八〇廿、廿三同十四〇十六、廿一)。

又符はサタンが暫時囚より釋放され、ゴグ及びマゴグと共に滅ばさるゝを示す(七、十

耶蘇の再臨

來二〇。

十四。

ル符は審判の復生を示す(黙廿〇十二、十五、約五〇廿九、但十二〇三)

ヲ符は白き大なる寶座の前に於て、自餘の死者の審判を示す(黙廿〇十二)。

死と陰府とは滅ぼさる(黙廿〇十四、前十五〇廿六)。

フ、カ符は永遠即ち來るべき時代を示す(賽五十七〇十、五卅二〇七)。

此事を正しく理解せんと欲せば、左の二事を知ること尤も大切なり、曰く第一には

携擧と顯現

との區別を知ること是なり。請ふ其別を説かん携擧とは携へ去りて空中に擧ぐるの謂

なり顯現とは顯れ出づるまたは輝き出るの謂なり(羅八〇)。

携擧は艱難の時に先ち、教會携へ擧げられ空中に於て基督に會せんとする時に起る

ものなり(撒前四〇十)。

顯現は基督此世に降りて正當の審判を行ひ、以て艱難の時代の局を結ばんがため、聖

徒等と共に來り給ふ時起るものなり(撒後一〇七、十一)。

携擧の時には、基督は其聖徒を携へ去らんが爲めに來るなり(約十四)。

顯現の時は、基督は聖徒と共に來るなり(撒前三〇十三、猶十)基督が聖徒と共に來るに先

ち、聖徒を携へ去らざるべからず。神は必ず耶蘇と共に聖徒を携へ來る(撒前四〇)。(ギ

リシヤ語の聖書には連れ出すと書す)との事は、耶蘇の先づ聖徒の爲に來り空中に於

て相會する(撒前四〇)の證據なり。此に譯して「會する」と云ふ語は、ギリシヤ語にて

は僭に歸り來らんがために連れ出すの義なり。使徒行傳二十八章十五節に、ロマの兄

弟等パウロの來るを聞き之に會せんが爲め、アツビーボロム及び三館と云へる所に

出來り、パウロと共に神に謝するの機を得たりと、記せる處にも亦同様の語を用ひた

り、是れ基督に會せんが爲め携へ擧げられ、後彼と共に地上に歸り來ること、正に相

符合せり、又携擧の時には基督自ら新郎として(太廿五)其新婦即ち教會を彼れに受け入

れんがために來るなり(弗五〇廿)。

顯現の時には、基督萬國の民を支配せんがため、其新婦と共に來るなり（黙二〇廿六―廿九、五〇十同十）。

擧げの時には基督は空中に於て諸聖徒に會せん爲に來るに過ぎず（啟四〇十七）顯現の時には基督は地上に降臨して（徒二〇）會て昇天せし所の橄欖山上に立ち給ふなり（亞四〇、五〇）又擧げの時に於ては教會は、エノクの如く此世より取られ（徒十五〇）顯現の時に於ては千年の王國始まるなり（徒十五〇十）。

路加傳廿一章の廿八節に擧げをば、患難の始めとして教て曰く「此等の事の成初し時には起きて爾曹の首を翹よ蓋爾の贖近付ばなり」と「此贖とは羅八〇廿三の如く第一復生の義なり」、路加傳廿一章卅一節に顯現に付て曰く「此等の事（患難）の成るを見ば神の國の近きを知れ」と。是故に擧げは何時にても起る（太廿四〇）を得ると雖も、顯現は偽基督顯され、利未記廿六章、但以理書及黙示録中に記されたる凡の時變（主の日に向ふ）の成就せらるゝ迄は、起るを得ざるなり。顯現は主の日に先立つものなり。

（路十七〇卅、啟前五〇三、啟後一〇七―十、啟後三〇十一―十二）。

誤て右の如く區別をなさるるに由て、本題に就て註解者中に大なる混雜を生ぜり。例へば使徒保羅は帖撒羅尼迦後書二章一節に於て、擧げすなはち主の來臨と我儕が主の許に集る事を論述せり。是其前書中特に第四章に於て充分に陳述せる所なり。第二節に於て保羅は顯現即ち主の日は、先づ道より離るゝ事起り「罪の人」即ち偽基督の顯るゝ迄は來らざるべしと云ふ。然るに多くの註解者は、保羅は此兩節に於て同一の出來事を述べしものなりと論じ、以て聖書の文をして自家撞着せしめたり。

然れども基督の再臨は近きにあるとして、凡の人を警醒し給へる基督の勸言に反對せる意を、保羅は決して有せざりしを我等は明に見るなり（可十三〇卅五―卅七）保羅はたゞ擧げと顯現とを區別したるのみ。迫害を蒙りしテサロニケ人は既に患難時代の中にあり、または主の日は既に至れりと思惟せり。然れども保羅は彼等をして、主の言ひ給ひし如く主は未だ來臨せざりしことを想はしめ、以て其誤謬を矯正し、且主の日の來

らん前に、必ず起るべき他の事件あるを告げ(撒前四〇十)而して主の日は盜賊の夜來るが如くに来るべし(撒前五)と云へども、彼等は夜に屬するものにあらずれば警醒謹慎すべしと勸告せり(路廿一)。

○携擧と顯現と異なる事の他の證據は、教會は顯現に先て起る患難を免るゝと云へる事實にあり(太廿四〇廿)教會の型なるエノクは其携擧即ち天に移されたるに依て(來十一)洪水の難を免かれたるが如し。

基督曰く「是故に爾曹儆醒て此臨んとする凡ての事を避け、又人の子の前に立得るやうに常に祈れ」(路三十一)と。而して此勸戒を守る者に福ある約束を與へたり、曰く「爾曹我が忍耐の言を守りたるを以て、我も亦爾曹を守り地に住人を試みるが爲め、全世界に臨らんとする試煉の時に之を免れしむべし、看よ我速に來らん云々」(黙三)。

茲に用ゐられたる試煉の時とは、全世界の試煉を云ふものなり(太廿四)左れば是唯猶太のみに限る患難の時にあらずして、馬太傳廿四章廿一節にある全世界に及ぶ所の空

前絶後の大患難なり。此患難の時即ち試煉の時より教會をして脱れしむることを耶蘇は約束せり。則ち能く儆醒て祈禱深き信者は之を免かるを得ると云ふ事なり(路廿一)抑もこの患難は、世界を掩ふが故に之を免るる道なく、唯此世より執り去らるゝの一事あるのみ、是則ち携擧ある所以にして、使徒行傳十五章十四節及帖撒羅尼迦前書四章十七節は教會の爲に榮ある救済を示すなり。

イスラエル人の一部(賽六十五〇九、十五、二二、羅十一〇五、七)なる撰ばれし者は(太廿四)復たエルサレムに集められ(賽一〇六、廿七)而して火則ち大試煉を通過せしめらるべし(亞十三〇八、九、詩廿七

七〇一、賽七六〇二十)教會はエノクの如く之を免れ、イスラエルはノアの如く之を通過す。是故に教會はエノクの如く(創五〇)神の意に適ふ證をなして(來十一)神と共に歩まん(來六〇)が爲め、自らを卑くし、而して常に儆醒して携擧を待つべきなり。猶太人は如何なる時と雖も、顯

即ち彼等の爲めには全く光なく暗黒の日なる主の日を望むなり(啓五〇十)然れど

も彼等は其間に基督を接納し(亞十二〇九)而して夕暮の頃に明なりて活る水エルサレムより出づべし(六十四〇)。

新婦の來臨し給ふ時の擧げは、信徒の爲め最も甘美の慰籍なり。故に保羅は「此等の言を以て互に相慰むべし」(撒前四)と曰へり。然れども不敬神の徒を罰せん爲めに、諸聖徒と偕に基督の顯現れ給ふことは、我儕の主イエスキリストの福音に、服従せざる徒には甚しく恐怖すべきものなり(撒後一〇七、十黙)。

教會二千年王國

この區別なり。基督教會(エックレーシア)は集會を意味するものなれども、モーセ時代の集會即ち野の會(徒七〇)とは相異なるものなり。何となれば基督の降臨し給ひし後迄は、此教會は尙は未來に屬する者なりき。是馬太傳十六章十八節に於ける基督の言に依て證明せらる、曰く「吾我教會を此磐の上に建べし」と、是其未だ建てられざりしを示せるなり。而して教會は斯く野の會と異なるが如く、亦千年王國とも異なるものなり。

教會とは、肉躰を以て顯れし基督の同伴者にして、基督の苦難を顯彰し患難の缺たる所を補ふ者なり(西一〇廿四、後一〇五)、千年王國とは、基督は榮光の位に坐す時と、試煉の時の間基督と偕に苦を受けし者の崇められて、權力と權威を賜はる時(太十九〇廿八、一三)に當り、基督の榮光の顯現することを云ふなり(彼前一、〇十一)此國は王なる耶蘇の臨りし時近きたり即ち近く來れり(路十〇九、十一太三〇二)即ち近寄りたり。即ち其預表としてかの愛せられし三使徒は、靉靄の山に於て其榮光と權力を目撃せり(太十六〇廿八、九〇一十、路九〇廿七)。

然れどもユダヤ人は此國を拒絶し其王を殺せり、彼等は彼の支配を受くるを欲せざりしに因り、此國は直に顯はれずして彼領地を受けて、歸らんとて遠き國に行きし貴人の如くなれり(路十九〇十)基督は此譬に依て王國は尙未來に屬することを明に教へ給へり。

基督が「我爾曹に告げん、之を神の國に成まては復た之（逾越節）を食せし、又爾曹に告げん神の國の來るまでは葡萄より造りしものを飲じ」と、曰ひ給ひし時は神の國は尙未來に屬せしなり（路廿二〇十六―十八、太廿一）彼盜賊が主よ爾國に來らん時我を憶ひ玉へ（路廿三〇）と曰ひし時、神の國は尙未來に屬せり。耶蘇の体を墓に葬りしアリマタヤのヨセフは、神の國を慕へり（可十五〇）是亦神の國の尙未來に屬するを示す也。保羅が「常に信仰に居らんことを弟子等に勸め又多の艱難を歴て我等神の國に至るべき事を教へ」（徒十四）し時は、神の國は尙未來に屬せり。迫害を受けし帖撒羅尼迦人が「神の國に入るべき者とせられんが爲に」（撒後一〇）艱苦せし間は神の國は尙未來に屬せしなり。

其後數年を経て彼得が「是故に我兄弟よ勤めて爾曹の召れし事を撰ばれし事を堅固せよ、若し前に告たる事どもを行は、爾曹何時迄も墮くこと莫らん、此の如くば神爾曹に我儕の主なる、救主耶蘇基督の永遠國に入るの恩を豊かに予へ給ふべし」（被後一〇）と勸言せし時は、其國は尤も確かに未來にありき。而して忠信にして敬虔なる教會が鞭撻、拷問、放逐、嘲弄、誣告等の恐るべき迫害を蒙りし悲痛慘憺たる長き星霜中は、天國は尙未來に屬せり（提後三〇）。耶蘇が其國を受けて（路十九〇）教會を迫害したる徒に報ゆるに患難を以てせんとて歸り（路十九〇廿七、撒一）榮光の位に坐する（太十九〇）迄は、神の國は尙未來に來らざるべし。其然る時は幾世紀間神秘の中にありし王國は（太十三〇十、十一、路一）權威と榮光を何て顯現せらるべし（太十三〇四十三、路十三〇廿五）其時「此世の國は我儕の主及び主のキリストの屬なり」（黙十一〇十五）而して國は最高き者の諸聖徒に予へらるべし（路十二〇廿二、但一〇七、十四）是故に耶蘇の教へ給ひし如く我儕は「爾國を臨らせ給へ」と祈るなり。

教會はペンテコスタの日に始り、患難の前擧を以て終り、千年王國は患難の終りに至り顯現を以て始まる。此王國とは、地上に於て基督自ら世に臨御することなり。基督は猶太人の王たるべしと預言せられたり（賽九）。

基督は猶太人の王として降誕し給へり(太三)。

基督は自ら猶太人の王なりと言給へり(太廿七)。

基督は猶太人の王として十字架に釘られ給へり(太廿七)。

基督は「期は満てり神の國は近けり」と、天國の福音を宣傳へながら來り給へり(可一四、一五)。

基督は天國は爾曹の衷にありと言給へり(路十七)。

基督は己の國に來りしに其民之を接けざりき(約一〇)。

基督は其國を建てんとせしが猶太人等は之を拒絶して十字架に釘けたり(太廿三、廿九)。

然も神は彼を死より甦らせて之を祟め給へり(太廿二、四、四、四、四)。

神は聖靈を此世に遣り給へり。而して聖靈の能力と指導に依りて、使徒等は先づ往て

猶太人に天國の善き音信を宣傳へしが(太十、六、徒三、一六、徒一、八)彼等之を拒絶せしに因て弟子等

は轉じて異邦に傳道せり(徒十三、一四、徒十六、一、徒十八、一、徒十九、一)斯の如く、天國は猶太人に近く來りしか

ども、彼等は之を嫌忌し、而して今は其主を待つこととなりたれば(太廿三、一)其間神

は「異邦人を看顧その中より己が名を崇むる民を取り」(徒十五、一)隔の籬を毀ち二の者

(其名を信する猶太人と異邦人)を以て一の新(徒二、一)人(徒四、十五)即ち基督の神秘の体なる

教會を建てんとし給ふなり(弗四、一二、一)。

此の如く教會は一の奧義として世に出で、舊約聖書の豫言中に記されたることも極め

て稀なりとす。こは「世の成らざりし前より隠藏たりし奧義」(羅十六、一)又前代に

は人に知らしめられざりし奧義(弗三、一)にして、歴代隠れたる奧義なりしが、今は

その聖徒に顯れたり……異邦人の中に顯れし奧義」(西一、二七)とあるを見て知るべき

なり。

昔豫言者をして基督の苦難を豫め證せる時、神の靈は如何なる事を示せるかを解する

に困却せしめ、探索且つ推究せしめしものは教會に關するこの奧義なりき(彼前一、一)。

彼等は次で顯れんとする天國の榮光をば、了解したれども、我儕に啓示せられ、而し

て天使を感動せし所の奥義、即ち苦難するメシヤと迫害せらるゝ教會をば解得する能はざりき。教會は基督の新嫁たるべきものにして、基督は現に之を己に娶らんとす(弗五〇廿)、然ども今は教會は悲哀と艱難の處女、或は其聘定せる新郎耶蘇基督と偕に苦難する伴侶なり(哥後十)。

耶蘇言給ひけるは「爾曹は世の屬ならず我爾曹を世より選みたり、之に因て世なんぢらを惡む人若し吾を迫害ば爾曹をも迫害べし」(約十五〇十)「爾曹世にありては患難を受けん」(約十六〇)使徒保羅曰く「凡てキリストイエスに在て神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者は窘を受べし」(提後三〇十二、撒前三〇三)と。これらの言は少しも矛盾せざるなり、何となれば現世は神の子を虐殺し、其血に就て罪を犯したれども、聖父は其比類なき愛と恩に對してなせる此侮辱をも、寛恕し、忍耐し、報讐の日を延ばし、長く忍びて一人の亡ぶるをも欲み給はざるなり(彼後三)。

斯の如く聖父は、其子を虐殺せし者をも寛恕し給へば、其教會を迫害する者をも亦寛容せざらんや。此迫害は耶蘇來て教會を擧げし(撒前四〇十)以て全世界の上に来らんとする大試煉の時より救ひ出し(黙三〇)教會を迫害したる者に患難を以て報ゆる時迄は止まざらん(撒後一)謀叛と迫害の此靈は患難の中も(黙十六〇九、十)主の日(彼後三〇)或は基督が地上に審判を執行せんとて、諸聖徒と偕に(四)焔火の中に顯はれ給はん時までも絶ざらん(撒後一〇、七)。

されば斯の如く迫害せらるゝ教會の、地に屬する歴史の中には、如何にして千年王國を置くことを得ん。何となれば其時には「義と平和」は互に接吻し、眞理は地より生じ義は天より臨瞰すべければなり(詩八十)又「ひとりの王あり正義を以て統治めその君たちは公平をもて宰さざらん」(賽卅二)王は義を以て憐なる者を審判せん。猶太とイスラエルは恢復せられて安全に住居せん。而して神の聖山には害惡も滅亡もなく禽獸も亦平和に生息せんとあればなり(賽十一〇、耶卅三三〇三一八同卅二〇卅六一四十四)。

此等の數章節特に次賽亞六十章に依て考ふるに、恢復せられたるイスラエルとエルサ

レムは、千年王國の榮光の中心なり。然れども神はその榮光を以て顯はるゝ迄は、イ
 メラエルとシオン或はエルサレムを恢復せざるなり。「エホバはシオンを築き榮光を以
 て顯はれたまはん」(詩百二)、「主は教會を携へ去る後迄はシオン或はダビデの幕屋を建
 てざるなり(徒十五〇十)斯の如く苦難する教會と榮光の國との間には患難の時代あるを
 見るなり。即ち左の如し、

教會の患難 王國

然れども讀者は「教會は常に艱難し迫害せらるゝや」と問はん。

曰く決して然らず、何となれば教會は尙他日婚姻すべければなり。「片刻の輕き苦は極
 めて大なる窮なき重き榮を我儕に得せしめ」(哥後四〇十)教會は主耶蘇が天より顯れ出
 て給ふ時、其が爲に苦難せし所の神の國に入るべきものとせられん(撒後一〇)この故
 に我儕は患難にも欣喜をなせり、蓋患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を

生ずべければなり(羅五〇〇)我儕の望なる基督(提前一)我儕の生命なる基督の顯はれん時、
 我儕も之と偕に榮の中に顯るゝなり(西三〇)我儕もし彼と共に苦を受けなば又彼と共に
 榮をも受べし(羅八〇十七、提後二〇十二)我儕は地に王たるべし(黙五)然らば教會は基督と共に千
 年王國に王たることを以て、報賞せらるゝ者なりと断定すべきなり、「小さき群よ懼る
 ゝなかれ爾曹の父は喜びて國を爾曹に予へ給はん」(路十二〇廿二、但七〇)然らば耶蘇が
 我儕に教へ給ひしが如く「爾國を臨らせ給へ」と祈るべきなり。
 然れども讀者は「教會は迫害を受けず、今は比較上平和を受くるにあらずや」と問
 んか。

我儕は之に答て曰ん、其然る所以のものは他なし、今それ教會と稱するものは(天主
 教、希臘教及び其他名義のみの基督信徒をも合せて其總數凡そ四億萬人あるが)多く
 は世俗と異なる所ほとんど稀なる程世俗と混同一様なるが故なりと。斯の如く冷淡な
 る名義のみの世俗同様の基督信徒は、果して神に何の利益かある。神の要め給ふもの

は、世俗と離れたる聖き人民なり。故に其誠命に曰く「爾曹彼等の中より出で、離れよ」(哥後六〇十)と、馬太傳十三章の空中の鳥と、麴酵の譬は、悪者の子等即ち教會中の偽善者等が、教會に浸入して斯の如く全体に行渡り、之をして只外貌禮式上のものとしたる偽教理を指すものなりと我儕は信するなり。

生命の道は信徒の衷に燃ること恰も、エレミヤの骨に於るが如く、しかく熱心なる信徒を神は要め給ふなり、然るに斯の如き信徒の数は今日に於ても僅々にあらずや。彼の名義教會は温くして、主の口より吐出されんことは我儕の恐るゝ處なれども、其中責められ懲され、金と白衣を買ひ又見ることを得ん爲に目薬を目に塗り、勝を得て主の寶座に坐するを許されん者の存するを見ば主の聖名を讚美すべきなり(黙三〇十四)。

真正の教會

茲に一教會あり、此教會はこれ則ち耶蘇の身軀(弗一〇廿)にして都ての真正の信徒より組成し(弗四〇四)、一団にして分つべからざるものなり(哥前十二〇十)又この教會は教會

中の教會、穀中の麥粒と稱せらるべきものなり。而して我儕は此基督の眞教會は、苦難を受く可きものと定められしこと、其平安の間(徒九〇)は種々の新なる迫害に耐ふる力を養成するの時間なることを忘るべからず。斯の如きは實にこれ古來耶蘇教會の歴史にして、將來に於ても戲謔者悪人誘惑者の中において侮慢迫害に遭ざるべからざるを豫期すべきなり(彼後三〇三、提前四〇一三、提一)。

然れども教會は、夥多の苦難の中にあるも聖靈に因て上より生れたる(約三)靈魂の重生の爲に苦業する(哥前四〇十五、加)こと、其宣へ傳ふる天國の福音すなはち善き音信は、之を信する者を救ふ神の大能たることを自から知れるは實に教會の福なる特權なり(羅一〇)。

夫なる者よ基督の教會を愛しその爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし、彼れ己を捨てば水の洗な以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なり、又汚なく敏なく、すべて斯の如き類なく聖にして瑕なき榮ある教會を自ら己の前に建んが爲なり。

此の貴き章(一弗五)に於て教會は基督の新婦として、人間の中に知られたる尤も優しき親しき神聖なる人倫を以て摸表せらるゝなり。

アブラハムの家僕はイサクの爲に新婦を需めんとて遠國に往けり(四〇)、イサクは即ち犠牲として基督の榮ある摸表なりき(二〇)。此の如く聖靈亦耶蘇の新婦を求めん爲

に此世に降り給へり。アブラハムの僕は「我を阻む勿れ」と云ひしが、聖靈は速に新婦を新耶蘇(耶蘇)に見えしめんがため世と争ひ冷淡信者と論議し給ふ(太二二二〇)。

レベカは「予往くべし」と言へり、新婦「教會」も亦當に行んことを慕ふべし。神はすでに結婚の準備をなし其響應の用意を爲し給ひ、(新婦の用意未だ整はざるのみ)喜

悦の會合の爲百物はや備はりたれば、羔の婚姻の筈に招かるゝ者は福なり(黙十九)。然らば教會は、其新婦たるを全ふし、以て其主の來らんことを速にし(彼後三〇十一)、「新婦

來りぬ出で迎へよ」(五〇六)と夜半に呼ぶ聲を聞かんがため、靈魂を救ひ基督の体の徳を建てん事に、今より數百倍の熱心を以て働かんことを切望す。

オー我は我愛する者に屬き、我愛する者は我に屬く、彼は其酒宴に賤しき罪人を伴ひ給ふ。

我は彼の功德に由て立ち、是よりも愈りて安全なる立場を知らず、即ちインマヌエ

ルの地にして榮光に充る所なり。新婦の目は己が衣服に向はず其愛する新郎の顔に向ふ、されば我は榮光を見ずして

恩恵の王を見ん。彼の賜ふ冠にあらず其裂れし手を見ん、羔はインマヌエルの地に於ける凡の榮光なり。

患難の時限

とは擧擧と顯現との間、即ち教會と千年王國との間の地上の全歴史を指して云ふなり。然れども此時限中と雖も亦全く患難のみにあらざるべし、何となれば此間にも「彼等は喜び樂み互に禮物を贈答し」(黙十一)、また「平和無事なり」と言ふべければなり

(撒前五) 又我儕は其時限は割合に短かきものなりと信す。何となれば、豫言の六千年及び其時限歲月は殆ど経過したればなり。而して其時限中に但以理の七十週の最終の週間(廿七)を含有するや、疑を容れず、何となれば神は教會を携擧したる後再びイスラエル人を顧み給ふべし(徒十五十)而して其時限は其週の七年以上を含有すること眞に近きが如し。

抑この時限中無比の試煉、悲哀、災難、(廿四廿一、太心靈上の暗黒、公然の悪業あらんことは疑ふべからず(路十八七、彼)これ世界の夜なり(約九四、路)然れども眞正の教會は、夜に屬するものにあらざるが故に祈禱を怠らざるを以て、携擧せられて其災を免かれ人の子前に立つ價値あるものとせられん(路三〇六、)然るにイスラエル人の三分の一はこの患難を経過せしめらるべし(亞十三)而して撰ばれし者の爲に是終局的患難の日數は基督の顯現に依りて短縮せらるべし(一〇七、同二〇八)以賽亞書第二十四章より廿八章を見れば此時限の恐しき性質を知るを得べし、この間僞基督現はるべし。

而して就中イスラエル人の遺族中に基督を納得し、其證人となりて此僞基督の爲に殺さるゝ者あらん。我儕は此徒を稱して第一復生の大收穫の落穂として、大患難の終に甦らざるべき患難聖徒と言ふなり。

復生

復生に關し哥林多前書十五章廿三節の眞實の意は「然ど各人その次序に循ふ」なりと言ふにあるなり。基督の來らん時彼に屬する者の復生は、基督の空に顯れん時すなはち携擧の時擧らるゝ所の新婦(教會)を組成する者及び新婦の友たる舊約の諸聖人(約三〇廿九、伯十九〇廿三、廿七、賽廿六〇十九、)患難の時限に信じて苦む者(黙十三〇)千年王國に於て基督と共にせんとて其顯現(基督地上に來る時)の時に復生する所の者とを含有するなり。(羅十一〇十五、黙)。

第一復生即ち生命の復生の大收穫中に含む所左のごとし、

基督

初熟の實

基督の

携擧

教會時代と舊約時代

收集

來る時

の時

の諸聖徒

拾遺

基督に

顯現

患難時代の聖徒

拾遺

ある者

の時

の諸聖徒

拾遺

第二復生すなはち審判の復生（希臘譯約五〇廿九を見よ）は千年王國の後に起り殘餘の死者を含有す（黙廿〇十二）。

審判

千年期後再臨論者が「一般の審判」なる名稱を用ゐることは吾儕の屢々聞く處なり。而して論者は此名稱を以て未來に於て、全人類が同時に神の前に顯はれ審判を受くべしと云ふ意に用ふれども、斯の如き語は聖書中にあることなし。千年期前再臨論者は、全人類ごとく審判せらるべしと云ふ點に於ては素より異なるなしと雖も、皆悉く

同時に審判せらるゝものにあらずと、そは信徒の罪人としての審判は、耶蘇の十字架に上り給ひしを以て済みたれば既に過去の事に屬すればなり。

「我言を聽き我を遣し、ものを信する者は永生を有す、かつ刑罰（希臘語の審判）に至らず死より生に遷れり」（約五〇廿四、併せて同三〇十七―十九を見よ）。

將に來らんとする審判の日は、廿四時間の日に非ずして長年月の連續せるものなり。日なる語は（哥後六〇二、弗六〇十三、及來三〇八）に於て時限の意に用ひられたり。（約五〇廿五）に謂ふ所の時は、既に十八世紀を經過するもなほ終らず、然らば同廿八、に謂ふ所の時も、亦數世紀の歲月を言ふものなるべし。

此審判の日（太十〇十五、同十一〇廿二、廿四、同十二〇廿六、可）は或は主の日（賽二〇十二、同十三〇八、十八、同二〇二、三、亞十四〇二、番前五〇五、哥後二〇十四、撒前五〇二、彼後三〇七、）或は末日（約六〇廿九、四十、四十四、五十一）或は大なる日（耶卅〇七、何一〇十一、耳二〇十一、番一〇十四、日四、同十一〇廿四、提後三〇二）或は或は大なる日（馬四〇五、猶六〇十七、同十六〇十四、徒二〇廿四）と稱へらる。此の審判日は苦難を以て前驅とし（撒後一〇六―十一、廿一）火を以て終る者にし

て(黙廿〇十、)其間は「ダビデに約せし幾らざる恩恵」の長さ時限(賽五十五〇三、)即ち千年王國なり(四一六)而して其日の中に左の順序に従ひ四回の顯明なる審判あるべし。第一、聖徒が各その行爲につきて審判を受くべし(哥前四〇一五、同三〇三三、)此審判は地上に於て行なはるゝものに非ず(撒前四〇三三、同三〇三三、)この榮化せる聖徒等は不敬神の徒に先だちて審判せらる(太廿五〇十)べきは復疑ふべからず。基督の僕等の審判は各國民の審判前にあるなり(彼前四〇七、十八)。

第二、顯現の時地上に生存する各國民を審判すべし、耶蘇は生者と死者の審判主なり(徒十〇四十二、提後四)教會すなはち聖徒は、擧げの時既に擧げられたれば、耶蘇と俱に世の民即ち生ける人民を審判せん爲に來るべし(哥前六〇二、論十四、十五)、これ基督の顯れ來る時地上に生存するもの、審判なり。基督は綿羊と山羊とを分ち、すべて顯現となるものを歎め(太十三〇四十一)而して彼の國を建設せん(四十四)、基督の兄弟なるイスラエル人も此時亦審判せらる(二〇八)ことなれども是豈は決して諸國民中に列せ

られざる者なり(民廿三〇)。

而して後審判の一連續なる(三十一)千年王國となる、其時正しき審判をなす者地上にありて(提後四)公平を準繩とし正義を錘となさん(賽廿八〇)。

第三、白き大なる寶座に於ける死者の審判(歌廿〇十二、十五、太十〇十五、同十一〇廿一、廿四、二〇五)。

第四、諸天使の審判(哥前六〇三、彼後二〇四、猶六)彼等は、惡魔と其使の爲に備へられたる火に投せらる、而して不敬神者先に之に入る(黙十九〇廿、同廿〇七)。

右等の記事は互に相隔たる所あるを以て、千年期後論者の「一般審判」なる語意と合せざるなり。

「主の日」には二個の光景あり、即ち神が敵を審判すること、神が民を救済し之に祝福を垂ることと是なり(賽二〇一、廿一、同四〇一六、年二〇廿一、廿七、卅一、同三〇三三、)是故に審判を分てば、

- 第一、(信者の性質に係る) 十字架上に於ける信者の審判。
 - 第二、(信者の行為に係る) 基督の審判座に於ける信者の審判。
 - 第三、顯現の時生存せる國民の審判。
 - 第四、白き大なる寶座に於る不敬神者の審判。
- となるなり。

偽基督

偽基督なる名は神の言中最も嚴格にして、前兆的な問題の一を我等に告るものなり。約翰第一書二章十八節に、極力耶蘇基督に敵對する所の偽基督來るべしとの教あり。偽基督の靈は業に已に現世に存在して或は過去(約壹四)或は未來(約貳)に於て、耶蘇基督が肉體を以て來ることを拒みつゝあるなり。

今日多くの人々にある此の偽基督の靈は、父と子とを拒む所の偽基督一身に集りて敵意の極點に達すべし(約壹二〇)。

偽基督の唯一人たることは帖撒羅尼迦後書二章に於て、彼は單數にて「罪の人」「淪亡の子」「惡き者」或は一層適切に「不法者」なりと明示せられたり。耶蘇が神の眞像(三一〇)たる如く、偽基督は此世の主たる(約十四)サタンの代表者なり。故に其來るや「サタン」の行為に循ひて、各種の偽なる能と休徴と奇跡かつ不義の諸の詭譎を以て顯るゝ者」なり。彼は眞理を信せざる者には「迷惑をして彼等の中に働かしむる」者となるべし(撒後二〇九)。

此不法者則ち偽基督は、使徒の時代に當りて早や既に其秘法を働けるが、當時之を抑制する所の力ありたり。則ち聖靈が其職掌をして、此世の譴責者教會の收集者として現はれし者なりと吾儕は信す。而して此抑制者が教會の擧と俱に其職掌を停止せらるゝ時は、不法者世上に現出し其秘法を行ふて憚る所なきに至らん。(撒後二〇)。

其時に至らば偽基督は猶太人にも納られ(約五〇四)、彼等再び本國に歸り神殿を再建したる後、預言者が「死との約」「陰府との盟」(賽廿八)と稱へし條約を彼と結ぶに至らん。又偽基督はすべて神と稱ふる者、又人の拜む所の者に敵し之より超へて己を尊

くし、神の殿（エルサレムに再建せられたる）に坐して自ら神なりとなすに至らん
 ○（撒後二）又此偽基督は但以理書第十一章卅六節に記載せられたる如く、自己の儘
 に行ひ諸神の上に自ら崇むる者たるや疑なし。又彼は黙示録十三章十一節より十八節
 に記載する獸にして、其數は人の數六百六十六にして其異能力を用ひて「大なる奇徴
 を以て、地に住む者を欺き」其像を拜せざる者を悉く殺すの權を有するものなり。又
 彼は以賽亞書十四章に所謂諸國民を衰弱せしめ「位を神の星のうへにあげ……集會の
 山にさす」ところの「あしたの子明星」にしてバビロン王は其型なり。
 上に略述する所は、基督の大敵に就きて聖書が吾人に示す所の誠に恐るべき繪畫なり。
 或人曰く偽基督は既にアンチオカス、イビハチスとなり、又は諸の羅馬法王となり、
 又はマホメット及び其相續人となりて顯れたりと、是皆謬見なり。諸法王は其尊崇と
 權力を得て基督の代理者なりと稱したれども、未だ曾て其敵對者とは自稱せざりしな
 り。故に是を偽基督もしくは敵對者と呼ぶは大なる誤と謂ふべし、又アンチオカスは

偽基督の型たるや疑を容れず、蓋し彼がエホバの禮拜法に背きて神殿に於て其憎む所
 の豚を献げ、猶太人に殘虐を加へたるが如き偽基督に類すれども、之を最後の偽基督
 がなす所に比すれば僅に其一部分を現すに過ぎず。且つ彼はパウロとヨハチが、來ら
 んとする偽基督に就きて書き送りし前既に遠く世を去れり。又マホメットも一方より
 見れば亦偽基督たるが如しと雖も、是亦其型と云ふに過ぎざるなり。偽基督の來る
 や尙遠く未來に屬し、帖撒羅尼迦前書四章十六節と十七節に記載せられたる如く、眞
 教會が擧げられたる後にあらざれば顯れざるべし。何となればパウロは「兄弟
 よ我儕の主イエス、キリストの臨り給ふこと、及び我儕が彼の所に集ることに就ては
 我儕願ふ」（撒後三）と曰へり。擧げの事はパウロが嘗て（撒前四〇十）彼等に書送りし事
 して、背教者起り淪亡の子現はれん前に起るべしと云へり、これ帖撒羅尼迦後書第二
 章七節の證明する所なり。新嫁（教會）を集むる（哥前十二〇十三）と同時に罪に就き義
 に就き審判に就き世人をして罪ありと曉らしむる（約十六）聖靈は、其使命を終ふる時空

中に於て主に遇はしめん爲に新嫁を携へ行くも、背教會すなはち姦惡なるイスラエルと不信世界は其誑を信するに任せて見捨べし(撒後二〇)而して後不法者現出するに至るべし。教會は此恐るべき誘惑の時より救濟せらるゝが故に神を讃むべし(路二十一卅)此世は偽基督に支配せらるゝも、教會は其主と偕にあるを得るなり(撒前四〇十八、同五〇九十九)偽基督は自ら崇むる事斯の如く、非常なる權力を以て世を支配すると雖も「彼必ず終に至らん之を助くる者なかるべし」(四十五)蓋神は諸聖徒と偕に不敬神者の審判を施行する爲に來らん時(猶十四)其榮光を以て之(偽基督)を破滅すべし(撒後二)すなはち其到着の射光を以て之を滅痺せしむべし、實に然り彼必ず「陰府に墜され坑の最下に入れられん」彼を見るものは將に彼を熱視して曰ん「この人は地をふるはせ列國をうごかし世を荒野のごとくしもろくの邑をこぼちしものなるか」と(賽十四〇十)我儕の特別に注意すべきは、偽基督が父と子を拒絶する事實(約壹二〇)と、帖撒羅尼迦後書二章七、八兩節の希臘語は不法者と譯すべき事なりとす。今日彼の速に世に蔓

延し、且婚姻財産等に關係する法律を盡く除去せんとする、共產主義、社會主義、虛無黨の三者相併んで世に顯はれ、神を無し法を輕んするが如きは、皆是偽基督の來る先驅なればなり。讀者よ偽基督今將に來らんとす、禍なる哉此不敬の極に達する世人、余輩是を思へば憂愁に堪えざるなり噫。我儕は上文に論じたる起事の順序の概略は、聖書を注意して研究する者には自ら明白なるべしと信す。然れども我儕は熱心を以て唯一言を茲に述べんと欲す。曰く、千年王國に先だち基督の來臨及び聖徒の携舉あることこれなり。是教會の大希望にして、諸信徒の待つ處の重大の起事なるべしと我儕は信するなり(撒前二)又この携舉に次て、起る所の患難及王國に關し啓示せられたる所少なきにあらず。然れども唯其概略に過ぎず。親愛なる讀者よ、たとひ我儕之を充分に了解する能はざるも決して落膽すべからず。又其國王の來臨し給ふことを忘却すべからず、王の來臨し給ふ時は其國の詳細を知る

を得るなり(母上十〇)。

然るに千年期後再臨論者は全く之を忘却し、我儕が主の來臨に關する事を充分に了解し能はざればとて、明瞭に啓示せられたる所の者をも亦拒絶するなり。

我儕は現時に於ける「自由の意志」と「神の主權の教理」へ充分會得する能はざれば況んや將來の國に於て我儕に顯はざるべき榮光を想見する能はざるは豈宜ならずや。

然らば我儕は彼等より、左の如き問を受るも何ぞ之が爲に挫折すべけんや。
如何にして人は千年王國の間に救濟せらるべきや。

恩恵を賜はる方略は何ぞ。
福音の宣傳と教會の聖禮典に代るべき者は何ぞ。

猶太人は基督の第一降臨前に、同様の問題に答を得る能はざりき。何となれば、此事は基督の降臨し給ひし迄は啓示せられざればなり。耶蘇將に再臨せんとす、其來る時第一降臨の時の如く、既に啓示せし處に加へて更に神の言を啓示し給ふべし、耶蘇は

また未だ嘗て人の語らざりし如く語り給はん(約七〇四)。
死者も其聲を聞かん(約五〇)。

而して其口より出る所の恩恵の言は(路四〇)、連續せる啓示なるべし(太七一〇)、耶蘇の來り給ふ時は萬事明白にせらるべし。何となれば我儕は彼に肖ん(約壹三)、又彼の眞

状を見面と面とを對せて相見るべければなり(賽五十二〇八、母)。
千年期後論者は、萬事盡く現在の方法を以て、教會に依て仕遂げざるべからずと思考

する者の如し。然るに千年期前論者は重大の事業は義を以て之を斷め給ふ基督(羅九〇)、自ら種々の方法(亞十四〇四)を用へて成就し給ふべしと思考す。故に千年期後論者は教

會を尊崇し、千年期前論者は耶蘇を尊崇し、來らんとする生ける救主を以て諸信者の心に満たす。又千年期後論者は、たとひ耶蘇の再臨は教會の北斗星たるを認知すと雖

も、之に就て思考を勞し又は之を説くこと僅少なり。耶蘇の再臨は早くも一千年の後にありと信する者なれば、此事に就て説教し談論すること幾ど稀なるも勢ひ自ら然らざるを得ず。

なんぢ彼儕に道を宣傳ふべしと(提後四)提摩太に命じ、又耶蘇の祝福せる希望と榮光の顯現に就き、提多に書送れる時此等の事を以て語るべし(多二)と言ひしに比すれば果して如何ぞや。

又保羅は主の降臨と教會の擧げに就き、帖撒羅尼迦人に贈れる書に曰く、此等の言を以て互に慰むべしと(撒前四〇二十八、提後三〇十六)吾儕は敢て千年期後論者兄弟に問ふ、何爲ぞ此等の慰の言、即ち時に及びて與ふる食物を教會に與へざるや。嗚呼其主人來る時に是の如く勤むるを見らる、僕は福なり(路十二)。

嗚呼兄弟よ、千年期後再臨説は此希望の星を教會より隠し、人間の得て堪え難き重大の責任を負はしむるものなり。此眞理に注意せざるによりて教會次第に衰弱せんとするなり。吾儕千年期後論者に、博士ヒウーマクチール氏の威嚴ある言を示さんとす。請ふ之に注意せよ。其言に曰く「我貴き兄弟等よ、警醒して耶蘇の再臨を宣傳へよ、余は吾儕の主の名によりて兄弟等に勤む、耶蘇の再臨を宣傳へよ。又余は嚴肅に又

愛を以て神の名に依て斯く兄弟等に勤む、主若し不意に來りて門守の眠れるを見出さば、いらんが爲に爾曹警醒せよ」。

千年期前説は其中に生命を含有し、信徒をして彼の爲に披かれたる新書籍の如く聖書を親愛し之を好讀せしむ。ブラオン氏の如き人すら之を承認して「千年期前論者は、神の言と眞理の中に示されたる耶蘇の再臨の事に就き、人の注意を惹くに依て教會を利益せり」と云へることあり。又多くの人は曰く「余が此眞理を納諾せし以來、何故か聖書は予には別に一新書を得たるが如くなれり」とは、我等屢々耳にする所なり。假令人は聖書中に啓示せられたる神秘と、神の無限の計畫は萬分一も會得し能はざるとも、之を講究せば、恰も是れ眞理と安慰の食物を貯蓄する無盡藏たることを發見すべし。これ實に基督教の信仰に於て、最も實際的の教理なり。何となれば「凡そ彼(基督)に由る此望を懷く者は、其潔が如く自己を潔くすとあればなり(約壹、三)而して我儕眞實行的聖潔を要せざるの理あらんや」。

此教理の人々に服膺せらるゝ時は、其人をして此世を愛するの情を断たしむるに大勢力を有する者なり。故に若し古來此教理を以て、偏く教會に宣傳へ又信せられしならば、教會は眞正の教會となり、我等は傳道を維持せんが爲め今日の如く金錢を乞ふの必要なきに至りしならん。夫の聖徒プリスの心中に感動を起し「イエスの來るとき」又は「我來るが故に岩を守れ」等の讚美歌を作らしめ、人をして之を愛誦して止む能はざらしむるものは皆此教理あるが爲なり。教會と人民は此眞理を要し、神も亦然すべきを彼等に要め給ふ事は、神の此眞理の示顯を祝し玉ふに由りて明かなり。

駁論之答

第一、千年期前再臨説の教理は、宣教を衰弱せしむと駁論する者ありと雖も是認見なり、現今の傳道者中に宣教の精神あるを以て、此駁論に答ふるに足れり。諸君は此千年期説を信する宣教師中にベン、イズラ。ジョセフ、ウォルフ。法律博士ゼエームス。マクグリゴール、バートラム。マンスフィールド。ゴンサリーブス。博士ケレー。及へ

ウイスンあるを知らずや。又夫の「グリーンランドの氷の山より」と云ふ宣教の詩を賦し、終に印度の珊瑚濱に永眠せし英教會の偉大なる宣教師ヘーバー氏は此望を有せし人なり。又支那の開教者なるカツツラック及び日本の開教者なるベツトル、ハイムを激厲し、蘇格蘭人の昏睡病を醒し、印度の教化し難き人種の開路者たるダツプを感動したるも即ち此望にして、マクチェン、プーア、ローリー、ランキン、ロウエンナル、及び他の名家を感動して樂ましめたるも亦此望なり。ロード氏は断して曰く、諸教派の外國宣教師並に内國傳道者中、千年期前論者多數を占め皆使徒等の如く、將來に來らんとする怒より數人を救はんが爲に熱心に勞役すと(羅十一〇十四、哥前九〇廿)。

第二、此教理は行動を沮害する者なりと、然れども此駁論は尤も甚しき妄論なり。何となれば此教理の眞義は警醒し行をなし望むべしと説くに在り、夜來らん其時誰も行をなすこと能はざれば今行をなせと云にあればなり(約九〇)。

第三、或は駁して曰く同胞の夥多は未だ救はれず、故に耶蘇の再臨を望むべからずと。

然らば働くべし、何となれば「凡て父の吾に賜ひし者は吾に就るべし」(約六〇卅)とあればなり。又願ふ者は來れ(黙廿七)とあればなり、我儕は神の恐るべきを知るが故に之を人に勸む(啓後五〇)。

洪水前の人々は、ノアの説教を聴くを欲せず、ロトの親戚(女婿等)すらアブラハムと俱にソドムの外に行くを欲せざりき。此の如く耶穌を受けざる者あらん。然れども耶穌を信する者(約二〇)は一人だに亡されざるべし(約十〇)、イスラエル人は艱難の中に屢々悔改むるに至りし事あれば、今日耶穌を受けざる徒と雖も、患難の時代の有形的審判の下に或は彼を受くるを得ん。然れども彼等が基督を受くると否とに關せず、願ふに人類の大多數は罪の渦中に捲込まれ、滅亡の淵に沈淪しつゝあるなり(太七〇)、之に比較し眞の信徒の員數は實に僅少なり、然るに千年國に於ては此事全く一變すべし。「蓋水の海を覆へる如くエホバをしるの智識地にみつべければなり」(賽十一〇)而して萬人盡くインマヌエル王の笏前に膝を屈むべし(賽四十五〇廿三、廿四、羅十四〇十一、腓二〇)。

我儕は自ら好で線路に横はり、磔死せんとする一人の朋友を救はん爲に、列車中數百の乗客の生命を犠牲に供するを欲せざるなり、此れ皆我兄弟なればなり。然らば我儕は靈魂の死の潮流より此等の人々を救はんことを切願せざらん乎。嗚呼我儕は主耶穌よ來り給へ(黙廿二)と聖靈に依て呼ん、蓋は耶穌來らん時「神は義を以て其言を斷之を成竟るべし」(羅九〇)。

第四、耶穌は我國は此世の國に非ず(約十八〇)と云へりと駁論する者あり。是眞に然り、我國は此世の心に屬る者に非ず(約壹二〇十)、信徒も亦此世の屬にあらざるが如し(約十五)。然れども此章句を適當に改譯すれば「我國は此世より出でず」となるなり。即ち我國は此世より發出するものにあらず、耶穌は此世より出でず(約八〇)、また彼と我國は兩ながら天より來れり(加四〇廿六)、然れども耶穌が「爾國を臨せ給へ爾旨の天に成る如く地にも成させ給へ」(四十八、廿七、耶廿三〇五、六)と、我儕に教へ給ひし祈禱に據れば、我國は此地上に建設せらるべきものなり。此地上の諸國はサタンの偽計

の爲に腐敗すと雖も、千年期に於てはサタンは縛り置かるゝを以て之を欺く事あらざるべし(黙廿〇一)

物質は毫も罪惡の成分を含有するものにあらず、アダムは物質の体を有せしが其墮落前は罪なかりしなり。耶蘇は物質の体を有せしも無罪なりき。地は罪の故に呪詛はれ又此世の靈は罪に附着せり(羅一〇十一) 然れども其呪詛除かれ(黙廿二、其王國の中より凡て躡躑となるもの、斂めらるゝ時は(太十三〇)、萬物咸な歎き求めし物を得(羅八〇十一) 義人は父の國に於て日の如く輝くに至るべし(太十三〇)。

第五、或は神の國は物質上の見ゆるものにあらず、靈にして見えざる者なりと駁論する者あり。此論を維持せん爲め路加傳十七章廿、廿一兩節の言を引證す。曰く「神の國は何の時に來るか」とパリサイの人に問はれければ、耶蘇答へて曰ひけるは、神の國は顯れて來る者にあらず此に視よ彼に視よと人の言ふべき者にも非ず、失神の國は爾曹の衷にあり」と。顯れて(即ち英語 observation)なる語はアダム、クライク博士に

依れば、注意深き見張。又ロゼルハムの註釋によれば細心の見張と釋さるべし。又爾曹の衷(heart)にとあるを爾曹の中(among) (ロゼルハム、ウキルソン、ホイッテン等の註釋を見よ)にと解すべし、耶蘇は神の國は是等邪惡のパリサイ人の衷、則ち其心の衷に在りと云ひたるにあらず、彼等の中即猶太人の中にありと云ひしなり。ベンゲル氏は之を註釋して曰く、中なる語は茲には「パンサイ人各個の心に關せず」猶太人民全体に係りて用られたり。救主なる王は茲に在り故に爾曹見よ爾曹聞け」と。然らば則ち上文の意は左の如し、神の國は注意深き見張によりて而後始めて知らるべきものにあらず、即ち鏡敏の批評家にのみ發見せらるべきものにあらず、又油斷なき注意する人々のみに視らるゝ如き者に非ざれば、彼等は此處彼處に看よと謂まじき筈なり。何となれば神の國は爾曹の中にあればなり、即ち王耶蘇の躑に於て彼等の中に顯然現在したればなり。是の如く其國は耶蘇の再臨する時有形的に現出せらるべし(黙六〇)、然れば此王國を發見せん爲に何ぞ細心見張するを要せんや。倘し彼等は欺偽

の間者を遣して耶蘇を細心以て窺ふ代りに(路廿〇)、信仰を以て主を受けたらんには、其王の目前現在するを實見し、且主に愛せられたる使徒等が嘗て山上(太十七〇九、可九一〇一十、彼後一〇一八)に於て、見たる國を目撃するを得たりしならん。耶蘇は如何に喜で己を王と顯し彼等の中に其國を建てんとし給ひしやは、其優しき慈愛の辭に因て知らるゝなり。(太二十三〇三、二十七三十九)曰く「噫エルサレムよエルサレムよ、豫言者を殺し爾に遣はさるゝ者を石にて撃つ者よ、母雞の雛を翼の下に集むる如く我爾の赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、然ども爾曹は好まざりき、視よ爾曹の家は荒地と爲りて遣されん、我爾曹に告げん主の名に託りて來る者は福なりと爾曹の云はん時至る迄は今より我を見ざるべし」云。

耶蘇は父の名に據りて來りて教へ玉ひしが、イスラエル人は彼を接くを好まざりき(約五〇)、「彼己の國に來りしに其民之を接ざりき」(約一〇)、イスラエル人は彼の盜賊を釋して反て其王を拒絶し且つ之を磔殺したり、故に此世の國は我儕の主及び主の基督の屬となり、基督世々窮なく之を治め給はん時(黙十一)、イスラエル人が耶蘇を承認する迄は主の王國は來らざるなり(亞十二〇十、十三〇六、太廿三)。「オー惠ある諸王の王よ來り給へ。願くは爾國を臨らせ給へ。」

王は其壯麗を以て彼處に在り、

覆面なくして見るを得べし。

途に七の死横はるとも、

其は樂しき旅行なり。

羔は其整へる軍勢を以て、

シオンの山に立ち給ふ。

永遠の榮光、

インマヌエルの地に充てり。

第六、保羅が「神の國は飲食に非ず惟義と和と聖靈に由る歡樂にあり」(羅十四)と、言へりとして駁論するものあり。實に其は飲食に非ず、即ち單に外形の禮義のみには非らざるなり。イスラエルの王國は飲食にあらず、羅馬帝國も亦然り。然ども各臣民は飲食す、保羅は唯謹慎と慈愛を旨として爲すべしと教へたるのみ。是故に神の國の臣民は飲食すべし。神の國に食するものは福なり」(路十四)又「羔の婚姻の筵に招かれたる者は福なり」(廿五〇六―八) 耶穌自ら曰く「吾爾曹に告げん今より後爾曹と偕に新しき物を我父の國に飲ん日までは再び此葡萄にて造れる物を飲じ」(太廿六)と。又曰く「我父の吾に任せし如く吾も爾曹に國を任すべし、是爾曹我國に於て我案に飲食せん爲なり」(路廿二〇) 是其國は假令罪の呪詛を免かるべしと雖も(太十三〇四十一)文字通の如く物質上のものたるの最も強き證據なり。

第七、或は血肉は神の國を嗣ぐ事能はず(哥前十五)と駁論す、勿論肉即ち新に生れざる人は之を嗣ぐ能はず。然ども我儕は靈に由て新に生れ(約三〇三) 耶穌の中に新に造ら

れ(弗二〇) 彼と偕に後嗣と爲られたり(羅八〇十) 生命を賜る者は靈なり肉は益なし(約十三) 保羅は此章(五〇)に於て復生の貴重なることを論じ是に由らざれば、我儕は神の國を嗣ぎ若くは所有する能はずと證明したり。且曰く「血肉は之を嗣ぐ能はず」と。依之彼は死したる者の朽べき血肉の體は復生の時朽す死せざるものに 甦らざるべきことを示せり。其時生存する者の體は化せられ(弗三〇廿) 耶穌の榮光の體に象らざるべし。今我儕は血肉に於ては「地より出で地に屬ける」第一の人なるアダムの狀を有するも、復生の時に化せられて「天に屬ける者なる」第二の人「天よりの主の」狀を有ん(哥前十五〇四)。

基督を死より甦せ又我儕に子たるの靈を與へ、基督と偕に後嗣となるを得しむる者、我儕の中に住む所の彼の靈を以て我儕が死すべき體をも活しむべし(羅八〇十) 然る時のみ我儕之を嗣ぐを得、(哥前十五) 則ち神の我儕に約束し給ひし(三十二) 國を所

是に由りて我儕は復生の重要な所以を知る。何となれば此に依らざれば神の國を嗣ぐ能はざればなり。此駁論の目的は、千年期後論者が神の國は靈的のものにして、字義の如き物質的のものにあらずと唱ふる説を維持せんとするにあるや明白なり、然れども保羅は此の如き事を言ひしこと莫く、其全論は全く反對に出でたり。何となれば保羅は壞る者、辱からざる者、弱き者にて播かれたる我儕の體は、壞ちざる者、榮ある者、強き者にて甦らされ(哥前十五〇四十二―四十四)生存せる者は瞬息間に化せんと確言したればなり。此榮の體にて我儕は創世より以來我儕のために備へられたる國を嗣ぐべし(太廿五〇)。如何となれば萬物の正統の後嗣たる(太二十一〇三十八、來)基督は、其國に居らん。而して我等は彼と共に王たらん爲め亦其處に居るべければなり(提後二〇十二、約十七〇)。

耶蘇は其榮光の跡を保たん是即ち甦されて(路二十四)天に昇り(徒二、〇九)天に入りし體(來四〇十四)ステバノも(徒七〇)パウロも(徒九)ヨハネも(十三)亦見し榮光の體、十字

架の痕跡を存する體(黙五〇)恰も嘗て殺されし事ある如き羔の體なり。然り耶蘇は肉體を以て歸らん(徒一〇)約翰貳書七節の真意は左の如し「肉體となりて臨り給ふイエスキリストを認はさる者」と云ふ事にて、賽六十三章一―六、黙十九章十一―十六を参考すべし。而して「我等は彼の現れん時には必ず彼に似ん事を知る」(約三)是故に我等が基督の榮光の體の狀に化せられたる同じ體にて神の國を嗣がん事は明白なり。

第八、或は此教理は聖靈の働を輕しむるものなりと、駁論すれど決して然らず。聖靈の働は如何なるものぞ。彼は今新嫁を集め居るなり。新嫁が基督の前に顯る、迄(弗五〇)聖靈は新嫁を教へ導き又之を慰む(約十四〇十七―廿六)是と同時に彼は又罪に就き義に就き審判に就き世をして罪ありと曉らしむ(約十六)。

聖靈は今愛へしめられ(弗四〇)逆はれ(徒七〇)熄ざるれども(撒前五、〇十九)永くは人と争はざるべし(創六)彼の現在の業務は成就せられ、諸王の王諸主の主は彼の敵を服従せん

が爲め(九〇) 天軍を率ひて來り、而して其業を成就せん(九〇)。元始に水の面を覆しは神の靈なりき(〇二) 而して聖靈は創造の工に凡て與れりと我等は信す(廿六) 彼は洪水前罪人と争へり(〇三) 彼は豫言者に憑りて語り(徒一〇十六) 特にヨセフ及び其他を祝福せり(創四十一〇三十八、出三十一〇三、民十一〇) 之を要するに、聖靈は創造と贖罪の業に凡て與からざるはなし。聖靈の行爲は洪水ありしが爲め、若くはエダヤ人がキリストを拒絶したるがため、又原の枝の折られし(羅十二) 爲に、失敗に歸せりと我等は信せざるなり。又現代に於ける福音宣傳の結果は唯或者の救済に止まると雖も、我等は彼の行爲は無効なりと信せざるなり(路十三〇二十三、二十) 聖靈は、千年王國の榮光と凱旋に與るべしと我等は確信す。何となればイスラエル人すら當時新しき靈を其衷に有すべければなり(結十一) 且諸の國民は主の靈の宿る所の者に由りて、平和と公義を以て支配せらるべければなり(賽十二〇二一三四) 然らば我等は聖靈が、イエスの凱旋を妬まんと懸念すべからず。寧ろ聖靈は自ら印す

る所の新婦(弗四〇) 即ち限量なく靈を有する新嫁(約三〇) を主に贈らん事を速にせんと欲し給ふを確認すべきなり。是れ我等二の者一體となりて(弗五〇卅) 一の全き人となり(弗四〇十) 靈に由て神の居給ふ處とならん爲め(弗二〇廿) 建てられたる聖殿とならんが爲なり(哥前三〇十六、六〇) 誰か能く聖靈が其住み給ふ聖にして活ける殿に由りて、成就せんとし給ふ所の者を測り知るを得んや。彼其完了を速にせんと切念するは當然の事なり。創世紀二十四章五十六節に於て、彼の急ぎに關する預表を見よ。然ども此完了は主來りて首が體に合せらるゝ時迄は成らざるべし(撒前四) 是故に此事に於て我等は主イエスよ來り給へど、聖靈の熱切なる叫呼の實意を幾分か知るを得るなり(黙廿二) 第九、或は此教理は福音をして無用に歸せしむるものなりと云ふものあり。然れども是決して然らず。之をして無用ならしむるは人なり、何となれば福音は凡て信する者を救はんとする神の能なればなり(羅一〇) 世の宣教を妨碍する者は福音の無力なるにあらずして、罪人の故意の不信仰にあり。イエス曰く「凡て父の我に賜ひし者は我必

す之を棄てず(約六〇)と、我等は到る所福音を宣傳ふるも凡ての人皆之を信すべしとは期せざるなり。蓋イエスは「偏く世界を廻りて凡の人に福音を宣傳へよ」と云ひたる時、又之に加へて「信じて「バプテスマ」を受ける者は救はれ信せざる者は罪に定めらるゝ也」と云ひたればなり(可十六〇十)。然ども「爰に信せざる者あらば其を如何ん其不信は神の信を廢つべき乎非らず(〇三)」。救は末の時に顯さるべし(〇五)、イエスは「己が靈魂の煩勞を見て心たらはん(〇十一)」。 (五十三)

「此後吾觀しに諸國諸族諸民諸音の中より、誰も數へ盡す能はざる程の許多の人白衣を着手に椶櫚の葉を持ち寶座と羔の前に來りて立り。かれら大聲に呼はり曰けるは、救は寶座に坐せる我等の神と羔より出るなり(黙七〇)」。ハレルヤ、アーメン、ハレルヤ。第十、或は駁して曰く、馬太傳廿四章十四節に言玉ひし如く、福音は未だ全世界に宣傳られず、故にイエスの再臨又は末期は近にありと思考すべからずと。我等は注意して「天國の此福音は萬民の證せん爲め普く天下に宣傳られん然る後末期到るべし」

との意を考究せん。

(第一) 此末期(原語アイヲーノス)は、無論使徒が第三節(四〇)に於て問ひし時代の末期を言へるなり。

(第二) 此世(原語オイクメニー)とは、住居すべき即ち住居されたる地と云へる義なり。

(第三) 天國の此福音は、善き新報即ち來らんとする天國の喜びの音信なり。此等の喜の音信を萬民に證せんが爲め、凡て人の住居せる地に宣傳られ、而て後此時代の末期到るべし。左れば宣教の繼續すべき時期の長短は萬民に證せらるゝ早晚に依て定められ、此證の完了せられん時末期至らん。然ども吾人限あるの智を以て何時此證の完了せらるゝや斷定する能はず。若し之を能くすとせば過去の事蹟に於て其證を見る、何となれば「ペンテコステ」の日福音を宣へられし時、敬虔の人天下の諸國より來りて此處に現在したりとあればなり(徒二)、其後使徒は散されて偏く

往て福音を宣傳へたり(徒八)又彼等は偏く福音を宣傳へたり(可十六)ポロは羅馬書十章の十八節に「其聲は偏く世界に出で其言は地の極にまで及べり」と曰へり、(此世界なる語は馬太傳廿四章の十四節に用られたる「オークメニー」なる語より譯されたる者なり)ポロ亦曰く(西一〇二十三)福音は既に天下の萬民に傳へられたりぞ。

宣教の普及を敘述せる此等の言は、原と神の默示に基くを以て固より明確にして動かすべからず。思ふに古代弟子の事業は頗る偉大なれば、余は其宣教の普及に疑を措きて之を擯斥すべきの理由あるを見ざるなり。馬太傳廿四章十四節に聖靈の述べられたる天下と云ふ語は、之を羅馬書十章十八節に用ゐたる世界と云ふ語、若くは哥羅西一章六節並に廿三節に用ひたる同語に比して其意更に廣しとすべからず。若しそれ甲書の語意を限りて狭く解するも亦不可ならん。且それポロの成せる功業に就ては記録の今日に存する者甚だ充分なるを以て、世人は動もすれば自餘の使徒並に弟子等の

功業を輕々視するの傾ありと雖も、ペテロの如きも嘗てバビロンに居りし事あり(彼前

三)又其他ペルシア、印度、エチオピア、シベア、スペイン、並に英國の諸國にも、當時已に福音を宣傳せる者ありとは今日尙口碑に存する所なり。

然らば則ち哥羅西一章の廿三節の明文は、馬太傳廿四章の十四節に著しく應じたる者として之を信奉するも何の不可あらんや。蓋し當時より現今に至る迄此事に關し、信者と基督の再臨との間に介せる預言上の應驗は未だ嘗て教會に起りしことなければなり。然るを擅に宣教の證未だ完了せずと斷決し、或は更に一步を進めて、今より幾百年の間は其證決して完了すべからずと斷定する者あらんか、是即ち神の特權を以て自ら任ずる者なり。愚も亦甚しからずや。

其證は萬民へ何れの時完了せらるゝかは、神のみ獨り能く判斷し玉ふ事にして此全問題の根源は即ち茲にあり。若し教會は證の完了せらるゝ迄福音を宣傳すべき使者たらば、死すべき我儕は其證の現今完了せらるゝ事以外に何をも斷定するを得ず。然れど

も我等は福音を宣布するの使者は獨り教會に限らざるのみならず、他に亦之あるを見るが(○六)故に使者は決して獨り教會のみにあらざるを知るなり。
 是故に教會は携擧せられ、一人の天使天より降りて地に住む者即ち諸國諸族諸音諸民に永遠の福音を宣布する後迄は其證は完了せられざるべし。然らば則ち其證を完了する者は教會にあらず、又此證の完了するとせざるは教會に關する徵候たるものにあらざるや明なり。

然らば此事は、彼の「日」と「時」と(○廿四)の如く神のみ獨り能く知り給ふ所にして、教會は一定の徵候とするものを有せざるなり。是故に我等は毎瞬時に新郎の到るに注意すると同時に、來らんとする天國の喜の音信を斷へず宣布することに忠信なるの外又他に爲すべき事なし。

第十一、或は駁して曰く、馬太傳十六章の廿八節、馬可傳九章の一節、路加傳九章の廿七節に耶蘇と其國の來臨は、當時耶蘇の教へ給ひし群衆の存命中に起るべしとあれ

ば、耶蘇の來臨と其國とは精神上の事にして即ち「ペンテコステ」の日聖靈の降臨によりて福音の權威の設立を指せる者なりと。又或は曰く、是譬喩の語にして即ち羅馬人がエルサレムと猶太國を滅すこと、教會の設立を指すものなりと。是等論者の言ふ所を詳言すれば、耶蘇はペンテコステの日に其靈を以て來り福音の宣傳と奇跡を行ふ事に於て、弟子等に依て其權威を顯はし、又羅馬の軍勢に依りてエルサレムと猶太國を滅ぼせり、而して其國は耶蘇の今日支配する教會なり、又耶蘇は教會の中に又教會に依りて今日地上の萬民を支配すと云ふにあり。

我等之に答へて曰はん、聖靈は一個の人格を有する存在者なれば、耶蘇の人格と混同すべからず、故に救主は明かに「我父に需めん父必ず別に慰むる者を爾曹に賜ふべし」(○十四)と言ひ給へり、是聖靈は耶蘇自身にあらざるの證なり。聖靈は其約束に因て來れり(約十四○十六、同十六○七)而して此記事を以て、基督自身復來るべしと云へる他の約束と同一視するは全く不當と云ふべし。此二件はモーセとヨハ子の誕生の如く全く

別事なり。

基督は靈に在て信徒と共に在り又信徒の裏に在り(約十四〇廿三、同十五〇四、)と云へるは眞なり、基督は信徒と共に在り又其裏にありたり。この意に於ては基督は曾て信徒を離れざりしと云へるは眞なり。何となれば基督曰ひ給ひけるは「夫吾は常に爾曹と偕に在るなり」(太廿八)とあればなり、基督はペンテコステ前の祈禱の日に於て彼等と偕に在りき。又彼は始終其民と偕にありたり、然るに他の人格を有せる慰者「バラクリートス」は、特別の榮光ある目的を以て俄に來れり、之に依りて此聖靈の降臨は、基督の靈上の臨在とは全く異なる他の神的臨在の現出なりと斷言すべし。基督は靈に於ては曾て去らざりしが、目に見ゆる存在者としては既に去りまた其如く來るべし(徒一〇)。

又ペンテコステの日の後も尙弟子等は基督の再臨を語れり、もし其再臨の約束が其日に遂たらんには弟子等が斯の如く説くの理由なし。エルサレムの滅亡後(紀元後七十

一年頃)、使徒ヨハンは默示録を記し(紀元後九十六年頃)其書中に數々基督の再臨は猶未來にありと述たり、是の再臨はエルサレムの滅亡を以て成就せられざりしを明示するものなり。

前にも云へる如く教會は王國にあらす基督の體(弗一〇廿二)にして其新婦なり(弗五)、又教會は其臣僕にあらすして(約十五〇)基督と共に若み共に王たるべきものなり(羅八〇後二)患難を受けて神の國に入るべき者とせらるる者なり(撒後一〇)故にポーロは多くの患難を経て神の國に至るべきこと(徒十四〇)を弟子(教會員)に勧めたり。ペテロは我等をして「我儕の主なる救主イエス、キリストの永遠國に入るの恩を予へ」(彼後一〇)ん爲め信徒に恩を加へ、務めて我等の召されしこと、撰ばれしことを堅固せん事を思出さしめ以て我等を勵ませり、是等の言は教會と天國を確然區別する者にして、又天國は尙未來に屬することを明言する者なり。この故に基督の再臨を精神的に又譬喩的に解釋するは根據なきの説と謂ふべし。

又他の説をなす者あり、曰く基督の其國に來臨することは(太十六〇)、ペンテコステの日に於ける靈的來臨を以て既に成就せられしものとなし、又其父の榮光を以て天使等と雲に乗て來るとは、即ち福音時代(論者の所謂時と世の末期)の終に於て眞の有形的存在者として來臨することなりと。

此説は獨り名稱の差異より來るものにして、事實上に於ては毫も異なる所なきが如し。何となれば基督が其榮光を以て顯現(撒後一〇十)せらるゝとは、即ち其國に來臨せらるゝにあらずや、歴史の證明に於ても我等の觀念に於ても帝王の榮華は其國の尊位及び顯現と同一物なり、所謂基督が鐵の杖を以て人民を支配する事は其國に於てするなり(詩一〇八、九、一〇、一五)、基督が恩惠ある獨一の有權者、諸王の王、諸主の主として顯現するも其國に於てなり(提前六〇十五)故に基督が其國に來ると榮光を以て臨まるゝとは同意義にして、兩ながら尙未來に屬する事なり。

然らば馬太傳十六章の廿八節に「誠に爾曹に告げん人の子其國を以て來るを見る迄は此に立つ者の中に死なざる者あるべし」又馬可傳九章の一節に「彼等が神の國の權威を以て來るを見る迄」、又路加傳九章の廿七節に「彼等が神の國を見る迄」とあるは果して何の意なる乎。

我等之に答へて曰はん、此の「死なざるべし」と云へる句は、此處に居る眞誠の信者は決して死を経験せざるべしとの深き意を含む者なり(約八〇五十二)是たしかに希伯來書二章の九節の同語と同意義にして、若我等これらの句を同義に解せば則ち此言の成就は永遠に渉るべき者とす。然れども我等は唯此に一言せん、我等は此事を頼まず。何となれば此「迄」なる語は「或者」が其死に遇ふ迄或は自然の死即ち肉体と靈魂の分離迄と云へるよりは、更に深き意を含む者と信すればなり。

然れども今我等は其處にありし「或者」の見るべかりし者に善く注意し、而して後變貌の山に登り愛せられたるペテロ、ヤコブ、ヨハ子の眼に依て、我等が今考究する所の章句に續き直ちに記されたる景狀を見ん。日の如く輝く彼の面と雪の如く白く光の

如く燦々彼の衣を見よ。彼と共に榮光の中に現はれたるモーセとエリヤを見、この崇められたる三人の對話を聴けよ。而して後貴き榮光の雲彼を掩ふ時畏敬俯伏して「此は我旨に適ふ愛子なり爾曹之に聴くべし」と云へる父なる神の聲を聴きよ。愛せられたる弟子等も、其超自然の尊嚴と赫々たる榮光の下に恐懼戰慄し、も實に宜なる哉。これ實に永遠に存在する所の者が、其使徒に其再臨と王國の景状を示すものなり、故に使徒は之を了解し、殊にペテロは「我儕前に爾曹に我儕の主耶穌基督の能力と其顯れ給ふことを告るに巧なる奇談を用ひざりき我儕は親しく其大なる威光を見し者なり。至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼び此は我心に適ふ我愛子なりと曰る此時彼は神なる父より尊き榮を受けたり。我儕彼と共に聖山に在りし時此の天より出でし聲を聞けり」(彼後一〇十)と云り。我儕は弟子等が此擧げせられたる此時に於て、未來に就て悟りしところ幾何なるや知る能はずと雖も、我儕の主耶穌基督が其國と榮光を以て再臨し給ふとの明細なる幻像を見たるは疑を容れず。而して默示録を轉見す

れば「昔も在し今も在し後も在す者」は最も明確に之を見る事をヨハネに許せし(黙一〇二)を見る。彼は擧げによりて見し幻像中に數世紀を経過し、時間の法則外にありて彼は實に其文字通り事實を目撃したり。彼は三十六回 I saw (吾見し)、七回 I beheld (吾視し)、五回 I looked (吾眺し)と言へり。(英譯による)其他此に類する夥多の句あり。且左に記する所の事を視たり。

我又天の關くを見しに一匹の白き馬あり、之に乗る者忠信又誠實と稱へらる、彼は義を以て審判と戦争をなせり、其眼は火焰の如く其首は多の冕を冠れり……………彼血に染たる衣を纏へり、彼の名は神の言と云ふ天に在る諸軍峻く輝ける細布を着白馬に乗て之に従へり、……………彼が衣と股に録せる名あり曰く諸王の王、諸主の主。

ヨハネは又他の獸と諸王の飲られ火の池に投られたるを見、又サタン縛せられ及び基督と聖徒等が千年の間王と爲る事を見、又我等が今考究する所の數章の事の全き成就

を見たり(一〇二十九)。

パウロも亦其榮光の基督を見たることはヨハネの如く、或はヨハネの見ざりし所の事をも見たり。何となればパウロは人の言語に顯す能はざる事を見たればなり(一〇四)。是等の實事は耶蘇が「或者」は見るべしと約束せられし者の全き實の成就にして、論題の諸章を解説して満足せしむる者なり。

反對論者はペンテコステの日に於ける靈的來臨又はエルサレム滅亡に於ける譬喻的來臨の諸説を維持せんが爲め又他の章を引證するものあり。則ち馬太傳第十章廿三節の「吾誠に爾曹に告げん爾曹イスラエルの諸邑を廻り盡さるる間に人の子來るべし」是なり、我等は之に答へて云はん、是耶蘇が十二使徒を二名づゝ特別にイスラエルの爲、又イスラエルにのみ遺す時かれらに云ひ給ひし言なり。我等は馬可傳第六章の三十節路加傳第九章の十節に於て、使徒等は勿論諸邑を廻り盡さずしてその主に歸りしを視る。而して彼等が前の如き方法を以て、再びイスラエルに到りて「天國は近づけり」

(一〇七)と宣傳たる證據なし。實にイスラエル人は其王を拒絶したるが故に、其國は或貴人の自ら領地を受けんとて遠國に往きて歸りし者の如くなれり(一〇九)。然れども「問」なる語の勢より推察して我等この使命は其本國に歸りて猶太教を恢復せんとする(一〇九)。(一〇九)不信のイスラエル人に新にせられ(恐くは教會が擧げられたる後二人の證人に依りて)而して此證人が再建せられたる諸邑を廻り盡さるる間に人の子は再び顯現すべしと信するなり。

第十二、或は駁して曰く、此教理は未來の悲惨なる景狀を寫出する者にして即ち絶望の哲學なり、此世は漸々改良進歩すとの世人一般の思想に反對するものなりと。又嘲ける者なり、曰く、若し此教理をして果して眞ならしめば我等は愁然手を拱して基督の來臨を待つべきなりと。

我等思考するに是等の駁論をなす者は、千年期前論者の精神と事業を全く誤解する者なり。我等は決して絶望せず、又手を拱して睡むる者にあらず。之に反して我等の胸

中は活る希望(彼前一)最福なる希望(多二〇)を以て充滿し、夫の殆ど詛はれ終に焚き滅ぼされんとする此世の罪深く姦悪なる人々の中より幾人なりとも救濟せんと勞苦する者なり(加一〇四、來六)我等は彼論者の如く、世は常に改良進歩すと云へる妄想を以て世人を欺かざるべし。何となれば使徒ヨハネの云へるが如く「我儕は神に就き擧世は悪者に服するを我儕は知ればなり」(約壹、五)故に我儕は聖書の平易なる言を以て世人々に告げん曰「沈淪に至る路は濶」(太七〇)悔改するにあらずんば死滅せざるを得ず(路十三)と、且嘗て洪水を以て覆はれたる此世界は「火にて焚ん爲に神を敬はざる人を審判する淪亡の日まで存せり」(彼后三〇)と告げんと欲す。我等は來らんとする天國の善き音信たる福音を信する(徒十四〇廿)に依て、此恐しき運命より救はれ「我儕のために天に藏ある嗣業を基督と偕に嗣ぐ者とせられ」(羅八〇十)又「信仰に由て神の能に護られ已に備ある所の末時に顯はれんとする救を得、基督の顯れん時、我儕に來らんとする恩恵を疑はずして望む」(彼前一〇四、五十三)所の人々を祝する者

なり。眞に其將來の運命を知ることは、之を夫の社會の万物は次第に繁榮し、世は漸次善良に赴くと云へる虚欺の安慰に比すれば、反て強き刺撃を世人の行動に與ふる者なり。是千年期前基督再臨説を保持し、之を宣布する所の宣教師及び信者の熱心と忠實なる行動に由て明證せらるゝなり。千年期前論者は現今の悪き世(加一)に在て、悉く世を教化するを期望せずと云ふは固より眞なりと雖も、彼等は平和の千年期時代の來らん事を信じ「曲れる邪なる時代に在て……生命の道を保ちつゝ、光の如く世に顯はれ」(腓二〇十)、以て新郎を迎ふるの備をなす所の敬虔なる團體を増さん爲め(太二十)、然火の中より或枝を引出さんとして盡力す(馬四〇一、彼前三〇十)。然らば何故此教理を宣布する者は此の如く痛く抵抗せらるゝ乎、彼等は皆基督の身体(一)の肢に非ざる乎(彼前十二〇)、彼等は教會より最熱き愛情と祈禱を得るに足らざる者なる乎。彼等は初代の教會の如く使徒の口碑(直傳)を保持し(撒後二〇)、耶蘇の來るを待(腓三〇二十、多二〇)が故に罰せらるゝべき乎、非らず、反て我等は天の國籍を有する(二)

十) 賓旅また寄寓者たる(來十一)を忘るべからず。又我等をして「愛を以て眞理を語り…
 …愛に由て徳を建て」(弗四〇十)、「愛を以て行ひ」(弗五)「機を窺ふ可し是時悪ければ也」
 (弗五〇)と云はしめよ。然り時は悪きなり。而して此教理は現今の悪き時代に於て、未
 來の悲惨なる景狀を示すと云へるは我等の敢て許す所なり。何となれば基督と其人民
 と其救に反對する不信者の充滿する此罪の世は(約十四〇八―廿二、十六〇三十三、十七〇十四、
 約壹二〇十五、五)神の恩恵ある和睦の要求を拒絶して(弗后五)狂人の如く怒の日に向て
 走ればなり(黙六〇十)然れども「前に立つ所の望を執んとて怒を避け」(來六〇)子たる
 者の靈を受け「神の後嗣にして基督と共に後嗣」となりたる者には未來に於て愛慾ある
 なし。蓋「我意ふに今時の苦は我儕に顯れん榮に比ぶべきに非ざればなり」(羅八〇十)。
 今世人の善惡を計るを視るに、技術、科學、發明、發見等の進歩を以て道德上の善事
 となし、以て他の惡事惡行と差引し、世は益善良に進歩すとの決論をなすの傾向あり。
 是全く誤謬にして我等は其サタンの大偽計なるを恐るべなり。何ととれば、

(第一) 眞教會と世俗とは決して平行すべきものにあらざるなり。二者の間は毫も
 連續せる血縁なし、甲は上より出で乙は下より出、甲は此世より出で乙は此世より
 出づ(約八〇)此二者の間には少も友誼交通符合一致なければ之を一結すべき者にあら
 ず。此二者互に相區別す又常に然らざるべからざる者なり(弗后六〇十)眞教會は此世
 にありとも此世の者にあらず(約十七〇十)此世に三の族類なり、曰く猶太人、曰く異邦
 人、曰く神の教會(弗前十〇)是なり。猶太人は列國民中に算入せられず(民廿三)區別せら
 れ選み出されたる特異の人民(出十九〇五、六、三十三〇四)なる如く、眞教會も亦選まれ、
 潔められ、聖とせられたる(弗后七〇一、弗)特なる民にして(弗前二〇九)救を得る日の爲
 に神の靈を以て印せられ(弗四〇)最早幽暗の屬にあらず光子等にして、而して果を結
 ばざる暗行に與せざるやう戒められたる者なり(弗五〇八)彼等は神に屬し世は惡者に
 服し(約壹五)二者の間に解くべからざる争闘ありて到底調和する能はず、反て其主義
 傾向共に全く相反對すれば此二者を同一体と見做すは全く不當の事なり。

(第二) 技術、科學、發明、發見、等の進歩は決して敬虔の増加と謂ふべからず。今日世人が科學哲學の大家と認むる者、或は其中最高の地位を占むる者にして公然の不信者あり、全く神を信せざるにあらざるも耶穌基督の神性を拒絶する者多し。基督信者にして萬物皆善論者となり、科學の喇叭の聲々中にありて此重大なる實事を觀るの視力を失ふは、實に奇怪の事と謂ふべし。之を歴史に徴するに亦之と同様の證據あり、ダビデ、ソロモンの權威榮華と智慧は、アハブ、マナセの偶像禮拜と無故の流血を以て次がれ、其結果は終にエルサレムの滅亡とバビロンの俘虜となれり。ヘロデの建立したる神殿は、巧妙なる技術高大なる工事にして華麗なるのみならず其禮拜も尊嚴なりき、且つ當時猶太人は文學、學術に於ては最も世に秀絶したりしが、終に主イエスを十字架に釘せり。

ギリシヤ人は文學、詩歌、藝術に於ては、夙に凱旋の頂點に達せしが其智識を以て神を認むる能はず、彼等には神は知れざりしなり(徒十七、三十三) 哥林多前書初の三章に明示するところなり、曰く「世人は己の智慧を恃みて神を知らず是神の智慧に適へるなりこの故に神は傳道の愚なるを以て信する者を救ふを善とせり」(二、三)と。神を信するに至るの勞苦は頭腦にあらず心情にあり。故に人は如何に學識を備ふるも新なる心を得ざるべからず、此新なる心は教育に依て得らるべきものに非ず、聖靈の感化によりて得らるるものなり。コリントに於て神の恩恵を蒙りしは肉に従ふ智者にあらず賤しき者藐視らるる者なり、イエス言給へることあり、曰く「天地の主なる父よ此事を智者と達者と共に隠して赤子に顯し給ふを謝す」(路十、二一)と。

然ば世は智慧或は哲學(四、八)或は所謂科學(提前六)に依て神を認むる能はず、實に我等は現今の合理論者不信仰なる學者と無神論者において此事の明證を見るなり。服裝はいかに優美に、且光彩あり又婉麗を以て現はるるも、是惟「光の使」(哥後十一)として顯れ得る彼の有毒なる奸計たるのみ。誠にサタンは神の大敵なり、現今の此惡時代に於て(加一)此世はサタンの權下に在り(約五、〇)而して彼は其奸計を以て神の民を襲撃

し其民に逆ふて「政また權威また斯世の幽暗を宰る者」(弗六〇十)を備ふ。この故に基督信徒は「此世或は此世にあるものを愛する勿れ人もし此世を愛せば父を愛するの愛其衷にあるなし。凡て世に在るもの即ち肉体の慾眼目の慾勢より起る驕傲これらは皆父より出るにあらず世より出るものなり(約壹二〇十)」。然らば則ち、根元より神に抵抗する害悪の此世は神の大敵の權下にあるが故に、益々改良進歩して善に赴くの世にあらざるや明なり。之に反して審判と火と滅亡はすでに目前に迫り(彼后二〇二一六、彼后三〇七)。「艱の時は將に來らんとす(提前四〇一)」「悪人と人を欺く人はますく悪に進み感し又惑はさる」。小麦よりも速に生長する稗麥は收穫の日まで存さるべし(太十三)「すでに使徒の時代に働きたる「不法の隠れたる者」はエマヤ人の多數にすら接けられて(約五〇四十三、賽廿)「主自ら有形的に現はるゝにあらざれば滅す能はざる程に、宇内の權威を握りて支配する有力なる「罪の人」、すなはち具體的の偽基督に於て其頂點に達すべし(撒后三)」。この故に主キリストの來臨の外また此世

に希望あらざるなり、約束し給へる神は讚美を受くべき者なり、主は此時代の末期に來臨し、偽基督は滅亡せらるべし(撒后二〇八、一三)「礎となる凡の物は歛められ(太十三)」。正義の千年王國は地上に建らるべし。故に此惡の時代は、此世に憂愁の景狀ありと雖も來らんとする千年時代には輝ける榮光の景狀あるなり。然りと雖も恐くは尙世界は開化、慈善、人民の自由、萬國交際の親密、基督教の事業等に於て、大に進歩したりと主張するものあらん。此證據として奴隸の廢止、異教徒の糺問、および屠殺(天主教を信せざるがため)の廢止、救助院の設立、蒸氣電氣の便によれる商業上交通の方法、陪審裁判權、國際の媾和、宣敎の勝利等を引照せり。我等は先づ開化は聖潔の源にあらずと答へん、開化はよく頭腦を高尙ならしむるも心情を感化する能はず、鍍金せる罪惡の宮殿は、不善の暗洞の如く必然地獄に陥るの門なり、教育を受け學理に通曉せる無神論者は盜賊又は殺人者の如くサタンに事ふる者なり。イエス會て自ら「我と偕ならざる者は我に背く者なり」(太十三)と云て彼等を類

別せり。故に蛇は如何に光の使の如く見ゆるも、此世は如何に開化に趣くもサタンは尙依然たる悪魔にして、此世は尙依然たる此世なり、たとひ其外貌と方略とは變ずるも暗黒の靈たるは毫も異なる所なし。試に見よ、奴隸制度は漸く消滅に屬すると雖も共産黨、社會黨、虚無黨の如き者、益々無神無主權の形を發揚しつゝあるなり。異教徒虐殺時代よりも尙暗黒ならんとするの前兆あり、慈惠仁愛を旨とする所の制度日に興起すると共に、壓制的專賣のこと巧なる官金私消及び詐欺を行ふ者あり。郵便驛遞の法は新聞を運び通信をなすに甚だ有益なれども、亦猥褻の文書を四方に播布し汚濁の洪水を流し、以て青年子弟の徳義を害すること甚だ大なり。陪審裁判法は善美の制度なれども、往々外面の虚儀に止まり爲めに罪人にして刑罰を免るゝ者あり。曾て宣教の道を開通せる國民は支那數百萬の生靈を驅て阿片の劇毒に罹らしめたり。又外は宣教上に神恩を蒙ること鴻なりと雖も、翻て内を顧みれば過失不可能説、儀式固執主義、懷疑論、また主の日を守らざる事等一層其勢威を増したるを見る。かの

妄誕無稽の過失不可能説の如きは、曾て我諸教會の母たりし使徒教會にも勝利を得たる事を忘るゝこと勿れ。

前世紀は戦争殺戮を以て充滿し、今年に至るも猶數々鮮血の慘狀を呈せり。之を要するにサタンは常に巧に奸智を運し、各方に其詭計を逞ふし、千年王國の始に及んで天使に縛せらるゝ迄はなほ凶事をなすべし(黙廿〇一)。

(第三) キリスト信徒は世の光、地の鹽なれば(太五〇三三、十)、信徒と唱ふるもの、大に増加したるは即ち光と鹽の増加したるなれば、從て此世は改良進歩したるなるべしと論ずる者あり。實に耶蘇は世の光なりしが彼は暗に照り暗は之を曉らざりき。人は其行の悪きが故に幽暗を愛し、之に執着し光を見るを欲せざるに由り、光によりて善に赴かざるなり(約一〇五、同三)。是故に眞の基督信徒は天より光を返照し、益々輝きて其幽暗をして強からしむるのみ、幽暗は尙幽暗にして改善せらるゝ能はざるなり。是故に罪人は之を放棄して光に就かざるべからず。然らざれば救はるゝ能はざるなり。

我等は耶穌が味を失ふて無用物となる鹽に就きて教へ給ひし事と、光も斗の下に隠るゝと告示し給ひし事に注意すべきなり。耶穌は「爾曹心の中に鹽を有て」(可九〇)と勸告し給へり。猶太人は確に其味を失ひ(太五〇)折られたり(羅十一)是に於てか教會と唱ふる者は、其信仰と靈の生活に於て進歩するか退歩する乎との嚴肅なる疑問起れり、天國の奧義(太十三)即ち基督の再臨迄基督敎國の状態は、馬太傳十三章の譬喩を以て教へられあるなり「種蒔の譬は神言が様々に解せられ充分に受納せられざるを示し、稗子の譬は聖徒中にサタンノ現在せるに依て生ずる初代より連續せる結果を示し、芥種の譬は害惡を隠蔽する所の外部の成長を示し、麩酵の譬は眞理の次第に腐敗するを示し、畑に藏されたる寶の譬はイスラエルが此世の中にあるべき事を示し、價高き眞珠の譬は教會と耶穌との關係を示し、網の譬は基督再臨の時其國を潔むる事を示すものなり」と。

此譬喩の注解に就ては、恐くは麩酵の譬の外復異論する者なからん、但し麩酵の譬は前説と全く反對の事即ち福音の勢が全世界を感化して、終に之を聖とする事を教ゆるものなりと一般に解釋せられたり。然ども此説は判然と害惡は此時代の末期に至る迄尙存じ、且生長すべしと教ゆる種蒔の譬、稗子の譬と全く相反する者なり。これこの章(路十三)と、之に關する他の章にある麩酵なる語と其他夥多の章に於て、害惡の腐敗力又は死の徴候として用ゐられたる同語を同一の意義に解するは聖經に合するものなり。注意して左の諸章を見るべし

(太十六〇六一十二、可八〇十五、路十二〇一前五〇六一八、加五〇九)

これ此世は善良に赴かざるのみならず、教會と唱ふるものすらも其鹽を失ひ名義のみとなり、主の口より吐出さるゝ(黙三〇)に至らん事を嚴格に教ゆるものなり、而して我等は神の言の全教訓は皆此に符合すと信ず。

又前論の眞理たるを觀んと欲せば、現今にても教會を公平無私に觀察せば明了たるべし。彼の有名無實の大教會の諸枝が靈の勢力を失ふたるは、眞理を拋棄したるが故に

非ず麴酵が粉全体を醱酵する如く、虚説妄誕其内部に行はれたるに因れり。羅馬に在りし通常の監督が次第に所謂斷獨無過失の法王となりしこと、偶像を禮拜すること、俗化せし事、また千年後再臨説等は皆是れ粉中の麴酵の如く驚くべき生長をなしたり。羅馬教、希臘教、ルーテル教派、アングリカン教派等の諸大教會は、其壯嚴と其禮式と其人氣に投合すること及び靈性の欠乏の點に於て、夫蔑視せられたるナザレ人及其門徒(約壹四、〇七)若くは當初二百年間迫害を蒙りし神聖敬神の教會と果して能く比較し得べき乎。

又今日の諸教會は、世と調和する事及聖書の天啓に關し益々起る所の疑惑に由りて、同一の方向に傾く危険あらざる乎。是等の内世俗と相離れ神聖を得んと熱望する者の僅少なること果して如何ぞや。誰か是等の凡を醱酵せんとする麴酵の此腐敗力を見ざらんや。

我等は此事は最も恐るべき事實なるを知るを以て、之を論ずるさへ快からざるなり。

然ごもノアの説教は之を聞きし者には快からざりしも眞實にして、遂に洪水は來れり。之と同じくエレミヤの預言は非常に不愉快を感せしめられたれども眞實にして、エルサレム滅亡とバビロン俘虜の災難起れり。耶蘇の説教は屢々恐ろしく激烈なりしが(太廿一、一廿四、同十八、〇七、九)皆眞實ならざらんや。然らば我等は謙遜に忠實に神の言を宣布すべしなり、我等は黑暗の日(耳一〇十五、摩五〇十八、一二十、番一〇十四)將に異端の教會も(提后三〇五、一、同四)謀反と殺戮をなせるイエラエル(太廿七)と罪惡の世の上に来らんとするを確信し、大呼して惜まざるべし(八〇)此暗黒中に於て不信者には憂愁甚だしと雖も、忠信なるものには赫々榮光に入るの希望あるなり(撒前二〇五、一、八)蓋は神は常に忠信なる家族を保存し給ひしが如く未來に於て亦然すべければなり(王上十九、五)盲目不信のイスラエル人中にもメシヤを待ち又之を接し者ありしが(路二)教會中にも亦來らんとする新郎を待ち(撒前二)且之を招待せんとするものあるべし(太廿五)又イスラエル人中にも暗黒と火を過經して(亞十三)其主を接るものあるべし(亞十二、一〇、羅九

廿五、) 而して異邦人(不信者世界)中にも亦主を索むる所の遺族あるべし(徒十五)。
 廿六、) オー榮光神にあれ。神其榮光の寶座に坐し給ふとき(太十九)其翼には癒す力を具へて昇
 る義の太陽(馬四〇)の進むに従て黑暗は飛去るべし。主の家の山は建設せられ、萬民は
 茲に平和榮光の赫々たる千年王國の間集り來るべし(賽二〇、一、四、米四〇、一、五、徒十七)。
 此千年王國は現在の罪惡の時代(加一)に次で起るべき者にして、此國に於ては受造物
 も「壞の奴たることを免れ神の諸子の榮なる自由に入ること許さるべし」(羅八〇)。
 「斯て我が聖山のいづくにても害ふことなく傷ることなからん、蓋は水の海を蔽へる
 如くエホバをしるの知識は地にみつべければなり」(賽十二)。

愈れる日來る、長く約束せる朝なり、

時に武裝せる正義は、聖き力を以て罪惡を一掃せん。

時に主なる神、凡の悲しき叫を聞き給ひて、

程なく正しき審判の御手を凡の國に伸へ給ふべし。

驕れる虚言者の高慢は、更に空中に顯れず、

老若とも真理を愛して、之を何處にも宣傳ふるに至らん。

毫も欠乏と悲哀より來る絶望の叫聲なく、

程なく争は止み、全き平和は盛るべし。

オーかの聖き曙！これ我等目醒て、待望み、祈るところのもの、

かくて朝の光は、憂愁を驅逐する時にまで至らん。

而して天の榮光天地を漲らす時、

程なく我等は聖語の故に、主を崇め主を讚美すべし。

第十三、或は駁して曰く、億萬人の未だ救はれざる者あるに此世を審判せんとして來る

如きは基督にあるべからざる慘酷の處置にあらざる乎と。
我等之に答て曰ん、此の如きの説は神の意を妄に批評する者にあらざるや。神が害惡の大氾濫を一掃し給ふたる大洪水は、其後に生存する者には果して慘酷の處置なりしか、將た其愛と慈悲の啓顯なりし乎。固より其仁愛より出でし者なり。而して我等は此世は三十三年毎に死ぬべきことを忘るべからず。蓋し人壽の平均は此年限よりは寧ろ短かるべし。此世は惡魔の權下にあり(約壹五) 彼は死の權力を有し(來二〇十) 現時代(現時代は舊約時代に對して云ふ也)の間に五十回以上死の劍を以て此世を殺したり。吁思ひ見よ、是れ五十以上の時代は死の渦中に沈淪したるにあらざるや。各時代皆新世界の光景を以て始めらる。而して之等の中改心したる者、或は福音の生命の船に達したる者、或は之に達せし者の中救の音信に注目したる者は如何に僅少なるや。其大多數は破船の如く黑暗と不信の中に在りて審判の時皆振ひ去らるなり。
基督の來臨は事物の有様を大に上進すべし。蓋は基督來臨し賜ふ時は凡て蹟癘となる

者は斂められ、而して其王國は義を以て建設せらる可ければなり(太十三〇三十一、四、例令其國の臣民(基督と共に王た) (路廿〇廿六) は千年の間に死するとも皆長壽を享け、少き者も齡百歲に至るべし(賽六十五) 其死も亦福なる者なり(黙十四) 而して例令千年の狀態は完全ならざるも、其日の罪人と神に事ゑざる人民の審判は速に行はるべし(賽六十五〇廿、亞十四〇十六、十九)
然らば則ち基督の速なる來臨は、決して無慈悲の事と謂ふべからず。寧ろ此の如く忍耐を以て、今待ち給ふ(洪水前の如く) (彼前三) 神の忍こそ驚くべきなり(彼後三〇) 然るも神は其約束を仕遂たまふべし。而して來らんとする者は來り(來十〇三十) 義を以て其言を斷め給ふべし(羅九〇二) 然らば基督の來臨を慘酷或は無慈悲の事と見做すべからず。基督曰く「我は必ず速に來らん」と。故に我等は「主耶穌よ來り給へ」(黙二十) 二)と曰ひ給ひし聖靈の心を以て心をせざるべからず。

其時歡び迎へよ、三度歡び迎へよ、爾曹神の記號を帯びし者よ。
 起り來る者は何事ぞ、彼の來臨は慰安を與ふ、
 顯はれ來る者は何事ぞ、彼は鎖されたる世を釋すなり。オー曙の明星よ、我望は爾にあり。

第十四、耶蘇曰けるは「此事みな成るまでは此世は逝ざる可し」(路廿一〇卅二、太廿四)云。
 或は此世と云へるを三四十年間と註解し、エルサレムは基督が此事を語り給ひし後四十年内に滅されしを以て、此人々は基督の言ひ給ひし凡の事は皆此事件に關するものなりとするなり。
 然ども我等は茲に用ひられたる此世なる語は、イスラエル人種の有らん限りとの意義を含有すと信するなり。希臘譯の聖書に於て同一語の用ひらるゝ左の諸章を比較せよ。
 (太十一〇十六、十六〇四、可八〇卅八、路七〇卅一、九〇四十一、十一〇二十九)
 (一三十二、五十一、五十一、路十六〇八、十七〇二十五、徒二〇四十、腓二〇十五)

詩篇二十二篇三十節には「たみの裔のうちニエホバにつかふる者あらん、主のことは代々にかたりつたへらるべし」とあり、同二十四篇の六節に「斯の如き者は神を求むるの族類なり」とあり。箴言三十章の十一節より十四節には「義人の族類と悪人の族類とは明か區別せらるゝことあるに由て觀れば、イスラエルの種族は唯にエルサレムの滅亡を目撃せしのみならず、基督の來臨(顯現時)及び此時代の末期をも目撃すべきものなりと決論すべきなり(太廿四)云。
 イスラエル人が、現今に至る迄十八世紀間凡の迫害變轉と流浪を経過し、別種の人民として保存せられたるは實に永久不變の奇蹟にして、神の言の眞理を證明し、且イスラエル未來の歴史に就きて神の目的を示すものなり。
 フレデリツキ、大王嘗て其法教師に謂て曰く「先生の奉ずる宗教若し眞の教ならんには甚だ簡短なる證據を示すを得べし、請ふ一言以て其眞理たるの證據を聞くを得んか」と其時此善良なる教師は單に「イスラエル」と答へたりとかや。

他の國民は興亡常ならずと雖もイスラエルは常に存して滅することなし、神イスラエルに就て曰ひ給ひけるは「我しばし汝をすてたれど大なる憐憫をもて汝をあつめん、わが忿悲あふれて暫くわが面をなんぢに隠したれど永遠のめぐみをもて汝をあわれまんと、こはなんぢをあがなひたまふエホバの聖言なり」(賽五十四)と。

イスラエルは回復せらるべきものなり

然り而して或は云はん「余はイスラエル人がカナン之地に歸りエルサレムを再興すべしとは信せざるなり」と、噫此の如き人は此事に就き未だ神の黙示を讀まざるなり。實に聖書に於て此黙示よりも明晰なる言なし。我等は悉く其引照を擧ぐるの場所なきを以て唯だ其一部分をこゝに擧げ、切に讀者の悉く通讀せられんことを願ふ。又請ふ讀者自ら先入の思想と惡僻を去りて専ら聖靈により、神の詞より神の撰び愛し(十羅廿八)其目の眸子の如く貴べる斯人民の榮光ある未來を知らんとを。

第一、神アブラハムを召し給へる事(創十二)

第二、神アブラハムに約束し給へる事(創十二二一七、同十三〇十四一)又イサクに約束し給へる事(創廿六〇)又ヤコブに約束し給へる事(創廿八〇一十一十五)

第三、土地を記録したる事(出廿三〇卅一、民卅四〇卅十一〇廿)

第四、一部分所有する土地の事(王上四〇)

第五、不従順の罰を預言されたる事(利廿六〇十四一卅九、申四〇廿)

第六、イスラエル人の罪(士二〇十一一十九、母上八〇六、王下廿一〇十)

第七、記憶すべき約束の事及復歸の確實なること(利廿六〇四十一四十五、申四〇三十一、同三十三二、同三三〇一、廿一、慶九〇十一一十五、何一〇十、十一、同二〇十四一廿三、同三〇四、五、賽二〇二一五、同九〇六、七、同十〇廿一廿三、同十一〇十一十六同十九〇廿三一廿五、同廿七〇十二一十三、同卅三〇廿一廿四、同四十三〇一七、同四十九〇十三一廿六、同六〇一〇一廿二、同六十一〇一十一、同六十二〇一十二、同六十五〇八一十、十七一廿五、同六十六〇十九一廿四、耶三〇十二一十九、同十一〇四、五、同十六〇十四一十六、同廿三〇三一八、同廿九〇十一十四、同卅〇一〇一廿四、同卅一〇一〇四、同卅二〇卅六一四十四、同卅四〇七一十七、同四十四〇廿八、同四十六〇廿七、廿八、同五〇四一八、十七〇二十、結六〇八一十、同廿〇卅六、四十四、同廿八〇廿四一廿六、同卅四〇十一卅一、同卅六〇一卅八、同卅七〇一廿八、同卅九〇廿三一廿九、同四〇一四十八〇、米四〇一七、同七〇八一廿、番三〇八一廿、亞二〇四一十三、同三〇一十、同八〇一廿三、同十〇五一十二、同十二〇一十四、同十三〇一十九、同十四〇一廿一、馬三〇十一十二、太廿三〇卅七

卅九、路十三〇卅四、) 異邦人のエルサレム蹂躪より異邦人の時満るまでに至る(十
十五〇七七一廿八、徒) 此使徒行傳は使徒は預言者等の言を約説せしものなる故甚だ
緊要の者とす(詩五十一〇十八)

儲諸君よ忠實にこれらの諸章を熟讀玩味したらんには現今猶太人がカナンの土地に歸
り得んどの確乎たる信仰を有せることを駭かざるべし。彼の正統派の猶太人は強くこ
の希望を執れり、又かゝる大なる光明を受けたる我等はこの愕くべき聖言の證を拒む
能はざるなり。或は此等の預言はバビロンより歸る時成就されたるなりと云ふことを
得べしと雖も、決して然らず、これ實に第一の者にして又第二の回復あらんとす

第二の回復

その日主はまたふたゝび手をのべてその民ののこれる僅かのもをアツスリヤ、エ
ジプト、パテロス、エテオピア、エラム、シナル、ハマラ及び海のしまじまより贖
ひたまふべし。(賽十二)

第一回復の時に於て、歸らんことを希望する人民のみバビロンより歸りたるも(賽七〇)
其餘の者は同處と埃及と其他各處に於て止まりたり、然ども第二の回復に於ては一人
だに殘されざるべし。

汝たとひ天涯に逐やらるゝとも汝の神エホバ其處より汝を集め其處より汝を携へか
へりたまはん(申卅) 懼るゝなかれ我なんぢとゝもにあり我なんぢの裔を東よりきた
らせ西より汝をあつむべし、われ北にむかひて釋せといひ南にむかひて留るなかれ
といはん、わが子輩を遠きよりきたらせ、わが女らを地の極よりきたらせよ、すべ
てわが名をもて稱へらるゝ者をきたらせよ、我かれらをわが榮光のために創造せり、
われ曩にこれを造りかつ成をはれり(賽四十三)

主エホバかく言たまふ我みづからわが群を索して之を守らん、牧者がその散たる羊
の中にある日にその群を守るごとく我わが群を守り之がその雲深き暗き日に散たる
諸の處よりこれを救ひざるべし、我かれらを諸の民の中より導き出し諸の國

より集めてその國に携へいりイスラエルの山の上と谷の中および國の凡の住居處にて彼らを養はん(結三十四〇)。

彼等すなはち我エホバの己の神なるを知らん是は我かれらを國々に移し又その地にひき歸りて一人をも其處にのこさなければなり、我わが靈をイスラエルの家にそゝぎたれば重て吾面を彼等に隠さじ主エホバこれを言ふ(結卅九〇廿)。

第二回復に於て歸りたる者はひとり猶太人のみなりしと雖も、第二回復に於て歸り來る者はユダ(二種族)及びイスラエル(十種族)なるべし。

その時ユダの家はイスラエルの家と、もに行みて北の地より出て我なんぢらの先祖たちに與へて嗣しめし地に偕に來るべし(耶三〇)。

我汝等の上に人を殖さん是皆悉くイスラエルの家の者なるべし邑々には人住み墟址は建直さるべし(結卅六)。

イゼケルはユダとヨセフとに擬したる二の木片を執るべしと命せられたり。其木片を

彼の手に於て合すれば即ち一の木となるべし。而して人民其意味を尋ねたるとき彼は左の如く答ふべしと命せられたり。

かれらに言ふべし主エホバかく言たまふ我イスラエルの子孫をその住めるところの國をより出し四方よりかれを集めてその地に導き、その地に於て汝らを一の民となしてイスラエルの山々に居らしめん一人の王彼等全体の王たるべし彼等は重ねて三の民となることあらず再び二の國に分れざるべし(結卅七〇)。

第二回復に於て、彼等は棄られ又驅逐せらるゝ爲きたりたりと雖も、第二回復に於て彼等は永く止まる爲に歸り來るべし、彼等は尊敬を受け安全に住居し、異邦人民は茲に來り集るべし。

我かれらをその地に植つけん彼らは我がこれに與ふる地より重ねて扱とらるゝことあらず汝の神エホバこれを言ふ(結九〇)。

彼等は重て國々の民に掠めらるゝ事なく野の獸かれらを食ふことなかるべし彼等は

安然に住はん彼等を懼れしむる者なかるべし(結卅四)。

我なんぢらの上に人と牲畜を殖さん是等は殖て多く子を生まん我なんぢらの上に昔時のごとくに人を住しめ汝らの初の時よりもまさされる恩恵を汝等に施すべし汝等は我エホバなるを知るにいたらん、我わが民イスラエルの人を汝らの上に歩ましめん彼等汝を有つべし汝はかれらの産業となり重て彼等に子なからしむることあらじ(結卅六、三十七)。

なんぢ前には棄られ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが今はわれ汝をどこしへの華美よの歡喜となさん、なんぢら亦もろくの國の乳をすひ王たちの乳房をすし而して我エホバなんぢの救主なんぢの贖主ヤコブの全能者なるを知るべし(賽十六、十五)。

なんぢ目をあげて環視せよ、これらのもの皆あひあつまりて汝がもとに来るべし、エホバ宣給く、われは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまごふべし、主エホバいひたまはく、視よわれ手をもろくの國にむかひてあげ旗をもろくの民にむかひてたてん斯てかれらはその懐中になんぢの子輩をたづさへ、その肩になんぢの女輩をのせきたらん、もろくの王はなんぢの養父となり、その後妃はなんぢの乳母となり、かれらは其面を地につけて汝にひれふし、なんぢの足の塵をなめん、而してなんぢわがエホバなるを知り、われを俟望むもの、耻をかうぶることなきを知るならん(賽四十九、十八、十九)。

末の日にいたりてエホバの家、諸の山の巔に立ち諸の巔にこゑ高く鐘へ萬民河の如く之にながれ歸せん、即ち衆多の民來りて言ん去來我儕エホバの山に登りヤコブの神の家ゆかん、エホバその道を我らに教へて我らに其道を歩ましめたまはん、律法はシオンより出でエホバの言はエルサレムより出でければなり(米四〇)。

萬軍のエホバかく言たまふ國々の民および衆多の邑の居民來り就ん、即ちこの邑の居民往てかの邑の者に向ひ我儕すみやかに往てエホバを和め、萬軍のエホバを求め

んと言んに我も往くべしと答へん、衆多の民強き國民エルサレムに來りて萬軍のエルサレムに攻め來りし諸の國人の遣れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍

ホバを求めエホバを和めん(亞八〇廿)。

のエルサレムに攻め來りし諸の國人の遣れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のエルサレムに攻め來りし諸の國人の遣れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍

のエルサレムに攻め來りし諸の國人の遣れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍

第一回復に於ては、イスラエルは盲目にして其心の頑固なるが爲め、耶蘇を拒絶し且磔殺したり。然ども第二の回復に於て彼等は此事を悔悟し清き心を以て耶蘇を承け、

耶蘇は彼等の王となるべし。

我ダビデの家及びエルサレムの居民に恩恵と祈禱の靈をそゝがんに、彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀、獅子のために哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん。その日にはエルサレムに大なる哀哭あらん、是はメギドンの谷なるバダテリンモンに在し哀哭の如くなるべし、國中の族おのゝ別れ居て哀哭べし、即ちダビデの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭き、

タンの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん、レビの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭き、シメイの族別れ居て哀哭きその妻等わかれ居て哀哭かん、その他の族も凡て然り、すなはち族おのゝ別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭べし(亞十二〇)。

彼ら悲泣來らん我かれらをして祈禱をもて來らしめ、直くして曠かざる途より水の流に歩みいたらしめん、我はイスラエルの父にしてエフライムは我長子なればなり萬國の民よ汝等エホバの言を聞き之を遠き諸島に示していへイスラエルを散せしもこれを聚め牧者のその群を守るが如く之を守らん、然ごかの日の後に我イスラエルの家に立んところの契約は此なり、則ち我わが律法をかれらの衷におきその心上に録さん我は彼らの神となり彼等は我民となるべしとエホバいひたまふ(耶卅一〇)我汝等を諸の民の中より導き出し諸の國より集めて汝等の國に携いたり、清き水を汝等に灑ぎて汝等を清くならしめ汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝等を清むべ

し、我新しき心を汝等に賜ひ新しき靈魂を汝らの衷に賦け汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝等に與へ、吾靈を汝らの衷に置き汝らをして我が法度に歩ましめ吾律を守りて之を行はしむべし、汝等はわが汝らの先祖たちに與へし地に住みて吾民とならん我は汝らの神となるべし、我汝らを救ひてその諸の汚穢を離れしめ穀物を召て之を増し饑饉を汝らに臨ませず(結卅六〇廿一)

彼等またその偶像とその憎むべき事等およびその諸の愆をもて身を汚すことありし、我かれらをその罪を犯し、諸の住處より救ひ出してこれを清むべし、而して彼等はわが民となり我は彼らの神とならん、わが僕ダビデ彼等の王とならん彼ら全體の者の牧者は一人なるべし、彼らはわが法律にあゆみ吾法度を守りてこれを行はん、彼らは我僕ヤコブに我が賜ひし地に住ん是其先祖等が住ひし所なり、彼處に彼らと其子およびその子の子長へに住はん、吾僕ダビデ長久にかれらの君たるべし、我かれらと和平の契約を立ん是は彼らに永遠の契約となるべし、我かれらを堅ふし

彼らを殖しわが聖所を長久にかれらの中におかん、我が住所は彼らの上にあるべし我かれらの神となり彼らわが民とならん(結卅七〇廿一)

われ我群の遺餘たる者をその逐はなちたる諸の地より集め、再びこれを其牢に歸さん、彼らは子を産て多くなるべし、我これを養ふ牧者をその上に立ん彼等は再び慄かず懼すまた失じとエホバいひたまふ、エホバいひたまひけるは視よわがダビデに一の義き杖を起す日來らん、彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし、其日ユダは救を得イスラエルは安に居らん、其名はエホバ我儕の義と稱へらるべし(耶卅三〇)

我彼等の上に一人の牧者をたてん其人かれらを牧なふべし是我僕ダビデなり、彼は彼らを牧ひ彼らの牧者となるべし、我エホバかれらの神とならん、吾僕ダビデかれらの中に君たるべし我エホバこれを言ふ(結卅三十四〇)

預言已に斯の如くなれども、以西結四十四章より四十八章に記載せる殿堂の如き者は、

未だ嘗て建築せられたることあらざるなり。されば公平の思想を有する讀者には、右の如き確實なる證據によりイスラエルの爲に、榮光ある未來の回復あることを充分曉れるなるべし。然れども或は言ん、以上の預言は皆精神的に解すべきものなりと。而してこの人々は、之を夫の迫害に逢ひたる教會に適用せんと欲して、預言の意義の勢力を失ふに至れり。之大なる誤解なり。我等は信ず、其説は重にポロの書翰の論文を誤解したるに原因するを。彼會て「イスラエルより出るもの悉くイスラエルに非ず」と云ひしかども、教會とイスラエルとを混同せしにあらす、又彼は我等を信仰に由てアブラハムの後裔となせしときも、教會とイスラエルとを混同せず、我等は都て獨り信仰に由て立と論定せり。哥林多前書十章卅二節に於て彼はユダヤ人と異邦人と神の教會とを明に區別し、教會とイスラエルとは特別の幸福ありと爲し、又明にユダヤ人たるも實のユダヤ人にあらず、靈の割禮を受くる者は實のユダヤ人なりと明示せり(羅二〇)。而して衆多のイスラエル人はたとひ不信に經過したりと雖も、ポロは

尙明に救濟せらるべき殘餘ありと公言せり(羅九〇廿七、一〇五)。彼はイスラエル人のため其一身を犠牲にし、或はイエスより絶れ沈淪に至らんも亦我願なりと迄なほ彼等を愛したり(羅九)。彼は彼等の未來の尊榮を、彼等自らの橄欖に接るべき原樹の枝と見做したるが、これ死たるもの中より生るに同じきものなり(羅十一)。イエスは路加傳廿一章廿四節に於て「人々刀に斃れ且俘はれて諸國に曳れエルサレムは異邦人の時満る迄は異邦人に蹂躪さるべし」と云ひ、ポロは此奧義を次ぎて「異邦人の數盈るに至らん時」、「救者はシオンより出でヤコブの不虔を除去かん」と云へり(羅十一〇廿六)。

上文の事は左の引證によりて益々明かなるべし。

亞歷士八章及九章に於て、恐懼すべき災のイスラエル人の頭上に來るべき事を云へり、彼等が諸國民の中において箴われざる間は、主は彼等を集め又植つけ倒れたるメビデの幕屋を再興せざるべし。故に使徒及長老等のイスラエル人と教會とに就て、此問題を議せん爲め始めてエルサレムに會合せしとき、聖靈は前章の預言をヤコブに示

し、次で神はイスラエルの箴むる間に異邦人中より彼の名を崇むる人民を取り出し、然る後ダビデの幕屋を再建すべしと教へ給ひたり（徒十五〇十）故に我等はこれら回復の預言は、イスラエルとエルサレムとが恢復せらるる前に先だちて、取りいださるべき教會には適用されざることを知るなり、又これら回復の預言の殊に格別なるの一は、人民に向て云はすしてイスラエルの諸山に向て宣告されたる事にして、これ其文字通の意味の如く行はるべき者たるや明なり（結廿六〇）

イスラエルは恢復せらるべし、然ども恐るべき患難はまさに其頭上に来らんとす。彼等の罪は高き山の如し、其罪の中に耶蘇の寶血を流せる罪あり。況んや無辜の血の罪をや（大廿七〇）會て信誠なる預言者が左の預言を記録せるとき之を見たり。

エホバイスラエルとユダにつきていひ給ひし言は是なり。エホバかくいふ我ら戦慄の聲をきく、驚懼あり平安あらず、汝ら子を産む男あるやを尋ね觀よ、我男が皆子を産む婦の如く手をその腰にをき且その面色皆青く變るをみるは何故ぞや、哀か

なその日は大にして之に擬ふべき日なし此はヤニブの患難の時なり然も彼はこれより救出されん（耶卅〇）

汝らはその惡き途とその善らぬ行為を憶てその罪とその憎むべき事の爲に自ら恨みん（結卅六〇）

然り彼等は悔改めまた自己を恨むべし。又彼等は患難の海を通過すべし（亞十〇十一）また多の人々死し其三分の一救はるべし。

我その三分の一を携さへて火にいれ銀を熬分ることくに之を熬分け金を試むることくに之を試むべし、彼らわが名を呼ん我これにこたへん、我これは我民なりと言ん彼等またエホバは我神なりと言ん（亞十三）

總て上文の事は携擧の時に非ず、地上に来る時に於て直接にイエスの降臨と關係せるものなり（圖解を見よ）蓋は主はシオンを築き其榮光を以て顯るべしとあればなり（時百二〇）而して此事は諸國民及びイスラエル人に審判（撒後一〇七一）を施行せん爲

め、彼が火焰の中に其聖徒（教會）と偕に顯る、時にあり。而して其イスラエル人は三分一にして（太廿五〇）國民中に算へられざるものなり（民廿二）、又この事は主は精鍊者として坐し給ふ時にあるなり。

視よ我わが使者を遣さん、かれ我面の前に道を備ん、また汝らが求むるところの主すなはち汝らの悦樂ぶ契約の使者忽然その殿に來らん、視よ彼來らんと萬軍のエホバ云たまふ、されど其來る日には誰か堪えんや、その顯著る時には誰か立えんや、彼は金をふきわくるもの、火の如く布晒の灰汁の如くならん、かれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごとく坐せん、彼はレビの裔を潔め金銀の如く彼等を潔めん、而して彼等は義をもて献物をエホバに献げん、その時エダとエルサレムの献物はむかしの日の如く又先の年の如くエホバに悦れん、われ汝らにさかづきて審判をなし、巫術者にむかひ、姦淫を行ふ者にむかひ、偽の誓をなせる者にむかひ、備人の價金をかすめ、寡婦と孤子をしへたげ、異邦人を推枉げ、我を畏ざる者どもにもかひて

速に證をなさんと萬軍のエホバ云たまふ（馬三〇二）實に彼は苦痛の籠中に於てイスラエル人を潔むべし（賽四十八〇十、詩六十六）而して後彼等は起り且輝くべし蓋はかれらの光明來るべければなり（賽六十一）

我等はイスラエルは如何にして恢復せらるべき乎に就て註解せば一卷の書を充すを得べし、然ども我等がなさんと欲する所の者は、これ皆預言の争ふべからざる事實にして、我主の顯現と直接に關係せる者なることを示すに在り、この事は我等すでに充分に仕遂たりと信するなり。

而して彼等の恢復の方法、彼等の悔悟及イエスを接くるに就ての細目は、左まで我等に緊要の事に非ず、但すでに教會の會友たる者は擧擧の時先取上られ、イスラエル人の經過せんとする凡ての事を脱るべければなり（路廿二）この細目を熟考して、多くの幸福を得たる者おほきは眞なり。我儕はたゞ後に記すところの羔の婚姻席上に於る結果を與ふるに過ぎざるのみ、然れども我儕は教會がとりさられ、此書が十分に明示せ

られたる時に非ざれば、今日これらの事件の順序をイスラエル人が實驗するが如く明かに辨別するに能はざるなり(但十二)故に我儕は其は末の日に起るべしと云へるを知るを以て足れりとすべし(賽二)夫の偽キリストは今まさに來らんとす(撒後二)來らんとするユダヤ人の王なるイエスに遭ひ且淪亡さるべし。而して其民なるイスラエル人は遠からずして歸るべし(結三六)

預言の講究

或は恐くは預言を講究するを以て無用の事となすものあらん。蓋イエスが「其日其時を知る者なし」(太廿四)と云ひ、「父の其權にて定め給へる時期は爾曹が知る所にあらず」(七)と云ひたればなり。あゝ讀者よ、預言の講究とは只期日を定め後事を先見することのみと思考すべからず。主は其來るべき時日を我儕に明示せざるは固神意のあるゆえんなり。主がハリサイ人を偽善者と呼べるは其時の徴を辨別しあたはざるに因るに非ずや。又彼は我儕に注意せよと命じ、預言の書を講究するの幸福なることを

言給へり(歌一〇三、同二二二〇)。

ペテロは我儕に向て、預言の確言に注意すべきを忠告せり(彼後一)「聖書は皆神の默示にして教悔と督責と人を道に歸せしめ又義を學ばしむるに益あり」と(提後三)茲に引證せる聖書の過半は皆預言よりなるものなれば、信者はよく之に注意を加へ講究したらんには、現在の義務に就て迷ふことなきのみならず、自己現在の行為上多くの光明を發見し、其職務の爲に實際的獎勵を受くるや疑ふべからず。信仰は神の性質及び其道を知るの程度によるものなれば、若しこれを知る愈々廣く愈々深ければ其靈的眼界益開けて以前よりも一層明了になるべし。然りと雖もすべて上文の事を十分に了解せんと欲せば、只聖書を皮想し未來の事件を預想するを以て足るものにあらず、其深淵なる教訓と、其説明、其譬喩、其歴史の中に含める驚くべき意義と、來るべき榮光に關する輝ける預言の深味を十分に解せざるべからず、右の如く神の言を學ぶことは、今代の懷疑論者に應ずるに最も緊要のこと

なるべし。そは神が我儕に其武庫の兵器を供し、其戦争學校に於て我儕を操練するものなればなり。以て發見四十一章廿一節より廿三節に於て神が預言の眞理を用ひ哲學者や懷疑論者を如何に敗北せしめしかを見よ。又同書四十二章八、九兩節に於て、彼は其すでに成就したる預言を以て、彼の説示したる新事件の成就する保證となしたり、即ち其言に曰く「事未だ兆さざるさきに我なんならに聞せんと」。又同書四十三章九節と十二節に就て、彼は其説示し給ひたる言、及び自ら神なりと云ひ給ひしことの證人としてイスラエル人を異邦人に指示したり。視よ今日のユダヤ人は其指示の如くあるにあらずや、其預言は即ちかれらの歴史に非ずや、然らば則ち神の外亦たれか能くかれらをかくの如く知り得んや。神の外たれか能く彼等の歴史を先見し得んや、されば此神の武器を以てすれば能くすべての詭辨、反論を一刀兩断にするに足れり。故に神は我儕に向て預言を藐視することを禁じ給へり(撒前五〇廿一)「あゝ地よ地よ地よエホバの言を聞け」(耶廿二〇) (廿九)

實行的教理

我儕はすでに主の來臨は、全く空論にあらざることを斷言せり、故に今こゝに左の引照を列記し、以てイエスと聖徒が我等を獎勵せん爲その再臨を預言したることを擧げ、以て我儕が所論の證となさん。

- 第一、豫備に關し(太廿四〇四十二、四十四、同廿五〇十三、可十三〇)。
- 第二、節制に關し(撒前五〇二一、六彼前二〇)。
- 第三、悔改に關し(徒三〇十九一、三三)。
- 第四、誠實に關し(太廿五〇十九、廿一、路十二〇四十一、二一、四十四、同十九〇十二、二十三)。
- 第五、耶蘇を羞恥と爲すべからざることに關し(可八〇)。
- 第六、俗化に反對すべきことに關し(太十六〇廿一、六、廿七)。
- 第七、節制及び温和なるべきことに關し(腓四〇)。
- 第八、忍耐に關し(來十〇廿六、一、廿七)。

- 第九、肉慾を殺すことに關し(四三〇三)。
- 第十、眞實に關し(九一〇)。
- 第十一、全身全靈全生の實際的聖潔に關し(撒前五〇)。
- 第十二、宣教上の忠實に關し(提後四〇)。
- 第十三、使徒の命令を守るべきことに關し(提前六〇十)。
- 第十四、牧師の勉勵及び潔白に關し(彼前五〇)。
- 第十五、己を清潔にすることに關し(約壹三〇)。
- 第十六、イエスに居ることに關し(約壹二〇)。
- 第十七、夥多の誘惑及び信仰の試に耐ゆべき事に關し(彼前一〇七)。
- 第十八、我儕主の爲困苦を忍ぶことに關し(彼前四〇)。
- 第十九、言語を謹しみ及び神を敬ふ事に關し(彼後三〇十)。
- 第二十、互に相愛すべきことに關し(撒前三〇十)。

- 第廿一、我儕は天國の市民たるを忘却せざることに關し(腓三〇廿)。
- 第廿二、イエスの再臨を愛慕すべきことに關し(提後四〇)。
- 第廿三、キリストを渴望すべきことに關し(來九〇廿)。
- 第廿四、キリストは其事業を成就し給ふことを信ずることに關し(腓一〇)。
- 第廿五、この希望を末世迄確守すべきことに關し(歌二〇廿五)。
- 第廿六、世の慾を去り神を敬ひつゝ生活することに關し(多二〇十一)。
- 第廿七、イエスの來臨は不意なるが故に豫備すべきことに關し(路十七〇廿)。
- 第廿八、輕々しく審判すべからざることに關し(哥前四〇)。
- 第廿九、充分に報を希望すべき事に關し(太十九〇廿)。
- 第三十、使徒等に喜ぶ時あるを保證すべきことに關し(哥後一〇十四、腓二〇)。
- 第卅一、イエスの來るべきを知りて聖徒を慰むることに關し(徒一〇十一)。
- 第卅二、イエスの再來を信仰する者は主の日に於て無上の恩寵を蒙り全く責なきこと

に關し(哥前二〇)。

第卅三、キリストの再來は信者が待つところの重なる事件なることに關し(撒前二〇)。

第卅四、キリストの再來は恰も從僕と會計する時の如くなるべき事に關し(太廿五〇)。

第卅五、天下萬民を審判することに就て(太廿五〇卅一)。

第卅六、聖徒の復生に就て(哥前十五)。

第卅七、聖徒の現出することに就て(哥後五〇四)。

第卅八、其來臨はイエスにありて寐れる死者に就て悲む人を安慰する泉源たることに關し(撒前四〇十一)。

第卅九、其來臨は不信者の爲に患難の時を來すことに關し(撒後二〇)。

第四十、其來臨は主の晩餐を食する毎に紀念せらるゝ事に關し(哥前十二)。

等の豫言これなり。以上は新約全書中再來の教旨につきて述べたるものにして、今之

によりて以て各人の本心に訴へ、論證を擧げ勸告の効を奏せんが爲めに引用したるな

ればなり。

り。願ふにかなる他の教旨といへども、再來の教旨は實際的のものは非ざるべし。

唯恨むらくは紙數限ありて十分に引照を擧ぐる能はざることを、然れども讀者もし聖

書につきて之が引照を求めば更に大なるものあらん。又我儕は擧げにかゝる諸章と顯

現にかゝる諸章とを區別せず、蓋二つとも上に記したる實際的の目的を遂る動機とな

ればなり。

左に掲ぐる聖書の概表は、重にロンドン出版にかゝる小冊子より抜抄したるものな

り。これ其引照と講究とに便利なるため、明瞭なる證句を加へたる千年期再臨の簡略

なる趣旨なり。引用したる句は簡なれども聖書につきて、能その引照の前後を讀まば

大なる利益なるべし。又前の圖面と對照し見ば、イエスが新郎及王として來臨するこ

とに關する事件の順序を會得することは、左まで困難に非ずと信するなり。

主の來臨及來臨後教會の將來に關する諸事蹟の事

真理の靈の來らんとき……來らんとする事を爾曹に示すべければなり(約十六〇十三)。

主の約束

我なんぢらの爲に所を備へに往く。もし往きて我なんぢらの爲めに所を備へば又來りて爾を我に納くべし(約十
二)。

我往きて復なんぢらに來らん(約十四〇)

暫せば爾曹我を見じ復暫くして我を見るべしこれ我父へ往くなり(約十六〇)

我又爾曹を見ん其時爾曹の心喜ぶべし(約十六〇)。

主は約束を履行する事

主はその約束し給ひし所を成す運にあらず(彼後三)

認はず所の望を動かさずして固く守るべし蓋約束せし者は誠信なればなり……其日いよ／＼近よるを見て益

此の如くなすべし(來十〇廿)

今片時ありて來るもの來らん必ず運がらじ(來十〇廿七)

蓋主の歸り給ふこと近ければ也(羅八)

我必ず速かに至らんアーンメン(黙廿二)

教會の希望

彼は復御を預ふことなく己を認むものに再び顯現て救を施すべし(來九〇)

我等の國は天に在我等は救主即ちイエスキリストの其所より來るを待(腓三〇)

我儕も自ら心の中に歎きて予と成んこと即ち我儕の身体の救はれんを俟(羅八〇)

我等の主イエスキリストの願はれんとを俟てり(哥前一)

望む所の福を望待しむ(多二〇)

キリストの忍耐に導き給はんことを(撒後三)

その子の天より臨るを待と云へば也その子は即ち神の死より甦らしし處のイエスなり(撒前一)

携擧

主が其教會の爲めに新郎となりて空中に來臨する事

それ主御令を使 長の聲を神の靈を以て自ら天より降らん(撒前四)

キリストに在りて死し者甦へる事

福音の再臨

我儕みな末の鐘の鳴んとき忽ち瞬息間に化せん(哥前十五)〇

イエムに由る所の既に寝れるものを神かれと偕に携へ來らん(撒前四)〇

キリストにありて死し者先に甦へり(撒前四)〇

キリストに屬ける衆の人は生へし、……キリストの來らん時彼に屬するものなり(哥前十五)〇、

死し人よみがへりて甦す(哥前十五)〇

強き者に懸され……強き者に懸され……靈の体に懸する也(哥前十五)〇四、

生て選れる信徒の化すへ事

主の來らん時に至り活て存れる我儕は直に寝れる者よりも先たし(撒前四)〇

我儕悉く寝るにはあらす我儕みな末の鐘の鳴らんとき忽ち瞬息間に化せん(哥前十五)〇五十一、

主キリストは我儕が卑しき体を化して其榮光の体に象らしむべし(腓三)〇廿、

われら土に屬ける物狀を有かくの如く後また天に屬るもの、狀を有ん(哥前十五)〇

此くするものは必ずくちさるものを衣此死るものは必ず死さる者を衣るべし(哥前十五)〇

生死 兩者共に携擧せらるる事

我儕の主イエスキリストの臨り給ふこと及び我儕が彼の所に集るとを願ふ(撒後二)〇

我等いつまでも主と偕に居らん事

我等いつまでも主と偕に居ん(撒前四)〇

我居る處に爾曹をも居らしめんさて也(約十四)〇三

我に事ふる者は我が居る處に居ん(約十二)〇、

我居る所に我と偕と居りて我が榮えを見んとな(約十七)〇、

彼等いつまでも亡びず(約十)〇

我生れば爾曹も生ん(約十四)〇、

彼と偕に生かしめんさて也(撒前五)〇

極て大なる窮なき靈を我儕に得せしむる也(哥後四)〇

窮なき世嗣(來九)〇十五、

此より再び出るとなし(黙三)〇、

基督の臺前

われら必ず皆キリメトの台前に出で善にもあれ惡にもあれ各々身に居りて爲し所の事に循ひ其報を受へべきものなれば也(哥後五)。

我等皆キリメトの台前に立つべきものなり。……我等各己の事を神に訟ふべし(羅十四)。

われ速に至らん必らず報應あり各人の行ふ所に循ひてこれに報ゆべし(歌二十二)。

工の顯著

各人の工は明かならん夫日これを顯はす可れば也此は火にて顯はれん其火各人の工の如何を試むべし(哥前三)。

然れば王の來らん時迄時いまた至らざる間は審判する勿れ主は幽暗にある陰れたる情を照し心の計謀を顯はさ

ん(哥前四)

善報

若その建る所の工たもたば賞を得ん(哥前四)。

各々行ふ所の善によりて主より報を受けん(弗六)。

惡報

不義を行ふ者は亦其不義の報を受く(羅三)。

若その工やかれなば損を受くまは己は火より脱出るか如く終には救はれん……蓋は神の報は善きものなれば也

この報は即ち爾曹なり(哥前四)。

報賞

各々功力に循ひて其賞を得ん(哥前三)。

上へ召して賜ふ所の褒美を得ん(腓三)。

報賞なる嗣業を受けん(四三)。

王國(雅二) 生命の冕(雅二〇二) 義の冕(一〇八) 榮の冕(彼前五) 擡ざる冕(哥前九)。

神の己を受する者の爲めに備へ給ひしもの(哥前二)。

其時各人神より譽を得べし(哥前四)。

羔と教會の婚姻

羔の婚姻の期すてに至り其婦すてに自ら備をなし畢りければなり。婦は潔くして光ある細布を衣、これを許さ

此細布は聖徒の義なり(黙十九〇)

キリストは教會を愛し其爲めに己を捨て給へり。蓋は點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮ある教會を自ら己の前に建ん爲めなり(弗五〇廿七)。

- (一) 擄奪と現出の間七年間を患難の時代と稱す (一) 其初年に於て彼の猶太人中未だ信せずして歸國せしもの
- (二) 又彼等の殿を建て居る者は (三) 偽基督と共に七年間關係すべし (四) 三年半の後彼の敵は其罪の人たるの眞性を顯はし (五) 其時預言しつゝあるさころの二人の証者を殺し (六) 久しく守り來りし日々犠牲の式を絶し (七) 而じて聖所に自己の肖像を立てん (八) 惡魔及その使等は地上に投落され彼等の時過れるにより大なる憤怒を發すべし (九) 預れる三年半の間に於て (十) 聖都を蹂躪する事あり (十一) 竟に患難の時至らん。その患難は世の始より今に至るまで有じ又後にも有ざる患難にして (十二) 彼の偽基督 (十三) 及其預言者の下に (十四) 全世界の上に取り來るべし (十五) 獸の像を拜するも拒むものは死に處せられ (十六) 其印跡を受けざるものは非常の迫害を受くべし (十七) エマヤ國民中三分の一は其患難中を経過し (十八) 主によりてエルサレムに召集され (十九) 流涕より深めらるべし (二十) 此に於てか諸國民はエルサレムの都城を圍ひ其市民を脅かし其半を捕へて囚虜となさん (廿一) 其後人民は偽基督に背きイスラエルの聖者なる主に歸し (廿二) 地上の諸王

はエホバの神及びキリストに抗し戦を挑まん(二十三)其時主出來り(二十四)聖徒と共に敵を亡しその人民を救はん(廿五)

以上の引照左の如し

- (一) 但九〇廿七、默十一〇 (二) 賽六〇十三、同十七〇十、十一、同 (三) 賽六十六〇二、三、(四) 但九〇廿七、同十三〇五 (五) 十八〇四、五、同六十六〇三、四、(六) 默十一〇二、三、(七) 約五〇 (五) 但九〇二十七、撒後二〇三、(六) 默十一〇七、但九〇二十七、同十二〇八 (八) 太廿四〇十四、十三 (九) 默十一〇七、同十三〇一 (十) 三十七 (十一) 但九〇二十七、同十二〇八 (十二) 耶三十七、但十四、默十三〇 (九) 七十一 (十) 廿七、默十三〇五 (十一) 廿四、默十一〇二 (十二) 二〇一、太廿四〇二十一、默十三〇 (十三) 但七〇二十一、廿五、撒後 (十四) 默十三〇十一、十五 (十五) 默三〇 (十六) 默三〇十四、十七 (十七) 二〇三、默十三〇一、八 (十八) 七、同十九〇廿 (十九) 十五 (二十) 默三〇 (二十一) 結廿二〇 (二十二) 賽二〇廿一、廿五、同四〇四、結廿二〇十五、同二 (二十七) 默十三〇十 (十八) 亞十三〇 (十九) 結廿二〇 (廿) 賽二〇廿一、廿五、同四〇四、結廿二〇九 (廿一) 亞十四 (廿二) 賽四〇三、同十〇廿 (廿三) 詩二〇一、三、默十六〇十四、十 (廿四) 賽十三〇九 (廿五) 亞十四 (廿六) 耶二〇二十七 (廿七) 同十七〇十四、同十九〇十九 (廿八) 賽十三〇六、同十六〇五、六、何五〇十五、一、亞十四〇三 (廿九) 亞十二〇九、十、馬四〇一、三、路廿二〇廿八

顯現

地の王となりて主の來臨の事